

や基督を單に一箇の私人と考がふるを得たるにもせよ、彼もし眞箇に人ならば、是れ少なくとも人性に一箇の健全なる點ある者にあらざるや。然れどもキリストは偶發の私人に非ず、又偶發の私人なる能はず。基督は第二のアダムたる無比の地位を占め、必然に是れ「凡ての人の首」たる者にませり(哥林多前書十一の三)。故にキリストの墮落したまふ迄は人類は未だ全くは亡びざる也。キリストの完全無缺なる生活は是れ凡て人間に屬する者を糾合すべき中堅を呈す。逃脫者の多きにも拘はらず、神は其見んと欲したる所の者を基督に於て見たまふ、而して人間生活の始めてエデンに赫灼として起れる當時に於ける如く復も甚だ善しと曰ふことを得たまへり(創世記一章三十一節)、是故に基督に於ける人間生活を再び臨み瞰て神は證言するを得たまへり、曰く「此は我が心に適ふ我が愛子なり」と(馬太福音書三の十七)。

## 第十二節

第二のアダムも亦第一のアダムと均しく其試煉を蒙むらざるを得ざりき。降誕神子の該試煉は決して理會するに容易なる者にあらず。該件の真相を審かにせば先づ基督は罪を犯し得ざりし者なること明らかにならんとす。基督は如何に罪なきにもせよ罪を犯すを得べき者、如何に實際は過を免かれたるも、過ち得べき者なりと思ふは、是れネストリウスの眼を以て基督の身位を觀じたる也。是すなはち基督が二重の身位を有する者、——神が人に宿れる者——と思惟せられたるを示す耳。

基督の身位は唯一なり、而して該身位は神なる身位なり。聖パウロが言へる如くに「己を虚しうして(腓立比書二の七)人間の制限に服したまへる時にも、基督は決して其本然の聖徳を虚しうした

まへるに非ず。彼は其大愛の如く唯該聖徳(其愛の一部分たる者)をして新しき境界に彰はれしめたまへる耳。但し此金剛不壞の聖徳が彰はれたりし境界は是れ人性の眞箇なる、進歩的なる境界なり。其身位は神たりと雖も、基督は之が爲に人間自然の必需と刺激とを超越したまひしに非ず。其實狀は全く之に反せり。人中に於ては哲人は時としては其智力上の講究に全く心を奪はれて下等の必要物をば忘るゝに至るありと雖ども、基督に於ては然らず——少なくとも通例は然らざりき。キリストは須臾も物に心を奪はれたること無し。一切萬事に常に心を配るは彼が完全圓滿なる性質の一部なりとす。彼は何事にも自ら凝滞することは絶て無りき。イエスは或る時には其周圍の艱難を全く嘗試ひ盡さんために、故らに其本然の恬靜を破りて、自ら「心を働めたまひ」と曰ふは(聖約翰福音書十一章三十三節)、是れ彼が平素なしたまへる所の一例證たる也。彼が神なることは即ち彼をして何人よりも善く人間生活の諸成分を十分に味はふことを得せしめたり。彼は固より原罪なき者なるを以て、彼の吾人に生れつける惡念邪慾をば毫も有する無く、斯る惡徳をばたゞ天性自然に之を厭ひ得たまへるのみなりしかども、己に人たるが故に、亦始祖を試みたる所の件々には己れも試らみられざるを得ざりき。肉軀上の痛苦と快樂を感ずるに於ては基督の神經は天下古來何人の神經よりも鋭敏なりき。彼が人間としての智力と想像は絶大なる者にして、アリストートル、アレキサンデル、ダンテ、ラファエル(Raffaello)、ベートーベン(Beethoven)の如きは只これが萬分の一なる而已。斯の如き力ある身を以てしては前途に横はれる功名の望を制することは容易なるを得ざりしならん。彼が人たるの靈は其神性と相合するの親密なるに由て一種特別なる試煉にこそは遭ためれ。



是故に基督は墮落することを得たまはざりしかども、試らみらるゝことをば得たまへり。固より惡を擇ぶの危険は無かりしかども、善を擇ぶの困難なるをば感じたまへり。彼れの人性は其神性(すなはち彼れ自身)より離るゝ能はざりしと雖も、神性と歩履をそろへて追随せんと努むるに於ては苦しきを得ざりき。基督の人性は健全なる者にして、其種類に於て善なる事物にのみ傾き得たる者なる事は即ち却て斯る事物を一層高等なる目的に犠牲にすることを更に甚だ難からしめ得たる而已。されば我等の主は唯に試みらるゝことを得たまひし而已ならず、又他の何人よりも試探を強く感じたまひしと言ふとも過言には非じか。然のみならず試探者の詐術と鋭鋒は何人にむかひてよりも基督にむかひて百千倍巧みに凝らし、精妙に狙ひし者なりき。基督は只野において四十日のあひだ試みられたまひしと思ふは誤まれり。該四十日間は實に是れキリストが其バプテスマ(受洗)の前には堪へざりしが如き新試探の特に猛發したる者なり、然れども該試探の終において惡魔「暫く彼を離れたり」と云ふ(路加四の十三)、是れに意味深き文字ならずや。是れは暫時の和静のみ、暴風雨は再び土を捲て來らんとて力を養ひつゝありき。

該試探(または誘惑)は眞に人間の試探なるが故に、之に克てる勝利もまた眞に人間の勝利なり。固より是れ人が毫も神恩の援を借らずして偏へに人意の力を以て克ち得たる勝利には非ず、されど亦是れ神が其人情を緘黙し無視し、單に其神力を以て克ち得たる勝利にも非ず。實に是れ其全身を人間の境界に投じ、單に人間に普通なる武器——祈禱、斷食、醒戒等——を以て戦かひたる者の勝利なりとす。キリストの生活は其兄弟たちの生活(希百來書二章十三)とちなしく信仰の生活なりき。キリストの聖潔なる生活に競ひ倣はんと欲する人々ありて若此聖潔なる生活に訴た

ふるれば、基督は必ず己の如く彼等も亦就て以て聖潔を學び得べき源を彼等に指示して、己れが生活の聖潔なる所以の要訣を教へたまへり。基督一時人に對へて言たまひけるは、「何ぞ我を善といふや、一りの外の善き者は無し、即ち神なり」(馬可福音書十の十八)。キリストが地上に在る間に試探及び誘惑を却ぞけ得たまひしは、己れの人間以上なる神力を引き出し來りて然るを得たまひしには非ず、唯謙りて一箇の受造物として神を頼みて然るを得たまひし者とす。彼の依立の地位(受造物が神に依立するの地位)たるやキリストは己れ自ら己れたることを止むるに非れば棄るを得たまはざりき、然るに己れ自ら己れたることを止むるは固より有り得べからざる者なりき、却つて該地位をば基督の人間たる能力自由に之を擇びたる者なりき。

基督教會に於て基督は罪を犯すを得べからざる者なりしと教ふるは、決して擅斷の教説にあらざ。罪を犯す能はざるは機械的なる不能力——誘試の物象に對して本來無頓着なるの結果——には非ず、况てや是また決して特別の保護などよりせる結果に非ず。キリストが全たく人たるの事は其攻撃點をして非常に夥しからしめき、實に一點として攻撃をかうむらざるは無かりき。彼は凡ての事に我等の如く誘なはれたれど罪を犯さざりき(希百來書四章十五節)。

第十四節 但し基督は毫も罪といふ者なく——「疵なく汚なき羔の如く」(聖彼得前書一章十九節)なりしと云ふは、唯是れ基督の救贖生活の一方面——其消極的なる一方面——なる而已。基督の生活を完全なる者と言ふは一層廣大にして且一層積極的なる觀念なりとす。此生活は實に自ら犯せる罪(積極の罪)に由て汚れたること無きのみならず、又其光彩は怠慢の罪(消極の罪)に由て



減せられしこと絶て無し。一として缺けたる所は無りき。決して是れ初より鑄定せられて少しも變化する能はざりし完全に非ず、却つて是れ年より年と増進し開發し來れる完全なり。無罪潔白にして孕まれつゝ、彼が人性の劈頭形作は完全なる形作なりき。——即ち彼は完全なる嬰兒となり、完全なる童子となり、完全なる青年となりぬ、彼もし三歳にして又は十三歳にして、三十歳の老成力を有せしならば、斯の如くなる能はざりつらん、如何となれば完全なる幼童とは必ず幼童の諸の状態(條件)に完全に服應したるを謂ふ者なれば也。初より未だ嘗て基督を去らざりし聖潔は漸々に彼が人性の吸収する所となりて、益々其が有と思惟せらるゝに至りぬ。御父の意旨は、幼稚の時に在りてや、完全にはあれども天性自然に遵がひたる者なるが、成長するに及びてや自由に自ら選びて生活の規矩準細とはなしぬ。彼は唯に御父の旨を示されたる時に之に遵ひたまひしのみならず、其用ひたまひし意味ふかき辭を以て言へば、自ら進んで之を求めたまひし也。即ち曰く、「我は我が旨を行ふことを求めず、我を遣はし、父の旨を行ふことを求めるなり」と(聖約翰福音書五章三十節)。斯の如くにして彼は「順がふことを做ひ」(希百來書五の八)しが、其之を做ひしは決して今まで些少なりとも順はざる所ありしに因るに非ず。全く是れ順從なる者は單に外部の命令に服する者たる間は完全の順從にあらず、命令者の全精神を洞察してこそ始めて完全なるを得るなれ。是故にキリストの生活が完全なりしと云ふ時には是れ絶大の洞察的順從を其中に包含する者とす。其地位の卑しければ卑しきは益々完全なるに易し。人々高妙の程度に上るに隨がひて生活上の關係ますます複雑なる者となりて、其千差萬別なる責任は之を盡すに彌々難きを見る。キリストの生活は其關係と責任とに於て古來生活したる何人の關係と責任よりも千萬倍複雑なる者

なり。善良の一小兒たることは單純なる者なりき、ナザレの村にて工作場に善良の一青年たることは單純なる者なりき、然れども古來何人といふとも——善かれ悪かれ天下の政權を肩に擔へる帝王、または天下の諸教會を統率せる法王といふとも——一人としてイエスが盡すことを要したまひしが如き困難なる事業を有せしはあらず。イエスは一切の人類を慮ることを要し、一切の歴史を考ふることを要したまへり、各箇人の福利はイエスの一言一行一思想に係れり。彼は單に萬人中の一人として生活することを要せしのみならず、人類全體の完全なる首として生活することを要せり。而して彼は之を完全に盡し了りぬ。神の明察も之に對しては間然すべき者あるを見ず。基督の生活は始より終にいたるまで完全なる者なれば、復改良すべき處ある無し、其細目の一點をだも變改すれば則ち之を傷つくるに至らん耳。

**第十五節** 我等の主が順從の生活中一點の特に稍詳論するを要する者ありて存す。基督の地位たるや人間平常の生活上に於て人類の首たるの地位に非ず。基督の臨みたまへる世間の紊亂極まれる状態を考がふれば、該地位の困難は非常に増大して到底吾人が思想力の及ばざる所ならんとす。第一のアダムは試みられたり、然れども苦痛を以てしては試みられざりき。彼に於ては順從はたい自ら制し己れに克つに在りしのみ。萬事かれが爲めには易くせられたり。之に反して第二のアダムの爲には萬事難くせられたり。「彼は受る所の苦難に由て順がふことを做ひ」たり(希百來書五の八)。彼は唯に初人のごとく其稟賦を妄用することを慎まざるを得ざりしのみならず、又御父の旨に遵がふために萬種の苦痛と攻撃を蒙むらざるを得ざりき。聖潔無瑕にしてダビデの位を嗣ぐべかりし者は流寓者として馬廐に生れたまへり。其生れたまふや忽ち之が生命をと



らんとする者ありて速に他邦に避けざるを得ざりき。其年若き時に於ては落魄せる貧寒の家不如意の中に職業に従事したり。然る後世間に出るに及びてや、野における斷食と艱難を手始として、千態萬狀の患難を具さになめつくしぬ(以賽亞書五十三章二節を見よ)。人の子は枕する所なし(馬太八の二十)といふ長太息の御辭に見えたる如く、四方に流寓して定まれる家も無かりし外、當にもならぬ人の施物(供養)に衣食し、飢渴疲勞寒暑等に身を苦しめ、友に死なれ知己を失なへる外——基督は更に是よりも深大なる憂愁を多く懷きたまへり、即ち失敗と排斥とに遇ひては憂へ、己れの禍に他人をして與からしめては憂へ、己が家庭内に誤解および輕蔑の事あるを見ては憂へ、教權を握れる人々より猛烈の怨憎と刻薄我慢の曲解を受けては憂へ、心と身を益しやり給へる群衆が向背去就の定まり無きを見ては憂へ、其隨從者輩が盡く己を棄てて去りしを見ては憂へ、其弟子の一人には賣られ、一人には誓言を以て否まれ(知らずと言はれ)、最後には神にさへも見すてられたるが如き狀あるを見ては憂へたまへり。基督が我等を贖ひたまひしは唯に其身に罪なきに由るに非ず、唯に善く順がひしに由るに非ず、是れ苦難を以て試みられたる且完たうせられたる順從に由れる者なり、實に此苦難たるや其品質においては萬殊に、其結合に於ては智巧に、其量に於ては莫大にして、キリストの想像力を以てするに非れば、到底想像するを得ず。されば其順從の榮光は此に存す——曰くイエスは斯る患難を経て神の旨を行なふことを毫も憚かりたまはざりしのみならず、却て之を成すことを喜び樂しみたまへり。「視よ我きたらん我がことを誓の巻にしるしたり、我が神よ我は聖意に志たがふことを樂む、爾の法はわが心の内にあり」(詩第四十篇七八節)。「若なんぢら我が誠を守らば我が愛に居らん、我わが父の誠を守りて其

愛にをるが如し、我この事を爾曹に語るは我が喜なんぢらに在りて爾曹の喜を盈しめんが爲なり」(聖約翰福音書十五章十、十一節)。

**第十六節** 我等が主の生活の順從は其死の順從を以て冠冕とす。「既に人の如き形狀にて現はれ、己を卑くし、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受るに至れり」(腓立比書二章八)。一の意味に於ては是れ斯る行徑に最も適せる者、或る他の意味に於ては是れ斯る行徑に最も適せざる者とす。我等は竊かに信ず人類は必らずしも下等動物のごとく常に死すべく定められたる者に非ず。人類が地上の生活は固より無限に長かるべく定められし者には非れども、終には光榮ある辭世に達すべき者とは定められてありき。

是の如き光榮ある辭世は嘗て實際イエスの手裏にありき。夫の變容(Transfiguration)は是れ他界に光榮を以て轉ずるの發端なること殆んど疑がふべからず、斯の如き榮轉はこれ基督が人として經きませる完全なる發達の適當なる終極なりとす。我が主の一身の試煉につきて之を言へば、彼の時には己に爲すべき所を盡く成し了して、今は只報賞をとるの一事あるのみなりき。是に於てか舊約書中の二聖徒——通常の死門を經ずして世を辭し去りし者——忽然として現はれ、「死ぬべき者」の今や基督の身に於て「生命に吞まれん」とするを賀せり、基督が「天より賜ふ其屋を著」たまはんことは近づきぬ(哥林多後書五章二、四節)。イエスと彼等との話を聽きたる人々は、彼等がみづから「榮光の中に」ありて、イエスの將に「エルサレムにて世を去らんとする」異種の辭世を語れるを耳にせり(聖路加九の三十一)。然るにイエスは故らに此榮光の門を辭して、尙しばらく



「信なき曲れる世」の中に交はらんと欲し、其弟子たちを戒めて我が「死より甦がへる迄は此事を人に告る勿れ」と諭したまひぬ。罪ふかき人類の罪なき首たる者の義務の一部分として、基督は其始めたるごとくに終まで行を要せり。己に基督は其兄弟たちが自家の身上に招致せるが如き小苦難どもを免かれんことをば要めたまはざりき、而して又最大なる苦難を免かれんことをも要めたまはず、又之を免かれしめらるゝことをも甘んじて承け給はざりき。彼は嘗て其御父より生命を捐て復之を得よと云ふが如き命令を受けたり（聖約翰十章十八節）、而して此命令をはたすことを毫も猶豫したまはざりき。彼は死なざるを得ずして死にしに非ず。死ぬることを擇びて死にたまひき。

皆かくのごとく人を愛し御父に順ふの精神を以て其凱然たる辭世を故らに自ら棄てたまひしは即ち救贖の價を基督の死に予ふる者とす。聖ペルナルドの名言に曰く、「神に悦ばれしは基督の死にあらざ、基督が死なんことを自ら擇びたまひし意旨なり」と。基督の死は其以前の生活と離れて孤立する者にはあらざらん。是れ今まで基督の美德たりし所の者——最も辛き苦難の下に於て完全なる受造物的の忠順を以て欣んで順がへる所の美德——が最上に凝集して煥發したる者とす。使徒は謂へらく、イエスの全生活は其死にいたりて大成せり、而して其生活たるや始より終まで正義の渾然たる單一行にして分割すべからず、其神の聖意に全く合するの事に由てアダムの大過謬をば償ひ得て遙かに餘りありと。即ち曰く、「一つの罪より罪せらるゝ事の凡ての人に及びし如く、一つの義より義とせられ生命を獲ることも凡ての人に及べり。それ一人の逆に由て多く罪人とせられし如く一人の順に由て多く義とせらるべし」（羅馬書十章十八、十九節）。

## 第十七節

イエスは何故に然か大いなる寒心を以て死を厭ひたまひしかは人々の屢怪しむ所なり。ソクラテスやセチカの如きは從容として死に就き得るに、イエスは「驚き怪しみ且思ひ惱み」(sore amazed)云々、馬可福音書十四章三十三) ためりと云ふ。即ちイエス宣はく「我魂いたく憂へて死ぬるばかりなり」と(同章三十四)。彼は己に久しく死を期しをりしかども、此の時までは宛がら未だ十分に死の何たるを感じたまはざりし者のごとし、而して今や之を預想するだも死せんとす。是れ果して何の故ぞや。

按ずるに希百來書中なる著明の一句は此點を明かにする者に似たり。曰くイエスは「神の恩によりて萬人にかはりて死をあぢはへしめられたり」と(希百來書二章九節)。近今の某學者が感佩すべき文字を以て證したる如く、萬人中唯イエスひとり眞に死をあぢはへたまへり。或る人々は生來遲鈍且無頓着にして、死をあぢはふに必要なる想像力に乏し、或る人々は死は氣を弱らすべき者なりと知りて故らに之を觀想することを拒み、如何なる者にもせよ之を耐へんと斷乎として其神經を強む。基督教徒には死の苦楚は己に過さりぬ、其故何ぞや、他なし、是れ全く基督死して復甦がへりたまひたれば也。而して基督教徒は殆んど死すと曰ふべからず、只是れ小樂境よりして大樂境に移るの事なる爾。但し基督が人間たる靈と魂と體を以て死と對峙したまへる時には、未だ一人として是より先きに凱歌を奏して死を通過せし者あらず。死の怖るべき爪牙は尙ほ依然として在りき、イエスは之を竭くして無くするは己れが任なりと知り給へり。彼は天然と假胃とを論ぜず、凡て何等にまれ無頓着を以て死の爪牙を鈍らせしに非ず。却つて彼は己れに與へ



んとせられたる麻醉劑を退ぞけ、斷乎として其人間たる諸能力を悉く活動せしめつゝ、死ぬてふ事の怖ろしさを千尋の底にまで測りたまへり。イエスは其苦を受くること能はざる神徳(Divine impassibility)を待みて死を耐へしに非ず、却つて其人間たる知覺を無限の苦痛にまで推擴めんために其神性を之に貸したまへりといふこと謂ふべけれ。死の本然なる惨苦を増大し得たるが如き件々は一として缺くことを許されざりき。

基督もしセネカの快き浴室裏に於て、若くはソクラテスの魔酔毒に由て、世のために死したまひたりとも、世は多分贖なはれしならん、されど聖パウロは基督が順從中の一大要素として附加して曰く、キリストは唯に死にいたるまで順がひしのみならず、其死は即ち「十字架の死」なりと(腓立比書二章八節)。十字架の磔死をキリストに蒙むらしめたる羅馬人が該死刑を如何なる者と思ひしかば人々の善く知る所なり。「奴隸の極刑」とは是れシセロが該刑罰を呼びたる語にあらざや。實にシセロは思へらく拉甸語は文字に富めりと雖も、是の如き刑罰を羅馬の市民(如何に兇惡なる者にもせよ)に加ふるの大惡無道を十分に名状すべき語に窮すと。然るに萬事を宗教の光に照して見るユダヤ人にとりては、是また幾千百倍も厭ふべき者と思はれたり。此種の刑には天罰てふ特別な意味の半ば迷信的に附着せるあり、此事たるや「木に懸る者は神に詛はるゝ者なり」て法律法の語(申命記二十一の二十三)に與へたる種々の解釋に本づける(或は幾分か本づける)者ぞす。赤裸にして刺されたる軀を是の如く天地の間に宛がら天地兩方に棄てられたる者のごとくに掲ぐるに比ぶれば、其他の刑は——石擧の如きすらも——寛なる者と見えにき。此千萬忌むべく懼るべき者の中に在て一元素といふともイエスの味はへずして過ごせし者はあらず。肉

體の苦楚、恥辱、失敗の念、恐懼、己れの愛に報ゆる世人の憎惡、——諸る是の如き苦難は無比の敏感覺を以てキリストの感ずる所となれり、此感覺は能く此等の苦難を其之を構造せる成分にまで分析し、且其が全體の輕重寛猛を仔細に量定したり。之を總ぶるに、彼は其杯を飲はして一滴をものこさざりき。

### 第十八節

肉體上および想像上における死の慘苦は——固より強く感じたまひしとは雖ども

——是れキリストが死ぬる時に苦みたまへる苦難の一小部分のみ。其死が罪と連なれるところ即ち是れ死の「刺」なりけれ(哥林多前書十五の五十六)。上に説きしごとく、人間の死は不自然なる物なり。キリストに取りては其生活の初よりして苦痛を負ふことは大いなる自枉自屈なりしと謂はざるべからず、如何となれば、事の常よりすれば苦痛は必ず天地の法を破るより來る者にして、天地の法に全く順ふより來る者にあざれば也。併し乍ら紊亂せる世界にありては、或る苦痛を免かれんこと逆も能はざりき。然るに諸餘の苦難を負つて後つひに己れの生命を捨てたまはんことは殆んど意想の外なりしと見ゆ。基督は其の完全なる行爲を以て十分に生活の權を獲得したまへり、然るに神は彼に死なんことを求めたまへり。是れ罪の告白を基督に求めたまふに均し。想ふに此解釋はこれ敬虔なる人々が由て以て基督の救贖を領會するに最も容易なる道なるべし。

天啓を離れて我等もし既往の罪行を賠償するに要する物を想像せんと試むるならば、十分に以前の罪惡を懺悔し將來に善を作さんとの志を堅く立つる外、殆んど他に案出すべき者ある莫から



ん。既往につきては何をも言はず、單に將來に匪行をなすを慎しむは、未だ足らざるや明らかなるべし。但し將來に非を改むることに加ふるに既往の罪に對する外部の刑罰を以てしたりとも、其未だ足らざるは同じく明らかなるべし。神のごとき眞に正義なる者は犯罪者の心をして一變せしむるに至らざるが如き刑罰を蒙らしめたるのみにては決して満足したまはず。神は犯罪者が其罪を憎むこと神の自ら之を憎みたまふが如くならんことを要めたまふ。罪人をしては罪を其の眞の光に照して見せしめ、其眞の尺度を按して量らしめざるべからず。此事の一たび十分に成るや此上満足の賠償に尙何の要する者あるかを見るに難し。

然るに此事たるや正に是れ罪人が己れ自ら爲す能はざる所の者なり。罪人は十分に己れの罪を悔ることを得ず。人は十分に己れの罪を感ずることを得ず。罪自身よく其人の之をなすを妨ぐ。罪人の目は盲し、罪人の良心は痿ゆ。彼はすでに聖行の理想を失なへり、故に理想と實際との差を玩味するを得ず。完全に健全潔白なる良心に非れば、罪惡の憎むべきを十分に曉る能はず、又は之を十分に言あらはす能はず。されど基督は之を爲すを得たまへり。己れの感覺を鈍くすべき自らの罪としては毫も無かりしかば、基督は聖律法の要求を十分に感ずることを得たまひ、其(聖律法の)變易すべからざる公義を認むることを得たまへり、是を以て基督は其兄弟たち「人類」が缺點の如何に大いなるかを測知するを得たまへり。基督は罪を攻むる神の震怒に毅然として飽きでも承認を呈することを得たまへり、——即ち毫も該震怒の發し來らざらんことを願はず、何にまれ公義に満たざる物を以て之を和らげんことを乞はず、其震怒せらるゝ罪を成るべく軽くすることを試みず、何の酌量減刑をも求めず、直ちに是が全部を容れ、之が全軀の憤恚に對して同

情を表したまへり。

此事はイエスを「忠信なる」祭司長(希百來書二の十七、三の二)及び「義なる」保惠師(約翰第一書二の一)と稱するが中に籠りて見ゆ。斯の如く完全に飽きでも父神の義鞠に應ずるの事は則ち我等の救主を扶けて其苦難を終まで忍ばしめたる所以なりとさへも言はれたるあり、彼は啻に罪よりせる暴逆のために刑罰を受けるのみならず、又刑罰を與へつゝありき。「罪は刑罰の日わが心の中にあり、救贖の歳すでに來れり、我見しに助くる者なし」——即ち彼が罪を見たまふごとくに罪を見る者なし——「我見て一箇も扶ふる者なきを奇しめり、是故に我が替われを救ひ、我がいきどほり我をさへたり(以賽亞書六十三章四五節)。但し是は或る有罪なる第三者を懲罰する事を認諾したる者の忿怒には非ず。彼が然か其正當なるを深く感じたまひし忿怒は己れの頭上に餘々として燃かゝれり。該忿怒に然か恐るべき力を與へたる者は即ち是なりき。彼れの上に「我等すべての者の不義」はあかれたり(以賽亞書五十三章六節)。彼は善きにつきても惡きにつきても其兄弟と同一視せらるゝを感じたまひき。彼等(人々)が罪を犯したるは己れが咎にはあらざれども、基督はみづから之に責ある者のごとし給へり。彼等の恥は基督の恥、彼等の罪は基督の罪なりき。基督は人々に對して其占めたまひし地位よりすれば、決して人々を打棄る能はざりき、又よしや打棄ることを得たまふとも打棄るを肯へんせざりき。基督の人々を愛したまひしことは極めて深ければ、争でか此の如きこと有るを得んや。基督は人々を愛せるに由て之に與したまへり、故に人々どもに苦み、人々のために苦まざるを得ず。基督もし其救贖の事業を永久に大成して、重ねて反復もしくは補足を要せざらしめんと欲せば、是非とも罪の全苦辣——即ち全



人類の罪の苦辣——をことごとく一度(只一度)味はざるを得ず。彼は人類の良心を代表する者なれば、孝子忠臣の愛心を以て罪の爲に悲まざるを得ず、而して其悲む所は皆に其及ぶ處に於て眞摯善良ならざるべからざる而已ならず、又其蓋はるべかりし全領分を蓋はざるべからず。各箇人の良心が、——一方に於ては神の義なる要求を明かに曉り、他方に於ては邪惡なる私心を以て之(神の義なる要求)に抗抵したる事を明かに悟るに及びて、——會得すべき所を盡く極度にまで會得するは基督の任なりき。是の如き醒悟若し罪ある良心にとりて苦き者ならば、况て毫も罪なき良心にとりてをや。心の潔き母は其子の恥辱および惡行を羞ること其子自身が最も悔悟したる時におけるよりも却つて深きを屢とす。幾分か是と同じく——勿論母と子と相互に於けるはキリストが其救はんとして自ら身を殺したまへる人々に於けると同日の論にはあらねども——キリストは萬人の罪愆を己れの人間たる潔き良心に負ひたまへる時に於ては天下の悔悟者が一齊に感じ得たるよりは却つて深く苦惱を感じたまひつらんと我等は敢て信ず、——此萬人の罪愆たるやキリストこれを宛がら身みづから犯せし如く己れの罪愆として負たまひしには非ず、己れの罪愆よりは過ぎたる者として負たまひし者とす、如何となれば是れキリストが深く愛し其愛を以て己れと同視したまひし者の罪愆なりければ也。是其のキリストをして然か苦惱せしめたる所以なり。我等が己れの手を以て犯したる罪を悔る中には幾分の私利心ありて存すとも謂ふべし、然れども此に言ふが如き悔悟には毫しも斯る者ある無し、是れ此に在ては罪を犯せる者に對する愛と罪を怒れる者に對する愛、共に其力を合はせて一箇の苦惱——憂悶措く能はざる罪てふ念——に化したれば也。

此事は心中の觀想のみを以てして成し得べき者には非りき。生涯基督は他人の罪の己を圍繞せる思べき厭ふべき重荷を負はしめられたり。然れども始終キリストは幾分か是等の罪を遠ざかりてをり、此等の罪は數歩の外に置かれて、己れに外なる者、即他人の罪と見做されたり。人々との合体をして完全ならしめたる者は彼れの死なりき。今まで彼れの各筋繊維が憤怒と厭嫌とを以てふるひたりし諸罪惡は彼れの死に於て彼れが良心の奥底まで徹しぬ、是れ彼と我等とは一なりと會得せしに因てなり。彼は其自ら純潔なりと知れる高尚の地位より自ら枉げて俯念願垂しつゝ我等のために心閉かに中保をなしたまふべきには非ず、却つて我等と我等の諸惡とを取りて以て己れの有となすべくありき、是れ即ち彼が聖身の領分内に於て之を其當に然るべき如くに處置せんが爲めなりき。彼が身と我等が身との間に於ける最後の墻壁は死に於て毀たれ、而して我等が罪惡の大洪水は彼が魂に注ぎいりぬ、是れ彼が斷てる腸を以て之を容れ之を哀しみ之を去りたる満足の周到に由て贖なはれ清められ除かれんが爲なりき。自ら進んで甘受したる斯の如き死に於てキリストは人間の良心をして夫の破りたる神の律法に忠實に應答せしむ。

キリストの死は眞正の意味に於て刑罰なりしことは、聖書の中に明かに説き示されて見ゆ(今日の敬虔なる某信徒は之を否むとは雖も)。「彼はみづから懲罰をうけて我等に平安をあたふ」(以賽亞書五十三章五)。然し乍ら其刑罰は何に在りしかと問はば、以上に開陳したる如き考に於て之を求めざるべからず、決して彼よりも外部なる若くは枝葉なる物に就て之を求むべきに非ず。此の刑罰を構成せる者は即ち死其物なり、——即ち會得せられ嘗味せられたる死是なり。キリストは死するに加へて亦我等の罪を負へるに非ず、若くは我等の罪を負へるに加へて亦死せしに非



ず。キリストの死は——キリストのキリストたること彼が如く、又其死を感じることも彼が如くなるに由て——即ち是れ我等の罪を負へる者なりき。是の如く觀もて來れば。救贖事業の自然なること、單純なること、は全たし。

但し此にキリストの苦難中特別に擧説するを要する一方面ありて存す、是れまた精密に之を言へば彼が「死を嘗は」たる一部分なりと雖も、刑罰たるの相を最も明らかに帶ぶれば也。彼が負たまへる罪は極めて全たく彼れの肩の上に置かれたれば、遂に彼が心(知覺)にも己自から神に絶たれたるの感を生じぬ。是に於てかキリストは聖詩篇の句を以て叫びたまはく、「我が神我が神何ぞ我を棄てたまふや」と。是れ聖パウロが腓立比書(二章七節)にて神子降誕上に起りしと説ける御子の「虚己」が圓成したる時刻なりき。聖リオ(St. Leo)が言へる如く、此虚己たるや聖父と聖子との交通を破れる者に非ず、暫く之を停止せる耳。而して其然らんことは是れキリストの聖旨にして又御父神の聖旨なりき。彼が神性は其人性の中に退き入りたりと見ゆ、故に人性が感ずる所の苦痛には毫も輕減を生ぜざりつらん、却つて此苦痛たるや是れ神性獨能く人性をして十分に感ずることを得せしめたる者とす。彼が人性は全く孤立して其重荷を負ふべくせられたり、毫も人間の同情は十字架の下より之に達せず、毫も神の同情は天上より之に臨まさりき。神人兩方に對するの愛を以て張り裂けんばかりの御心は——宛がら天下の罪惡が己れの身に集中して神と人とに均しく厭忌せられたる者のごとくに——雙方より疎んぜられたるの感を懷かざるを得ざりき。其中神より疎んぜられたるの感極めて最も大いなる苦痛なりとす。「エホバは蹄をあしきもの、上に降したまはん、火と硫黄ともゆる風とは彼等の杯にうくべき者なり」(詩第十一篇の六八)と云ふ

が如き神の震怒の轟發するを忍ぶは、之を彼の徐ろに考へ靜かに決めて斷然見棄たるが如き冷々として寒殺せられんずる感に比すれば、却つて易き者とす、特別にも聖潔なる心魂にとりては殊に其易きを覺ゆべし。怒りて罰するは愛心——傷められたる愛心——よりす、然れども見棄ることとは唯これ厭嫌の徴ならく爾。烈火なせる怒は或は一たび洩れて靜まらん、然れども神が公義を按じて見棄たまひたる者にして、復た挽回すべからざる永遠の觀ある者には望の屬すべき無し。沈淪者の刑罰果して聖パウロが云ふ如く「主の面を離れて窮なく亡ぶる」者ならば(帖撒路尼迦後書一の九)、我等の主もまた幾分か之に似たる者を十字架上に味はひたまひしならんと思はる。固より御父は彼を棄たまひしに非ず、又一身上彼を怒りたまひしにも非ず、亦敢て然かするが如き態をも裝ひたまひしに非ず。然れども人類は有罪なる者とせられてありければ、其有罪なる宣告の果して如何なる者なるかを會得せしめられずんばあるべからず、イエスは人なりき、只彼ひとり該有罪の宣告の範圍の大いなる事および其正義恰當なる事を我等のために會得するを得たまへり。其死する時にあたりて基督の之を感ずるや極めて深くして、全く我等と同一視せられ給へり。我等の罪は基督と神との間に海のごとくに漲ざれり、而して其狂瀾奴濤の中より基督は叫びたまはく、「我が神我が神何ぞ我を棄てたまふや」。

第二十節 此見解を以て救贖の事業を觀ずるときは、夫の今まで思慮ある人々を屢感はしめたる代死(substitution)といふ語を借るを要せず。彼の語は聖經より出たる者にも非ず、又さのみ古き者にも非ず、故に基督教徒の深く愛惜すべき者にも非ず。實に該語は聖書の中より務めて



避けられたる者のごとし。之を救ふる如く見ゆる者は聖書の中にたゞ我が主の辭一ある而已、曰く——「人の子の來るも人を役つかふ爲にはあらず、反つて人に役つかはれ又おほくの人の代りて生命を予へ其の贖とならん爲なり」(馬太二十の二十八、馬可十の四十五)。但し原文にて此に用ひたる前置詞、唯此に一たび用ひたるのみなる前置詞(即ちアンチシテ、此に「代りて」と譯せる者)は代贖(ransom)てふ觀念に屬す、而して代贖といふ觀念は此にては借喻なる者なること今や明かなれば之を推擴めて教理とはなすべからず。之を文字のまゝに取るならば、其代贖は神にむかひてなせし者なるや、又は或る昔時の解釋家の説けるごとく惡魔にむかひて爲せし者なるやとの疑問に苦しまざるを得ず。若し前者を取るならば更に疑問の來るに遇はん、——曰く基督は我等に代りて如何なる代贖物をはらひたまひてか我等は之をばらふを要せざるに至れるや。是れ決して肉體の死には非ず、我等みな死ぬれば也。永遠の刑罰にはあらず、(斯る思想を否むすらも勝論にあらずとせば敢て言はんすとす)キリストは永遠に刑せられたる者にあらざれば也。併し乍ら實際は代贖といふ觀念は此の借喻中に強く感ぜらるゝ者にあらず。新約書中においてすらもモーセはイスラエル人の代贖者として遣はされたりと稱す(使徒行傳七章三十五節)。文字は同じ、然れどもモーセ其民を救ふために何物をか償ひたりとは何人も肯て主張せざらん。是故に基督「多くの人に代りて生命を與へたり」と云ふは「基督萬人に代りて死したり」と云ふと同一なる者には非じ。此「前置詞、アンチ、代りて」も亦該借喻の一部分のみ。按ずるに宛がら誤解の機を全く斷んと欲せる者のごとくに、聖パウロは我が主の此辭を引ける時に、其文章を改めて曰く、「彼れ萬人の爲に代贖として己れの身を予へたまへり」(提摩太前書二の六)と。聖パウロは彼の代贖或は代死

を表するが如き用例稀なる前置詞「アンチ」を單に他人の爲にするを謂ふ通常の前置詞「hyper」に易へたり。

されば新約書の言語を以て論ずる限りは、我等の主其の磔死に於て我等の身代りとなりたまひしと断定すべき理由あるを見ず。但し代贖の説(基督が我等に代り死して罪を贖なひたまひしとの説)に對する異議は其根柢するところ一前置詞の意味よりも遙かに深し。神の公義の大目的若し至當の刑罰を蒙むらしむるに在りたらば、恐らくは該説も一層宜きを得たる者ならん。然れども上に已に論ぜし如く是の如きは其目的にあらざりき、而して又罪を除くに非れば、相當(匹敵)する刑罰を代贖者に加ふるも神を満足せしむるを得ざりき。縱し然らざりしにもせよ、是の如くにして刑罰を加ふるの事は吾人が公義(justice)てふ最良の觀念にすべて悖反する者なるを奈何せんや。按ずるに正當の刑罰も有力なる友の懇請に由て或は輕減せられん、斯る良友は何等の苦痛をも危険をも、何等の汚名をも恥辱をも忍び、財産は更にも言はず生命をさへに棄て、其人の爲めに力を致さん、——是の如きは吾人が善く了解し得る所なり。其自ら犠牲にする所の大なれば大いなるほど其懇請する所に力あるべし。自然界にも人間界にも、天下には苦難普ねし、是等の苦難は、彼れの爲に此れの負ふ所あるの意味に於てすれば、是れ代苦なる者とす。即ち此等の者は恒に吾人が悲憫の情ちよび感歎の心を動かして止まず。例へば妻または父より來れる斯の如き獻身自捐を酌みて犯罪者の刑罰を輕減するありとも、吾人の感情には毫も戻る者あるを見ず、其罪人が此の愛心の切なるを見て前非を改たむる時においては殊に以て然りとす。然りと雖も、嚴密の公義を按じ、一定の刑法を以て、各種の罪過を罰すと公言する法庭にてありながら、無罪なる



良民の請を容れて有罪者の代りに刑に服せしめんことは全く有り得べからざらん。但し上に指點したる如き代苦は我等を導いて——固より法庭上における代人許容の思想には（達するに）非ず——却つて是よりも遙かに深遠なる者の思想に達せしむ。即ち是れ基督の贖罪を標する者とす、如何とすれば是れ世界を通じて徧く合一共同の責任あることを明かにすれば也、又（幾層著明なる例を以てすれば）是れ愛が世間合一の大鍵鎖たることを明かにすれば也。天下には單に此を以て彼に代ふるの事はあらず、活ける聯關ありて存し、自由なる且同情的なる同一ありて存す。我が救贖主が世界における地位は斯の如し。彼は人に代へらるべき者に非ず、彼は即ち人なり。此を以て彼に代ふることは彼が眞に他物たるに非れば能はず。然るに我等の主は他物にあらず、彼は己れを我等人類と一ならしめ給へり。彼は吾人を己れの中に吸収せり。彼れの愛が我等の各箇を己れに結びつくることは極めて親密なれば、彼は自ら我等と別なる者とは感ずるを得ず。固より彼の別は即ち有り、然らずんば相互の愛あるを得じ。然れども彼は其御父と同質なるが如く、又「我等と同質なる」也。彼が慈悲を以て我等のために成し就けたまへる合一の極めて完全なるや、凡て我等のものは悉く彼れのものと成れり、——我等の罪も亦其中に含まる、凡て彼れのものは悉く我等のものとなれり、——我等の罪を吞み消したる彼が義もまた其中に籠れり。我等の爲に彼は苦を受けたまへり、我等の代りに苦を受けしに非ず。彼は我等をして亦苦を受けしめん爲め、我等をして罪を見ること彼と同じからしめん爲め、我等をして罪を厭ふて罪に死すること彼が死したる如くせしめん爲めに、かの大事業を擔任したまへり。彼れは己れの生命を質として予へ、我等のために「保證者」となりたまへり（希百來書七章二十二節）、是れ我等をし

ても亦他日つひに彼れの如くならしめんが爲なり。

## 第二十一節

救主の身位を斯の如くに觀察する時は、救贖の全教理に與ふるに森嚴なる一致と貫通とを以てし、之をして牽強作爲なる行事には非ず自然に且單純にして我等が知る所および感ずる所と琴瑟相和する者なること明らかならしむ。此の見解は其れ自身に於ては正しく、而して又善く神に適ふ者なり。神の目的は遮ぎらるべき者に非ず、其徑に置かれたる障礙物のごときは却つて之が大力を證する勝利の徴とこそは成れ。罪惡は強暴を以て打克たるべき者にあらず。惡魔が寛待せらるるとの舊思想は頗る眞理ある者なるを覺ゆ。罪惡は道德を以て克服すべし、空身空手にて戰陣に臨み、罪に染れる人類に聖行をなさんとの新らしき奮發決心を注入する大愛を以て克服すべし。神は救贖の發意者なりと雖も、神なければ人は終に之を按出し得ざりしならんと雖も、尙これ救贖は人間の性質の眞状態に服して言動云爲せる眞箇の人の成したる者なりき。今まで犯せし諸の罪惡は盡く十分に賠償せられ、而して罪根の終に必ず滅絶せんとの保證は與へられたり。

但し救贖の性質は如何に人間の語もて説明せんと務むとも、其到底完全に説つくす能はざるは必定なり。是れ我等が智力の遠く及ばざる所なり。固より吾人は之を講求すべく、之に關する謬説を闢くべく、之を明かにすべき事實を蒐集參伍すべき者なるや疑をいれず。然れども之を爲すには危険あり、恐らくは人々救贖の事實を疎かにして、只其理論に止まらん。吾等はキリストの十字架其物に由て救はる、十字架に關して揣摩臆測する思想に由て救はるゝに非ず。我等恭しく肅



百九十  
みて主基督に其磔死の意味を問ふは甚だ肝要なり、然れども之を一種の哲學系として知ることの最も少なき人々は却つて之が力を經驗に由て最も善く知る所の者なること屢なるを見る。カルパリの山は第一に神學者の學校たるに非ず、悔悟者の逃避所たるなり。聖パウロは——「少くとも其傳道の一箇所に於て——救贖の事を一種の教説として闡明することを特に辭せり、彼すなはち言けるは、「基督の我を遣はししは……福音を宣へ傳へしめん爲なり」と、又語を之に加へて曰く、「キリスト我に言の智慧を用ひしめ給はず、是れキリストの十字架の虚しくならざらん爲なり」(哥林多前書第一章十七節)。

## 第七章

### 復活の主及び聖靈の降賜

死が基督ノ靈ト體トニ及ハセル影響—基督ノ復活ヲヨビ昇天—復活ノ主ガ中保ヲナシ又聖靈ヲ賜フノ新事業—聖靈ノ身位ヲヨビ發出—聖靈ガ我等ノ主ノ人性ニ對スル關係—世ニ於ケル聖靈ノ特有ナル職掌—神子降誕ノ前後トニ於ケル彼ガ事業ノ差別—教會ノ生出及ビ發揚—教會ハ基督ノ顯成體—聖徒ノ親友

第一節 我等が主の死は真正にして又完全なる死なりき。彼は嘗て「死にたる者となれり」(黙示録一章十八節)、而して(猶太の計數に依れば)三日かくてありき。該の三日があひだは天に其御父のもとには歸りたまはざりき(聖約翰福音書二十の十七)。彼は死の狀相に必要な諸の制限にことごとく服し給へり。使徒信經は、其最も新しき形に於ては、該思想を究めて、形體と靈魂とに之が及ぼせる二重の結果を説きて曰く、「死にて葬むられ、陰府に降り」給ひしと。普通に稱す我等が主の神性は其人性の靈肉兩部分中孰れよりも取り去られずして依然舊の如しと。此事は信經と聖經とに於て俱に尙靈肉兩部分を基督自身と同一視するが中に含蓄せられてあらん。即ち彼が肉體は或る意味に於ては尙彼なり、彼が靈魂も亦然り。「其處にイエスを置けり」(約翰福音書十九の四十二)と云ふの眞なるは「彼は陰府に遺ちかれず」(使徒行傳二の三十一)と云ふの眞なるに毫も異ならず。若し基督は斯の如くにして眞に死したまひたりと信ずるに非れば、基督の復活の意味を失なひ了らん。



但し死は基督の靈なる能力を痿しめざりき。却つて基督の靈は其死に由て活かされたれば(彼得前書三章十八)、善く慈悲と權能の大事業を成すことを得るに至りぬ。肉の舍をば脱したれども、尙人間の靈をば帯びて、基督は「往きて獄にある靈に宣へ傳へたり」(同彼得前書三章十九)。甞に彼は天國に於て忠信なる死者に伴なはんとの恩を垂れたまひしのみならず(聖路加福音書二十三章四十三)、又聖ペテロの語に依れば、自ら冥府——少なくとも罪を悔いずして神罰に死したりと見ゆる亡靈の幽閉せられざる處にまでも往きたまへり。固より身みづから彼處にて重ねて苦難を受けんために非るや言を俟たず。但し其冥府行の真正の目的および結果は如何なりしか得て聞くことを得ず、只言ふ死者に「福音」を宣へ傳へたりと(彼得前書四章六)。基督の苦死の力は——彼が未だ復活したまはざる前にすらも——冥界に於て已に感ぜられてありき。

是の如く物質の世界に於て基督の死躰はまた將に來らんとせる者の徴を與へたり。兵士の槍を以て蒙むらしめたる傷痕は只これ該の體が「已に死したる」者なるに由て負はされたる者とす。若し已に死してあらざりしならば、其傷痕は死をひきおこしたるならん。但しウエストコット教授が指點したることく、彼の傷痕より流れ出たる「血と水」は死の徴には非ず。血は普通の死骸より速かに流れ出る者にあらず。血と水(明汁或は血水)との分離は——或人が基督の死因と思へるが如き心臓の破裂に於ては——是れ解躰および朽敗の初なるべし。然るにイエスの罪なき肉躰は、死には服せしと雖も、朽敗には服すべき者には非りき(使徒行傳二章三十一)。是故に我等は斯く血と水の迸り出たるは寧ろ是れ基督の死躰が將に復活せんとする備をなしつゝありし徴と思はざるを得ず。否な唯に是に止まらず、兵卒が爲したる所および爲さざりし所は均しく表號たるの意味

ありて充ち満てり。即ち兵士どもは己が爲す所の意味を自ら識らず、天の指導するまにまに預言を二重に應驗せしめ、而して救贖が將に取らんとせる方法を不思議にも明らかにせり。基督の體が毫も摧かるゝこと無かりしは、夫の一骨も折るべからずと云餘越節の羔を以て預表せられたる者にして、是れ其將に起らんとせる教會の不二合一なるを教ふ、刺されたる脇より二重に迸出したる所あるは、新郎の生命を該教會に傳ふるの表號にして、血は即ち教會の罪の爲にする眞源泉たり、水は即ち教會の不潔を除く眞源泉たり、——此等の賜物は二種の福音的サクラメント(聖禮典)に於て世の終りまで教會に傳へらるべき者なりけり(聖約翰傳福音書十九章三十二——三十七節を見よ、又出埃及記十二章四十六節、及び撒加利亞書十二章十節、又十三章一節を參觀せよ。

**第二節** 我等の主の復活に關して歴史上の證據を查ぶることは本論の範圍内にあらず、此には只教理上に於ける之が意味を講究せんのみ。此事の肝要は極めて大いなる者にして、基督教會の全構造、及び基督教徒の全希望全信仰は一に之を以て基礎とす。聖パウロ曰く、「基督もし甦がへらざりしならば、我等の宣る所は徒然く、又爾曹の信仰も徒然からん」と(哥林多前書十五章十四)、彼は乃ち進んで論じて曰く、復活にして若し虚ならば、使徒の傳ふる使命は神の品質を妄證することの重大なる者と謂はざるべからずと。是故に基督の復活の性質を正しく理會することは甚だ切要なるを見る也。

輒近種々の形を以て起り、若干の人々には十分の解説と認めらるゝ左の臆説の如きは未だ基督教



會を満足せしむるに足らざるや言を俟たず、即ち其説に曰く、イエスの人徳その弟子を感服せしめしこと極めて大いなりしに因て、弟子たちはイエスの死後も尙其靈生きて已等の傍に在りとの感覺を脱するを得ざりき、而して——或は己れが彼に對する感情の非常に高尚になりざる自然の結果とし、或は神の特別な干渉によりて——彼等はイエスの幻形を心眼に見たりと。想ふに本件につきて吾人が有する證據は斯の如き性質の者にあらざると曰はゞ足りなん。弟子たちが耳目を以て經驗したる所は内界の感覺（如何に靈なる意味にては正しきにもせよ單に主觀的なるが如き感覺）には非ざりき、若し強て然りと云はゞ、是れ吾人が五官を経て覺得する所の事は悉く内界に屬する者（主觀的なる者）なりと云ふと同じき意味に於て然る者とす。門徒が見たる所の者は肉體にして、幽靈には非ず、彼等は之に捫りて其肉と骨とより成れる身なるを知れり、彼の人身は言辭を口に出せり、彼等が呈したる食物を食ひて消化せり、六週のおひだ屢々彼等に——其集りをせる時または其獨りをせる時に——顯はれ、長らく之と對話したり。復活に由て我等の主は更に物質なる有形の百物と活る關係を保つ身となりぬ。

併し乍ら我等が主の復活は其嘗て服したる自然なる下界上の状態に復歸したる者なりと思ふは、同じく是れ（少なくとも）福音の教を太く辱かしむる者とす。「靈なる體」の性質は如何なる者なるかは後に至りて論ずべし。此には唯言はんとす基督の復活は單に其連續して存在するの證據のみには非ず、單に其眞に神の子たるの證據のみには非ず、若くは又單に其贖罪の死の奏功と嘉納とを示すの證據のみには非ず、是れ新しき生命の性質を明かにする天啓、最も意表に出たる天啓なりき。該新生命は單に此生命の連續——ヤイロの子若くはラザロが甦へりたる生命のごとき者

——には非ず、是よりは遙かに高尚なる者なりき。

且又我等が主の復活は偏へに吾人人類の（利益の）ために現示せられたる者に非ず。亦之に由てイエス、キリスト自らも其人間たる生活の様態上に判然たる變化を來したまへり。若し然らざりしならば、我等人類に對しても眞正の天啓にはあらざりしならん、是れ外見論者（Doubtful）の間における神子降誕説と同じく、單に幻影なりつらん而已。我等の主の身位は之に由て大いに歩を進めたり、彼は其變容の際に窺ひ見たる靈なる状態を死に由て博し得たり。

但し死者の中より甦がへりし時に於てすらも、我等の主は其生前の事業および其死の功績に對する十分の報賞をば未だ受けたまはざりき。我等のためには彼は四十日の間その昇天の途上に滞留したまへり、此時にあたりてや彼の姿は固より已に榮化して、多分漸々に榮光の位に進むの途上に在りたる者ならん、然れど未だ其最後の榮位には達したまはざりき。復活に由て已に端を發せし者は昇天に由て完たくならざるべからず。昇天に由て基督は音に靈なる境界に進み入りたまへる而已ならず、又榮光赫灼たる境界に進み入りたまへり。是れ其嘗て「己を虚しうし」たる時に乘てたまひし物を悉く大いに恢復したまへる者なり。彼は再び其神たる榮光と特權を圓滿に享受する身となり給へり。凡て自ら卑くする羈束と制限はことごとく永久に終を告げたり。聖書の形似語を以て言へば、基督は重ねて「神の右に坐し」たまへり（希百來書十章十二）。彼は降世前に於ける如く單に神性のみを以てせず、今は肉體を具へて神の右に坐したまへり、即ち其取れる人性に由て毫も碍たげらるゝ無く、貧しくなる無く、弱くなる無く、彼は却つて遙かに富める者となりて天に坐したまふ。彼が帯びたまへる人性は決して廢せられず、又人性の特質を失ははざり



き、只其人性の今服する境界は果して如何なるか吾人が現能力の思量する能はざる耳。人性の各成分は尙此に在り、而して尙も純然たる人性なり、唯其及ぶだけの大圓滿境に至れるのみ、而して其屬する尊身位者が凡て之に向て要め給ふ所に容易く且迅速に應ずることを得るなり。我等の主が其第二の降臨に於て此下界の場裏に現はれたまはん時にも其人性は此の圓滿の榮光をすてじ。第二の降臨に於ては第一の降臨における如く主の一身上の生活には——少なくとも既に自捐の方向に於ては——境界の變化を伴ひ來たすこと無し。基督は嘗に信者の目に再び見えんのみならず、不信者の目にも亦見えん（黙示録一章七節）、但し其時には最早や弱き者としては現はれず、榮光を以て現はれたまはん。其時には基督自から枉げ光を輻みて人々の中に来りたまふに非ず、人々其の目より覆巾を除きて目のあたりには基督の真相を見たてまつらんとす。

**第二節** 死して甦れる後に非れば、實際世界を改造する事を始むる能はずとは我等の主が自ら明言し給ひし所なり。基督すなはち宣ふらくは、「一粒の麥もし地に落て死なざば、惟一にてあらん」と（聖約翰福音書十二章二十四節）。其人性に關する限りは彼れ彼の時までには諸餘の人々と同じき平面に立てり、而して彼れの死は新らしき勢力を人類に及ぼすの機とはなりぬ。基督は其死に於て成し就げし救贖を以て唯に神人間の障礙——神の恩恵が自由に我等に溢れ來るを妨たぐる所の障礙——を去除きたまひしのみならず、又キリストの死は單に其斷腸の話を以て人々の心を動かして善道に感化し易からしめたる而已に止まらず。換言せんに、キリストの死は單に死として然か世に勢力を及ぼせるにあらず、是れ新好地利——復活の門——に入るに缺くべからざる

方法として斯く天下を風化するを得たる也。我等若し今日救はるゝならば、——基督の降世後の歲月もし其降世前の歲月よりも高尚なる者ならば、是れ單にキリストの歴史上における既往の出來事（其最大なる者といふとも）の作用には非ず、是れキリストが尙も自ら活きをりて該の出來事の結果を吾人に施したまふ間斷なき高遠の活動に由る者とす。基督をして甚だ力ある意味に於て第二のアダムたらしめ、人々に新しき生命を與ふことを得せしめたる者は、則ち是なり。其死と復活によりてキリストは、第一のアダムのごとく「生命ある魂」となりたまひしに非ず、「生命を予ふる靈」となりたまへり（哥林多前書十五章四十五）、即ち是れ第二のアダムたるなり、但し第二のアダムたりとは雖も、唯に再び人類を一身に總べて代表せるのみに非ず、實際人類に父となりて、己れの生命を人間界に演出したまふ、而して其生命たるや「地より出で、地に屬する者」にあらざり「天より出で」たる者なるこそ尊とけれ（哥林多前書十五章四十七）。

基督が其受榮の後に於て人類のために新事業を肇めたまへる方法には二種の親密に相連なれる者ありて存す、即ち一は内部にして神に對する者、一は外部にして世に對する者是なり。前者は即ち無限に増したる中保力を行なふの事なりとす。希百來書を按ずるに、基督は其死を以て己が祭司の職を全たうし且止めたるには非ず、却つて其復活の朝に於て其祭司職に始めて眞に任ぜられたる者と謂ふべきが如し（希百來書五章五、六）。犠牲をさぐるの業は基督がカルベリに其生命を棄てたまひし時（預表たる犠牲を殺すに相當れる者）に終を告げしには非ず。該犠牲の全軀の眼目は該生命——一たび死を経て尙も永遠に活くことによて至極の度にまで富贖なる者及び聖潔なる者となれる生命——を神の至聖なる大御前に獻呈するに在りとす。猶太の禮拜式上に於て



は血を贖罪所の上に灑ぐことを以て此義を表せり(希百來書九章十二、二十四節)。斯くて基督は其慈悲の業を人々のために全たうせん爲めに幔幕の内に入れり、彼處にありて彼は「神の前に顯はれ」つゝ、今は下界の薄弱なる生命を以てにあらざ、直ちに「眞實の天」に在て、人々のために中保をなしたまふ。而して其仲保の方たるや己れの帯べる使命を全く盡したるの徳に由て最も盛んにして之を拒む者なし。其中保の性質および方法は如何なるべきかは我等の推量の遠く及ばざる所なり、然れども受造物の必需が凡そ斯の如くにして之が首生たる者に由て代表せられんことは道理あるの事なりと吾人は感ぜざるを得ず、是れ基督は唯に理想的に於てのみならず、又物界より靈界に始めて移れるに由て實際「死者の中より首に生れたる者」なりければ也(哥羅西書一章十八)。

榮を得たる基督の第二の活動(事業)は是れ其第一の活動より生ずる結果なり。基督が其弟子のために中保したまふ首要の功績は聖靈を彼等のために神に乞ふて降賜するの事なりき。「われ父に求めん、父かならず別に慰藉者を爾曹に賜ひて限りなく爾曹と偕にをらしむべし」(聖約翰福音書十四章十六節)。一の意味に於ては、該乞請は我が主の昇天の後十日にして十分に容るされたりと雖も、他の意味に於ては、我が主は恒に之と同じき乞請を神にむかひて爲しつゝあり、又之と同じき十分の許容を得つゝありたまふ。彼は常に聖靈を父神より請て我等に遣はすに従事したまふ、此事は彼未だ榮を得て天に昇りたまはざりし前には能はざりし者のごとし。「我が往くは爾曹の益なり、若ゆかば訓慰師なんぢらに來らじ、若ゆかば彼を爾曹におくらん」(聖約翰福音書十六章七)キリストは未だ其苦死を以て聖靈の降賜をば買ひ得たまはざりき、未だ之を乞請するの域

には達したまはざりき。基督なほ人中に止まりたまへる間は、たとひ聖靈を降賜せらるゝとも、人々は之を受くるに堪へざりしならん。自然なる物と靈なる物とは相容れずして互に相排除す。されば自然以上なる新しき天地の開くる前には先づ舊天地の崩るゝこと無くんばあるべからざりき。

#### 第四節

救贖主が其兄弟のために乞ひ得たまひし聖靈は、我等が本書の初に論じたるごとく、

眞箇に本來神なる者なり、——實に神は聖靈なくしては思想することを得ざるほどに聖靈は全たく神なる者たる也。聖靈は人間の歴史上頗る世代の重なりて後に顯現せられたりと雖も、聖靈は決して神の活動上に晩く發達したる者にあらざ。聖靈の職は御子の職と同じく俱に「末日」に屬する者なりと雖も(希百來書の一の二、使徒行傳二の十七)、聖靈もまた御子の如く御父と均しく無始無終にして、且同質なる者なり。天地萬物絶て存在したること無くとも、聖靈は必ず初より常に存在したらん、否な必らず神の充ち足れる徳をそなへて存在したらん。

聖靈は御父と御子の相互の愛より永遠に生産したる者、此が彼に對し彼が此に對する愛の圓滿に發表したる者、父子の二者をして一たらしむる聯鎖たる者なり。此の意味に於てすれば、信經中において聖靈は亦御子よりも出づといへる教の虛ならざるを知るべし。加特力信者は肯て公明に告白す我は天下諸教會の共有寶典たる信經に西部教會の人々が東部教會の人々の承諾を経ずして該句(Filioque clause)を挿入したる擅斷を是視する能はずと。一統教會の信者はまた該句は之を解釋するに謹慎と制限を加へざんばあるべからずと云ふことを認めざるべからず。然し乍ら聖



靈が御父と御子より出づといふ言を今抹殺し去るは、豈眞理を棄て、退くの觀なからんや。西部の神學者も聖靈は第一の源たる御父の外に亦御子を第二の源として獨立に之より出るには非ずといふに同意す。東部の神學者も亦聖靈は毫も御子に由る無くして獨り御父より出づるには非ずといふに同意す。抑も御子は全く御父と一にして、其子たる所以と其具有する衆徳とを悉く御父より獲たる者なれば、聖靈もまた終には御子の靈として己れに屬する者をごとく御父より獲たる者とす。故に此點に於ては東西兩部相互の語を了解するを得るや否や雙方直ちに協和するを得べし、而して聖靈は唯一時の派遣を父子兩方より獲、其無始永遠の發出を獨り御父より獲と云ふが如き調和的の臆説を採るを要せず。是の如き臆説は二重の不利を蒙むるを免かれず。聖書の中聖靈の發出を説ける唯一箇處の文（聖約翰福音書十五章二十六）に於ても、其一時の派遣を指せる者なるや確かなるが如しと雖も、其由て出る所を御父の神に歸するに非ずや。且又世界に於ける三聖身位の各自の事業は無始永遠なる境界に於ける三聖身位の本然の關係に基りすと我等は想像せざるを得ず。故に御子もし聖靈を御父より獲て我等にあくと云ふを得なば、必ず是れ聖靈の身位が御父の下に位めせしめらるゝのみならず又御子の下にも位めせしめらるゝ、深妙の事實を考へたる者ならんと思はる。

聖靈に關する聖經の言語を按ずるに、彼が御父もしくは御子と同じく別に一身位をなせることは照々として明らかなり、即ち彼は欲する所あり（哥林多前書十二章十一）、——尋ね究むる所あり（同書二章十節）、——我等のために祈る（羅馬書八章二十六）、——憂へしめらる（以弗所書四章三十）、——又（若し左の翻譯にして誤まらずんば）其入りて宿りざる靈魂（人々）を熱心に愛す（雅各

書四章五節）。但し彼が身位は斯く明かに區別せられたりと雖も、其御父および御子と一體なることも亦均しく明白なりとす。聖靈の來り、聖靈の現前するは則ち基督の來り或は現前する者、——否々唯に基督のみならず又御父の來り或は現前する者とす。基督聖靈の派遣を論じて宣まはく、「我なんぢらを捨て、孤子とせず、復なんぢらに來らん」と、更に又直ちに之に加へて曰く、「若し人我を愛せば我が言を守らん、また我が父は之を愛せん、我等きたりて彼と偕に住べし」（聖約翰福音書十四章十八、及二十三節）。

### 第五節

上に説きし如く、聖靈の無始より存在する根本は御父の神なり、聖靈を人々に賜ふ者も終には唯御父ひとり而已。併し乍ら是また基督の賜ふ者なるとは決して之が爲に少しも減ぜず、基督は則ち人々に與ふるために之を父神より「受け」たりとらば也（使徒行傳二の三十三）。我等の知れる所に依て言へば、實に聖靈は特別な意味にて基督の靈なり、唯に神の靈たるのみに非ず。キリストと聖靈との間には特別の關係ありて存す。キリストを世に啓示するは聖靈の大職掌にして、キリストは亦是れ御父の啓示したまふ所に係る。御父の榮光は其儘にては我等に示されず、御子の榮光として始めて我等に理會するを得る者と成る、是故に聖靈がキリストの富を我等の心の前に持ち來たす時には榮光を歸せらるゝ者は御父なりとす。是を以てキリストは宣まはく、「彼わが榮を顯はさん、そは我が屬を受けて爾曹に示せばなり、凡て父の有たまふものは我屬なり、是故に彼わが所屬を受けて爾曹に示すと曰へり」（約翰福音書十六章十四、十五）。聖靈キリストの榮光を知らしむる時には、是れ無始無終なる神子としての榮光たるのみに非ず、又これ肉



軀をとりて降誕せる人の子としての榮光たる也。聖靈はキリストの歴史上なる事業を解釋して之を其固有なる目的に應用す。聖靈は唯に神性における基督を十分に代表するのみに非ず、又人性における基督を十分に代表す。

但し神子の降誕に由て聖靈の身上にも幾分か之に應ずる變化ありと云ひ、又は其神性に人靈の性質を加へられたるありと云ふが如きは、固より猥りに一統教會の教に新説を加ふる者なるべし。神の靈其身上に在て人化したりと未だ嘗て教へられざりき。然れども聖靈は神子の降誕に同情を表すること極めて深遠なれば、イエス、キリストがたもてる聖成せられたる人性の諸運動を十分忠實に表出することを得る也。御「ことば」が肉軀となりしは聖靈の力に由る者なりき。神子が肉軀となれる生活の發達は初は悉く聖靈の管掌せし所に係る。基督のペテスマを受けたまふに當りて聖靈は珍らしき姿にて降りて彼に入り、彼れの人魂に與ふるに夫の「開けたる天」を以て預表せる神妙の全真理を感じるの知覺を以てせり(聖馬太三の十六)。聖靈が其來らんことを表したまへる鳩のごとき形は、是れ聖靈が他人に對する如く分量を按して或る賜物または或る恩恵を垂るゝを謂ふに非ず(聖約翰四の三十四)、其全身の圓滿をつくして己れを與ふるを標せる者なりき。斯の如く基督の生活は是れ歴史上聖靈の諸の働を十分に寓住せしめたる者とはなりぬ。而して聖靈は——固より我等の主の人間たる靈と混同したるには非ずと雖も——全く之に注入して、獨り専ら之が活動力となりたれば、爾來彼(聖靈)が我等のために帶る所の名稱は其キリストに於ける人性に對して懐くに至れる新關係を明らかにす。斯の如く、例へば、聖パウロが迦拉太人に告て(加拉太書四の六)「なんぢら既に子たることを得しが故に、神その子の靈を爾曹の心にお

くりアペ父と呼しむ」と曰へるに於ても、其靈は御子が無始より以來由て以て御子として其御父に對したまへる聖靈を謂ふに非ず、御子を其肉軀の人となれる生活上に於て標識せる所の聖靈を指せる者と想像して恐らくは大過なからん歟。是を以て我等の主は其復活したまへる後、直ちに聖靈(の賜)を己れの與ふべき分として其弟子たちに垂ることを始めたまへり。基督は其人間たる口より氣を嘘きて彼等に曰ひたまひけるは「聖靈を受けよ」と(聖約翰福音書二十章二十二)。天に昇りて其人性の圓成するを得たまへるや、基督は其人性に於て尙益々完全に聖靈の圓滿を吸収し且同化することを得るに至りぬ。其肉軀を以て地上にいませる日に於ける如く聖靈の指導の下に在るに非ずして、今や聖靈却つて彼れの下に服するに至れり(としも謂ふべきか)。人として基督は聖靈を今や己に己れの有となしつ之を人々に嘘いれ給ふ。基督の人性は神性を受造物に傳達するの媒となれり。凡そ基督が其教會にて今爲したまふ所の事は、其榮化したる人性に於て之を爲し、又其與ふる聖靈に由て之を爲したまふ。而して其與へたまふ聖靈は夫の尙も眞に人にています者の使者として能く我等を感化したまふ、要するに彼は即ちイエスの靈たる也。

第六節 受造物中に秩序と生命を喚起するは太初よりして聖靈の業なりき、此秩序と生命は無始より以來御「ことば」に屬す。傳に曰く、天地を構成せる材質が尙混沌未分の態にありける時に之を變理排列するの第一着は神の靈が大水の面を覆ふの事なりき(創世記一章二)。此靈を我等の主は「神の指」と呼びたまへり(路加福音書十一章二十)。「神の指」といふ名は「御ことば」における神の心匠を彼が容易に又精巧に細大逐一形作し完成したることを表す。自然界に神の手を最も



強く證明する所の美、及び夫の美を賞する所の心力は蓋し彼が特別に思を凝らしたまへる所ならん。而して彼は自然界に於て爲す所の事を歴史界に於ても亦た爲したまふ。神の經綸を實行することは彼に屬す。神子降誕のために途を備へたる者は彼なりき。萬國民と一箇人との品性と運命を左右して遂に一切の終歸及び目標たる基督の榮光を進めしむる者も彼なり、彼は亦「活かす靈」なり(羅馬書八章二節)。萬物の中に不壞不朽にして徧く磅礴するに由て(智慧之書一の七、十二の一)、彼は宇宙をして機械的なる死物たらしめず、御「ことば」の生命を以て活動せしむ。特別にも基督教會に於て、彼は教會全體にも之を構成する箇々の信者にも均しく基督教生活の元火光を予へ、而る後日々に之れを新たにし之を明かにす。彼が與ふる秩序と生命との賜は、之を高尙なる状態に於て觀るときには、是れ教會内に於ける彼が最も特殊著明なる賜物たる清潔と自由とに相類す、彼れの目的は人生の混沌を道徳上の秩序と美とに約し、以て各人に基督の聖潔を分享せしむるに在り。彼は制限や律法を蒙むらしめて之を爲すに非ず、健全なる愛情を注入して之を爲す也。故に曰く、「主の靈のある所には自由あり」(哥林多後書三章十九)。聖靈が斯く人心を一新する事、キリストの救贖事業を人世に活用する事、其が道徳上の奇蹟を行ふ氣力の無盡藏なる事を考へて、我等は之を創造者と尊稱す、Veni Creator Spiritus——來ませ創造者たる聖靈——と古人が歌ひしも宜なる哉。聖靈が世に行なひたまふ聖解脫の此事業は内心の教誨(例へば約翰福音書十四章二十六に見えたる如き)に由て成就する者とす。禽獸と人類とをして別あらしむる者は有心有意の思量をなすの力に存す、是の如く聖靈が有心有意の知覺(意識)を高むる事は、——否々神聖なる新知覺を注入することは、則ち是れ人を聖成する者とす。是の如き教誨、闡明、眞

理の會得等は、聖書中到處に於て特に聖靈の事業と稱せらる。神に在て自ら知覺および自由の根本たり、人に對しても亦附與に由て知覺および自由の根本と成る也。

### 第七節

基督の受榮前と受榮後とに於て聖靈が人々に及ぼせる働の差別を論ぜんとするに至りてや、——若くは又大抵は同じ事ながら、今日基督教徒たる者と基督教徒たらざる者どに聖靈が及ぼす働の差別を説かんとするに至りてや、我等は一方には言語の乏しきを感じ、他方には我等の經驗と類を異にする經驗に十分の想像を以て立入るの困難なるを感じず。我等もし使徒たちの如く聖靈の働を前より後まで經歷することを得たらんには、必ず之が對比(差別)を一層善く指點することを得んも知るべからず。彼等にとりては聖靈の來り且止まることは甚だ著明なる眼前の出來事なりしかば、彼等は己れの教説を證するため之に訴たふること猶豫せざりき。それ爾曹に靈を予へかつ奇蹟を行なはしめ給ふ者の斯くなすは爾曹に律法を行なふに由てなる乎(加拉太書三章五節)。「われら其賜ふ所の靈に由て即ち其われらに居り給ふことを知れり」(約翰第一書三章二十四節)。

異教人民中に於ける凡ての善念徳行及び眞理は是れ聖靈が人々の意志と「争そひ」たまひし結果なりと我等は信ぜざるを得ず(創世記六章三)。舊約の下における選民中にありては聖靈の働更に幾層著明なりき。預言者たちは聖靈に感動せられたり、聖靈は彼等に在りては「キリストの靈」なりき(彼得前書一章十一)。人民一般の道義の念は如何に遅々として潔められしにもせよ、箇々の聖徒はペンテコステの前に於て己に造られたり、縦や彼等該五旬節後の天地に出でたりとも其道徳



には此上加ふる所あるべくも見えざりき。然りと雖も、汎く之を言へば、當時は「イエス未だ榮を受ざるに因て聖靈未だ在らざり」しこと眞なりき(約翰傳福音書七章三十九)。彼の出來事より以後は、彼れ唯に其恩恵を之を受くる人々に幾層饒かに與へ、且之を更に夥多の人衆にまで推廣めたまふのみならず、直ちに彼が活動の方法——其外部の表現に於ても、其内部の品性に於ても俱に——即ち一變したり。

聖靈は今や選人の一團躰を形作り維持する者として顯はる、而して此團躰あるひは社會にありて彼は身みづから永久に住す。前には箇々の人を感化して、未だ聖成せられざる人類の大塊中より此處彼處に聖靈の權能を證する人々を單獨に與こしたまひしかども、今は團結せる一群の人々を媒として天下の人類を感化せんことを務む、此等の人々は唯に聖靈が之に自家の聖成を求めたまふ時に聲に應じて前進するのみならず、又自ら其周圍の全世界を救贖に導くの責任ありと深く感ず。——前には聖靈の感化を蒙れる人々は之を幾分か己れ等に外なる者——大風のごとくに來りては去れる氣息——と感じたりしが、今は教會の全體も箇々の基督教徒も俱に之を靜平にして定着せる内部の事實と感ず、——固より時としては多く感じ時としては少なく感ずとは雖も、常に必らず其處にありて、又常に必ず倚賴せらるべき者なり。今や聖靈は唯に恩恵を與るのみならず、又全教會と其各箇の信徒を以て己れの「永く止まる」べき「殿堂」たらしめん爲に、己れの身を與へたまふ(哥林多前書三章十九、六章十九、彼得前書四章十四)。此事たるや、我等の知る限りは、基督の降誕および昇天なくしては有ること能はざりき。彼の榮を受けたる人性を経て獨り聖靈は人々の内心に入りて住むことを得たり、之を経て獨り聖靈は己れが宿れる人々を盡く一箇の活團躰に

結合することを得たり。

第八節 我等の主イエス基督が死(者の中)より甦りし後第一に着手したまひし事業の一は新發程點(新紀元)を開くにありき。基督は其生前に教會を形づくりにたまひたりとは殆ど言ふべからず。教會を設立すべき材料は己に蒐集せられてありき、十二人を其自餘の弟子中より選びて之に職名を與へたまひしは、己れの社會を構造するに準備する事をさへも始めたる者と謂ふべし。然れども彼は猶其教會の構造をば將來に屬する事と説きたまへり、曰く、「我が教會をこの磐の上に建つべし」と(聖馬太十六章十八)。其苦死に赴くに方りて基督は己れの躰と血を第一に願ち、以て彼等に結合の連鎖を供したまへり。但し此までは尙是た第一のアダムの創造に際して起り得たらんと我等が想像し得る所の如き而已、——是れ地の塵が己を活る魂とならしむる氣息を受るに堪ふるものとされるのみ。次ぎに氣息は來りぬ。斯く既に準備せられたる元分子に我が復生の主は其復活の夕に己が不朽不壞の生命を吸入しつ之をして一教會とこそは成らしめられた。但し其賜物は尙未だ彼が後日に與ふべくありし十分の賜物には非ず、——即ち是れ定冠詞を附したる聖靈(“the Holy Spirit”)に非ず、無冠詞の聖靈(“Holy Spirit”)のみ、——マテスマに於て尙與へらるゝ所の者に均しき賜物、——即ち新しき生命の賜物のみ(聖約翰傳福音書廿二章廿二)。神の賜物には段階あり、第一には生命を賜ひ、次には生命をして保つに價あらしむる所の者を賜ふ。此の第一の賜物はイエス其死に打勝てる功徳に由て己に與ふることを得たまへり。此第二の賜物は、上に説けるごとく、昇天に由て與ふることを得るに至りたまへり。是に於てか夫の更生



したれども尙幼稚なる教會にイエスは其圓熟せる賜物たる權能、聖行、活知識、天下を説服する大雄辯等を具足せる聖靈を忽然と一時に灌注して人々の心裏に住しめ給へり。

### 第九節

聖書の中に教會を描きて形骸かたがたとなし、キリストの體となせるは、單に借喩の言たるに止まらず。是れ單に相比類する者たるに非ず。教會がイエス、キリストに於けるは、人の形骸が其吾我と稱する者に於けると關係を同じうす。勿論其聯關の方法には差違なきに非ず、而して其の差違たるや之を指點するに難し、然れども其聯關は肉骸の上に於けるが如く親密にして且急切なる也。教會がキリストに憑るは形骸が其頭と聯なるが如しと言ふは、未だ此句を解き盡すに足らず。動物の有機骸に於けるが如く、其關係は一方に限るに非ず、相互よりする者とす。教會との聯關は教會の生活に影響するあるのみならず、又キリストの生活にも影響す。勿論キリストは毫も教會を憑み或は待ちて存在する者に非ず、其人性に於てすらも然らざれば、況んや其神性においてをや、然りと雖も教會はキリストの地上生活(肉骸をとれる生活)をして圓満ならしむるに必要にして缺くべからざる者とす。キリストと教會との合骸は極めて眞なれば、此等二者相合して單一の實在骸を構成す。キリストは之に加はり聯なれる衆肢あるにあらざれば未だ全たき者と謂ふべからず。故に「キリスト」と言ふときは、(勿論如何なる場合に於ても悉く然るには非ずと雖ども)キリストと教會とを兼ねて言ふなり。「體は一つにして多くの肢あり、一つの體の凡ての肢は多けれども一つの體なり、キリストも亦かくの如し」(哥林多前書十二章十二)。聖パウロの書ける甚だ著明にして又甚だ難解なる一文章に於ては此の相互の關係を闡明す。即ち該文章に於て

は唯にキリストを教會への賜物と説けるのみならず、又教會をもキリストのために賜物たるの功用を呈する者と説けり。キリストの復活と昇天、および彼が今も後永とこに萬物に主宰たる事を論じて後、該聖著者は更に語を加へて曰く、「彼(上に説ける如き彼)を一切の物の上に首かしらとなし、此を教會に賜ひて其首となせり、教會は彼れの身からだなり、萬物を以て萬物に満しむる者の満てる所なり」(以弗所書一章二十二三)。此最後の句は通例斯く翻譯せらる。併し乍ら此なる動詞もまた他の同様なる文章上に於けるが如く被動骸と見做すべからざるの道理ある無し。若し然か見做すならば、却つて幾層強き意味を生じ來らんとす、曰く、「教會は彼れの身からだなり、萬物にありて萬物を満たさるゝ者の満てる所なり」。斯の如く聖パウロは明言す教會はキリストが由て以て十分に己れを世に顯はしたまふ現在および將來の機關なりと。彼は教會に満てり。教會に於て、及び教會に由て、キリストは榮を得たる己れの生命の極めて富めることを彰はしたまふ。

是すなほち「身からだ」といふの意味なり。キリストは他の人々と離れて別に天上に己れの本骸を有したまふことは疑ふべからず、(其天上の本骸を以て彼は天群に現はれたまふ。併し乍ら該の骸(時としては誤りて彼が自然の骸 natural body と稱する者)と彼が妙骸たる教會とを極めて劃然と區別することは或は能くすべけん。但し其榮を得たる身からだと其妙骸(教會)との關係は如何なるにもせよ、彼は地と縁を絶ちて地より退ぞきたまはざりしことは確かなりとす。彼は唯に天に於て肉骸をそなへたたまふ而已ならず、地上に於ても亦肉骸を具へたたまふ。キリストは今も地上に骸を現じたまふ、此骸はキリストを表明する者にして、キリストと同一視せらる。此骸を衣てキリストは尙人間の中に言動をなしたまふ。是れ眞正の形骸にして、判然明快なる容貌を



有し、又其肢たる部分は許多に分掌する所ありて、其間に有機的なる活聯鎖を存す。此の軀は即ちキリストの教會是なり。教會はキリストを代表すといふは未だ足らず、如何となれば代表者は代表せらるゝ者を離れて別に己れの生命を有すれば也。然るに教會は——固より之を正當に活人視し得ると雖ども——是れ活人には非ず、キリストを離れては己れの生命といふ者を有せず。教會に生氣をあたへ、且つ之が諸肢の間に連鎖を形づくれる者は他物に非ず即ちキリストの生命なり。キリストの靈は教會に宿り、教會のうちに己れの心と同一の心を生ず、故に使徒は言ふを得たり「我等はキリストの心をもてり」と(哥林多前書二章十六)。是すなほち我等が唯にキリストの懷きたまへる如き感情と見解を有するのみならず、又キリストの思ひたまふ如くに思ひ、キリストの悟りたまふ如くに悟るを謂ふ也。キリストの嘗て地上にいませし時に自ら然りし如く、今や教會は顯然として目に見るべく、隱然として心に信ずべき物象にぞある。基督教會は人群團結の顯社會にして、謂ゆる「山の上に建られたる城」なり(馬太五章十四)。教會の法則と組織は日月の天にかゝるが如くにして、人々の熟知する所なり。如何に世間的なる不信の政治家といふども、是等をば實地の勢力として處遇せざるべからず。人此團體に屬するや否やは一目にして知らるべし。其經界につきては毫も模糊たる若くは不定なる處ある無し。顯教會と冥教會(隱教會)の區別は使徒時代若くは初代に於て絶て聞かざりし所なり、是れ分裂時代に於ける紛錯きはまれる龍辯ならく爾。教會を「妙」*mystical body* と稱するは、其形の眇昧にして究め難きに因るに非ず、又「我は天下一統なる聖公會」(の存在する)を信ず」と言ふも、是た神ひとり知ろしめず敬虔なる人々を以て成りたりと信ずるに因るに非ず。信仰は是とは異なる道理ありて來る。其實該

社會は萬人の目に覩る所なりと雖ども、信仰を以てして始めて之れが眞箇の性質を看取することを得る者とす。千艱萬難の中に在て、信仰ひとり能く認む基督教會の生命は實に其が昇天させる首の生命を以て生命とす、——此顯團體は、其外見に反して、實に是れ神徳の家郷たり成形なりと。此神徳は決して教會を離れじ、又教會をして永久に、且一般には決して敗を取らしめじ。

第十節 「基督の體」を斯く一種の顯構造として描き出すとは雖も、我等は此世を謝し去りし信徒の團體を忘却したるに非ず。彼等は尙も此の妙軀の肢員たる也。「萬の物に満たん爲に諸の天の上に昇りし」キリストは(以弗所四章十)、天上に於ても樂園に於ても地上に於ても均しく適當の形を以て顯はれたまふ、而してキリストが以て顯はれたまふ形軀は是れ始終を貫ぬきて同一なる形軀たるなり。此は夫の謂ゆる中間境界(*intermediate state*)の教説を論ずる處にあらず、然れどもイエスの生命が尙宿りを活ける群靈の體を語らんと欲せば、該の體の見えざる部分が謂ゆる「聖靈の交際」或ひは親交に於て(哥林多後書十三章十四)其見ゆる部分と十分に緊切に聯なれる事を謂はずしては止む能はず。死者は生者に力を及ぼし、又生者より力を及ぼさる、其如何様にして然るかは言ふに容易ならざれども、其事の眞實なるは毫も之が爲に減せず。彼等の記録せられたる言行、彼等の現存する著書、彼等が地上に在て爲したる事の萬世不朽なる結果、彼等が勵ましたる口氣、並に彼等が間斷なき代禱(其必ず我等のために禱りをらんのみならず、却つて時としては生前に於けるよりも幾層直接に且活潑に我等の爲に禱らんとする者)、——もろもろ是の如き手段を以て忠信の死者は天下の生靈を甚だ力強く動かす者とす。此事たるや極めて盛んなる者



なれば、舊約神威の最後なる者の一は、(其最も真に近からんと思はるゝ解釋にしたがひて言へば)此世を描きて曰ふ、是れ其政治上および社交上の諸勢力を具へながら、「其床に」安息める諸聖徒のために譲らず知らずの間に力なくなくも全く制馭せらるゝ(詩篇百四十九の五、參觀以賽亞書五十七章一、二節)。斯の如く我等は彼等が地球上の日常の出来事を知るの範圍をば詳らかにする能はずと雖ども、——キリストの榮光に關する限りは、——彼等が此等の出来事に關心する所あるは疑がふべからず。地上に於ける教會の成功と失敗、最後の降格を早くすること或は晩くする事、異宗教の復興する事或は惰眠に沈み若くは虚妄に流るゝ事、——多分亦生前に其關係の親密なりし箇々の人々の靈心上に於ける浮沈盛衰、——凡て此等はみな死者に觸着す、唯我等敢て其方法如何を斷言せざる而已。使徒信經に最後に加へたる所の者、——即ち我等の主の冥府行を明言して「聖徒の親交」を確説せる條款は實に此觀念を以て基礎とす。此等の條款に由て基督教徒は利害の共通が死に由て破れずして永遠無窮なることを其心裏に明らかにす。凡てキリストに堅く聯なれる人々の間には必然の交通の存すること極めて深き者なれば、彼等は尙、——其嘗て福音傳播の初にエルサレムにて預表的に示されたる意味に於て、——「一切の物を共に有す」と謂ふべし(使徒行傳四章三十二節)。

但し聖徒の親交とは單に生者と死者との交通を謂ふのみに非ず、亦生者間および死者間に於ても聖徒中に交通あるを謂ふ者なる事は、我等が固より直ちに覺る所にして、殆んど此に論及するの必要なしと思はる。一人の福利は萬人の福利なり。古代のストアク哲學に於て天下の「哲人」は各各哲人の佳言善行に由て自ら益すと説きたるは、此真理の微光を端倪し得たる者と謂ふべし。若

し。此思想を推ひろめて、唯に夫の傲然自ら高しとする貴族然たる哲學者を含ましむる而已ならず、又自ら謙卑にして切に義を求むる人々をも含ましめなば、——若し此の共同にして單に彼此相知り得ざる散在せる箇人間の共同ならずして、皆善く知れる或る神立團體の會員間に於ける一般の共通なりしならば、此のストアク教説は基督教にて教ふる親交てふ者の圓成せる觀念を去ること然のみ遠からざりつらんか。



## 基督教會の特質

基督教會ノ標識ハ外部ニ顯ハレテ見ルベキ者ニアラズ内部ノ特色ノミ——教會ノ一ナル事ハ歴史上ノ相續ニ本ヅク——  
 教會ノ聖ナル事——教會ハ重ニ其教義ニツキテ一統普遍ト稱ス——傳説ハ聖經ニ由テ一定ス——聖經ノ神來オヨビ充  
 足——謀求ノ自由及ビ教會ノ權威——教會ハ其使命ヲ按シテ使徒教會ト稱ス——基督教會ノ聖職員——職團教會ト凱旋教  
 會ノ同一ナル事

第一節 想ふに基督教會の最も單純なる定義は前章の所説より蒐集せられたらん者は是なるべし、即ち教會は是れイエス、キリストが其使徒を基礎として設立したる人群の結社會にして、常に其内に住むところの聖靈をイエス、キリストより賜はれり。

此社會或は團體は諸信經中に四種の大稱號を以て描き出されたり。キリストの教會の標識は其宜く然るべきが如くに必ずしも常に顯に顯はに戴だかるゝに非ず。此事は慚愧して告白せざるべからず。眞正の教會は最も判然と其標識を帯びをれば、一目にして虚妄の教會とは看わかたると主張する人々は、歴史を奇妙に解釋せざるを得ざるに至る。然し乍ら是等の標識は、如何に外面には模糊たる所ありとも、教會の心には深く銘刻されたり。此等は單に教會の目を注ぐべき標識たるのみに非ず。教會の本體は是等の標識中に籠れる者にして、教會は其本色を失なはざる限りは必ず之を彰はす。或る時又或る處に於ては、教會を代表する人々は此等四種の語を以て描寫せられたる品質を忘却し去らんと雖も、教會其物は決して之を失なはず。教會は基督の新婦として不

朽の生命を與へられたる者にして、其活くる間は是れ一なり、聖なり、一統、普遍なり、使徒、相傳なり。

第二節 基督の復活せる生命の寓舎たり、内に宿る基督の靈の機械たる教會は必然に一致を以て本色とす。基督教會は只一なり、又只一なることを得る也。然し乍ら本問題に關しては今日大いに思想の紛糾錯雜せる者あるを見る、而して熱心なる講求者は此只一なる教會は何處に在るやとの間に對する答の種々に相衝突するに由て屢々感ふ。想ふに之を明瞭ならしむる望を與ふる者は唯我等が基督教會の定解に於て論及したる所の者の一ある而已。教會は只一なり又只一なるを得、何となれば基督只一つの社會を設立し、之に附與するに只一つの生命を以てしたまひたれば也。基督の使徒たちは各々別異の門派を開かんために遣はされしに非ず、——互に平和に相競ひ、其設立せる門派に各自幾分の聖靈を賜はりたるに非ず。使徒たちは皆これ單一の組織體に合同せる領袖にして、聖靈の充足れる徳その中に住す。彼等の常に口にせる所は「一つの體、一つの靈」(以弗所書四章四)といふに在りき。此警語に由て教會が數に於ても本體に於ても一なることは全たうせられたり、而して我等は曉る天下には一教會より多くの教會あるを得ず、又畢竟無關係なる烏合の分子を以て成立てるが如き教會あるを得ず。單一の生命は單一の活住舎より以上を建造する能はず、單一の機體は單一の魂を寓住せしめ得る而已。靈の一なるは體の一なるを保證す、體の一なるは靈の一なるを保證す。教會は外部に於ても内部に於ても俱に一なり、——第一世紀より第十九世紀にいたるまで古今を通じて只一のみ、又天下萬國を通じて只一なる而已、——人間の如何なる境界に於ても(上に説ける如く)、世間と出世間とを論せず、都て



一たる也。其起原の一なるは則ち我等の手懸なりとす。此の思想——萬古不朽なる神妙の生命が單一の正教會に「たゞ永へに賦與せられたりとの思想——を堅く握りて失はばずんば、我等は基督敎國の今日の分裂を目に睹ながらも尙ほ教會は一なりと公言することを得ん。

我等もし世界に於ける基督敎徒の種々別異なる群團を顧るならば、第一に先づ此等が二階級に大別せらるゝを見ん。世には不完の差はありながらも教會の創立(開基)より連綿として歴史上の相續を保ち來れる者どもあり、又後年に起りて實際新らしき社會をなせる者どもも有り。前者には、例へば羅馬教會、エツントのコント教會、北歐のスカンデナヴィア教會等屬す、後者には、昔日に於ては、モンタヌス宗徒及びノヴェンシヤン宗徒、今日に於ては、コンクリグーシヨナリスト宗徒及びアルピンク宗徒(Irvingites)、並に露西亞の許多の宗派屬す。

此の最後の種類につきては其光景凡そ左の如し。此等の宗派を構成する人々は、——他の團躰に屬すども、又は幼少より他の團躰にて育ちたりとも、——基督敎のベプテスマを受けだにせば、一箇人としては、教會の員に列す。彼等は教會の名稱には登りをれども、彼等が教會との交通は中絶の姿に在る。教會の權利を十分に享受せんと欲せば只己れが聯なれる他宗派即ち別團躰との交通を絶つを要する而已、而して彼等は、他に故障だに無くば、正教會に直ちに正員として復歸することを許さる。然れども諸の別團躰は是と全く其趣を異にす。正教會と此等の諸宗派とは決して交通せず。團躰として觀れば、此等の諸宗派はキリストの教會の一部分をなす者にあらず、却つて(故意に非る時にさへも)之にむかひて競争し且反對するの姿勢を呈す。是等も——其基督敎徒を以て成り立てる限りは——基督敎の宗派なりとす。然れども其基督敎たるは言はれ、偶然

のみ、其中には約束の聖靈の常に宿る無し。彼等の中にも屢恩惠の溢るゝありて、正教會を慚愧せしむ、然れども其恩惠は之に加はる善男善女の身に乘じて正教會より輸入せられたる者とす、其宗派固有の富より溢れ出で、箇々の信者に傳はれるには非ず。故に斯る宗派は其壽命に限りあり、天が許して爲すべく起らしめたる業を成しをへ、而して神より相當の應報を受くるや、遂に、他の人間制度のごとく、朽ちて消ゆ。彼等の善良なる元素は正教會に歸り、不良なる元素は謂ゆる「シオンをにくむ」惡念となり、屋上の草のごとく其未だ摘まるゝに至らざる前に早くも枯死す(詩百二十九篇の五、六)。故に正教會は神が斯る團躰を以て世に行ふを善しとしたまひし功益をば誠實に感謝し、又彼等とともに許多の善事業に従がひ、其中の敬虔なる各會員を愛すと雖も、其分離して存在することをば、決して不問に置く能はず、是等の宗派内に花たるが如き人物をば悉く我が民の迷へる者と見なして、之を我が懷に引もどさんと常に冀はざるを得ず。凡そ諸宗派が呈し得る有用の忠告をば正教會に於て悉く之を採用せんことを務めん、——是れ他には何の理由もなくとも、彼等をして分離しをらざるを得ずといふが如き正當の觀ある口實なからしめん爲にするのみ。但し教會の一なる事は、同好の輩が之(正教會)を去りて他に別社會を構造したればとて破るゝに非ざるや明らかなりとす。

今や我等は基督敎諸團躰中の第一階級——其の歴史上の存在が基督敎會の創立時代に溯る所の者——に論じ到れり。此等の者は「諸教會」と稱して可なるべし。此複數なるは教會の一なる事を打消すにあらず。使徒時代の書に「諸教會」と書けるあるは、獨立なる團躰が相並んで處々に存在せるを謂ふに非ず、是只天下一統なる同一組織躰、即ち唯一教會(The Church)の支會が地方



に散在せるを謂ふ耳。斯く聖書にはアマアの七教會といへるあり、又今日の言語にては英國の教會、フランスの教會、スコットランドの教會等と正當に言ひ得べし。天下諸教會の中には——固より羅馬教會を除きて——一として我は唯一教會なりと公言する者なし。羅馬教會の信ずる所を世俗間に主張する人々は謂へらく、「唯一の眞教會」は羅馬監督(法王)の權威を認むる基督教徒の團體に限ると、斯の如く彼等は之を分離の基礎と認めて遂に自ら一宗派たるの地位に下らんとす。其他の諸教會は皆我は更に大なる一全體(唯一教會)の部分のみと公言するに吝ならず。彼等は我が監督たちの會議は天下の基督教國を代表するの權ありとは考がへず、而して最後の大難問どもを解釋するの事に至りては、克蘭メル(Cranmer)の如く、彼等は「將來の全大會議」を待たんとす。

此等諸教會は各々その範圍内に於ては全社會の四標識(表號)を呈せざるべからず、即ち聖、一統、使徒相傳なる者にして、精神的に一ならずんばある可らず。或る一教會の失敗は全教會の失敗には非ず、縦や内部の分裂または紛争に苦みをる一地方教會(支教會)ありども、是れ決して教會は一なりとの説を滅する者に非ず。

是等種々の教會は、潮ぼり原ぬるに皆其生命を唯一の本源に得たる者にして、相合して唯一教會を構成す、但し其之を構成するや單に一箇の團塊として非ず、活る分子として之を構成する也。併し乍ら今日に在て之が一なることを認むるは信仰と望を以てする者にして、其宜く然るべきが如くに亦目を以て認むるに非ず。此等の諸教會はみな須らく相互に十分の交通をなしてあるべき者なるは明らかなり。教會内の分裂は教會との分離よりも却つて哀しむべき光景なりとす。

是の如き分裂を引起し又は繼續したる責ある者は罪を犯すの最も大なる者なり。試験中なる不完全の程度を経つゝある間は過認および誤解は到底免かる、能はざる者なるを憶ひて、諸教會は相互に容忍と慈愛の最も大なる精神を以て交はらざんばあるべからず。彼等は宜く國民的及び地方的なる特性を寛大に斟酌し、思想と行事とに於ける大差違をば唯に容すのみならず却つて賀すべし、是皆愛の靈の氣息を蒙りて基督教生活の千態萬狀なる富を世に露はすに與かりて力ある者なれば也。假使鄰近の教會責むべき所ありて、腐敗し或は缺損すども、之と親交する事にして同罪に與する者たるに非る限りは之と交際を絶つべからず。勿論此の極端の處置を施すを必要とし又正當とする時もなきに非ず。同罪に與せんことを交際上公然迫らるゝ時に於ては——只其時に於ては——分離を是とせらる。然し乍ら斯る場合に於ても絶交は人間の傲慢と忿怒を以て發言すべからず、親愛と柔和を以てして單に矯正の爲めにすべし、而して成るべく速かに之を撤回すべし、然のみならず正常の關係を挽回せんことを恒に努めて倦まざるを要す(帖撒路尼迦後書三章十四五節)。一の教會が己れと見解を異にせる他の教會の存在を平然無視して、單に己れの内事のみ用力をふれば足れる者の如くに舉動ふる場合は、今日の吾人には珍らしき事ならねども、初代の基督教徒には是れ恐らく想像し得られざりし事ならん。獨自ら激して他を顧みざるが如き孤立は必ず終に斯る支教會をして斷滅または棄教に終らしめんとす、是れ基督教會が由て活くる所の靈は最第一に是れ愛の靈なれば也。

但し一(一致合一)とは只これ愛を十分に言わらしたる者なり。愛の盛なるありて、眞に和合を熱望するの精神存せば、復何の分離をか憂へんや、唯一幹教會の衆支教會間に於ける絶交の如き



は僅かに一時の禍にして、眞箇の分裂には非ず。基督教會は其の本元的一致(一なる事)を失なひ了れりと思ふは、唯是れ早計のみ、不信のみ。其一致は残念至極にも至つて不完全なりとは雖も、終を告げたるに非ず。此唯一なる生命は、一たび與へられたる以上は、此等の一見分裂したるが如き衆肢を貫ぬきて滾々と流れつゝあれば、他日かならず凱然として此等をことごとく一致に——其失なはれて復得られたるが爲に却つて幾倍富み且貴と成れる一致に——糾合せんとす(\*節末の注を見よ)。今に於てすらも我等は聖パウロが説き及ぼせる一致の保證——基督教會にて禮拜する所の者の一なる事、——一切の支教會にて均しく受けたる教義の大體一なる事、——其サクラメント、(少くとも)其重なる者の天下到る處にて一なる事、——即ち「主一、信仰一、パンテスマ一」と明記せられたる所の者(以弗所書四の五)を服膺して感謝せざるを得ず。案ずるに我等の主は其弟子たちが其已に達せるが如き一致に守り置かれんことを祈らず、却つて彼等が其已に受けたる神の愛の啓示に負かすして終に一層神妙なる一致に着せしめられんことを祈りたまひしが、此事を見るは今日のごとき不規則なる世に在りて聊か心を慰さむるに足る。主の御辭に曰く、「聖父よ、爾の我に賜ひし者を爾の名にをらしめ、之を守りて我等のごとき彼等をも一つになし給へ」(約翰傳福音書十七章十一)。聖パウロも亦其基督教會の一なる事を嘖々稱道して「務めて守るべき」重寶なりと説ける章中に於て、更に進んで其が已に達したる事件に非ず、終に必ず達せらるべき目標なることを明言したり。彼曰く、基督が昇天に由て教會のため得たまひし賜物はみな「是れ聖徒を全たうし服役の事を行ひ、キリストの體の徳を建て、我等をして皆おなじく神の子を信じ之を知り、全き人、すなはち基督の充ち足れるほどに成るまでに至らしめん」

爲めなりと(以弗所書四章十二、十三節)。

(註\*) 聖約翰福音書十章十六節ニ於テハ「英譯聖書ノ譯文精密ナラズ、我等ノ主ハ「彼等……遂ニ(唯)一ツノ群(唯)一ツノ牧者トナルベシ」ト宣マヘリ、」終ニ(唯)一ツノ群(唯)一ツノ牧者アルベシ」ト宣ロシニ非ズ、但シ我等ノ主ハ許多ノ羊群ヲ有センコトヲ考ヘタマヒシトモ、又ハ一モ羊群ナクシテ事ヲ成サント思ヒ給ヒシトモ、推斷スベカラズ、數名ノ牧者ノ羊群ヲ同一ノ牢關ニイル、事ハ古ヘノ風ナリキ、我等ノ主ハ此牢ニ屬スル猶太人ト此牢ニ屬セザル異邦人トヲ俱ニ己ノ新ニ統教會ニ籠蓋セント欲シテ、許約シタマハク、彼等ハ唯ニ同一ノ宗教(外部ノ宗教)内ニ纏羅セラルベキ而已ナラズ、又全ク相融合シテ活ケル一體ト成メシト、彼ガ設立シタマヘル羊群内ニハ許多ノ異ナレル群アルベカラズ、其内ニ在ル羊群ハコトゴトク唯ヒトリノ牧者ニ屬スル者ナレバナリ、

第三節

基督教會をして一ならしむる事實は亦之をして聖なる者たらしむ。基督の生命を寓し、聖靈の力に由て活氣づけられたる社會(或は團體)は聖ならざるを得ざりき。固より此に於ても亦教會の一なる事を考がふるに於けると同じき困難に出で遣はざるを得ず。外見は屢々吾人の期する所に反するを奈何せんや。基督教會の狀態は時としては世間にむかひて醜を流がし、又教會内の敬虔なれども短慮なる人々をして嘔吐を催はさしむ。再三再四一群の人々は教會の光景に望を失なへる餘り、教會外に純潔の社會を設立せんとの空望を懐きて之と親交を絶てり。然れども我が主は吾人に救へたまふらく、基督教會の此世に於ける行徑は善惡の混淆したる者なるを覺悟せよと。基督は麥中に稗子を蒔きたる圃に之を比したまへり、其善惡を甄別せらるゝ前に先づ刈いられんことを須つ者とす。基督教會が徹頭徹尾完全に聖潔の域に達せんことを期するは、其徒然なること恰も完全なる一致若くは完全なる知識に達せんことを望むが如し。實に人若し完成せる聖徒となるまでは教會の交に入る能はざるならば、教會の一大特色は消え失せん。然るとき



には教會は腐敗せる世に救済の機關として立つことを得ざるべし。基督が世にいませし時の如く、教會もし失せたる者を挽回せんと欲せば、眞に「税吏や罪人の友」たらざるべからず。教會は博愛の精神を以てすると均しく又聖潔を貴ぶの精神を以て、己れの腕を廣く推し伸べて最も不完全なる人々をも其懐に引よせざるべからず、決して人を拒むべからず。教會は學校のごとし、道を教ふるのみならず、又義を教ふるを司る（馬太二十八章十九節に萬國の民を弟子とせよと言へる如く）。望める弟子は皆悦んで容れられ、堪忍ぶよき教育を受く。此神聖の林園に入る者は直ちに全く其諸の罪習惡癖を醫さるべしとは、敢て期すべからず。其施こされたる勞を遂には悉く償ひ得人々の中に在てすらも、善念と惡念の軋轢は屢中々に長くして、其勝敗は終まで決せざらんとす。而して全く失敗したる者も少なからず。教會の諸弟子ことごとく上達するに非ず、諸教師もまた然り。時としては聖靈の不可思議なる退潮に際して、不信不虔は縦横に教會内に濶歩しつゝ之が領地の大部分を占領したるが如く見ゆ。——例へばイタリアに於ける第十五世紀の敗徳の如く、イングランドに於ける第十八世紀の無神論の如し。然りと雖も、斯る至て惡き時に於てすらも忠信なる聖業の竊かに成されつゝある者なることは姑く措き、教會は斯る悲むべき失墜のために其聖なる特色を失はざるなり。或る意味に於ては、教會全体も罪に陥りて汚れたりと言はるべけれども、教會にやどれる靈は斯る時の後には悔悟および歸順の靈として顯はる、而して赦免は予へられ、罪は清めらる、而して教會は依然として聖教會たり、——絶て罪に陥らざるに由て聖なるに非ず、罪を洗はれたるに由て聖なる也（以弗所書五章二十六）。

但し教會の聖なるは固より單に罪を赦されたるの聖なるには非ず。初より今に至るまで不幸にし

て教會の歴史を汚したる罪は是れ悉く教會の主義原則に悖れる者なりき。教會の善なる本體は之に抗し之を排ぞけたり。教會の最も辣酷なる攻撃者といふども、之が聖職業と之が醜行（彼等が教會の罪に歸して云々する所の者）との矛盾を指摘するに止まる而已、是よりも更に力あるが如き議論を案出し得ず。教會が深思熟慮の上にて罪惡の行に贊助を與へたることは古來未だ嘗てあらず。道徳上の改良進歩は凡て教會の認めたる是非善惡の教に於て其根本を有す。教會は之が公然たる辯護者（護教を以て自ら任せる人々）のために何時かにして誤まられたるにもせよ、其目的とする所は聖徳を維持して之を弘め、以て人々を罪より拯はんとするにありとす。教會の常住制度——サクラメント、聖職、説教、律法、紀律等——は皆之を目的とす。何にまれ此根本目的にかなはざる事の爲されたるあらば、キリストの生命を注入せられたる健全なる行動速かに勃興し來りて其過失を一掃し去らんとす。要するに、教會の一なる事に由て堅うせられたる相互の親交上にありて、イエスの血は唯に教會内の悔悟者を「罪より潔む」るのみならず、又教會全体をも「罪より潔む」（聖約翰第一書一章七節）。

第四節 基督教會が一統なる者 (Catholic) と稱せられたる理由は屢々誤解せられたり。先づ該稱號は重に其が廣布する土地の大を指すと思惟せらる。是を以て彼の「讚主歌」The Deum と稱する者の中にも「全天下に徧き聖公會」と大凡に翻せられたり。併し乍ら彼の Catholic と云ふ形容詞の姿には遙に是よりも深長なる意味の籠れるあるは、凡そ希臘語に通ずる人の直ちに感ずる所ならん。基督教會は單に一地方又は一國民の教會に對して一般の教會 he katholicou (the Church



in general)と稱するに非ず、是れ *he katholicke* (即ち其内部の特質が天下に統普遍 *universality* なる者)なりとす。例へば此形容詞 (カソリック)と載たる最も古き文書の「——即ち「聖ポリカ  
 ルノ之殉教」と題する書の中に於ては、實際の廣布を表するには該形容詞の外に尙他の句を添ふ  
 ることを要すと感ぜられたる者あるを見る、即ち單に「統教會 (カソリック、チヨルチ *katholicke*  
*eklesia*)」と云ふを以て足れりとせずして、更に又之に加ふるに「天下に徧き」(*throughout the*  
*world, kata ten oikoumenen*)と云ふ句を以てしたり。之に反して「統教會」と云ふ稱號は基督教  
 社會中の一支教會にも亦當てられたること、例へばポリカルプが——少なくとも一本の本文に依  
 れば——「カソリックなる一統教會の監督」と稱へられし如し。該語を一層外部なる意味に定めたる  
 は拉甸の學者輩なりと思はる、是れ彼等は希臘語には固より精しからざりしのみならず、又其性癖  
 として理想上の特質よりは實際上の組織を考がふる事に自然に傾むきたれば也。東部の學者たち  
 は土地上の廣大をいふの思想を排除せざりしと雖も、亦形而上の觀念をも盛んに主張したるを見  
 る。ヘルサレンの聖シリル説て曰く、基督教會は「地の此一端より彼の一端まで全世界に徧在す  
 るに因り、又萬人の須らく知るべき全體の教義を天下に統に (*katholikos*) 誨ふるに因りて、一統  
 なる者と號す」と。されば「一統」(カソリック)の反は局部的(と云ふ語)に非ず、一片(と云ふ語)にも  
 非ず、實は「異端的」(と云ふ語)なりと知るべし。

基督教會は其實絶大なる者にして、我等が出入する支教會の如きは僅かに之が千萬分の一なる而  
 已、此事を會得するは實際に大いに益する所ある也。此の天下に廣がりざる無数の教會が畢竟皆  
 一なる者なるを考ふれば、心胸の大いに恢宏するを覺えん。但し基督教會が斯の如く天下に廣ま

りたる所以は即ち其固有の品質に存す。八方に透徹し一切を網羅するは基督教會の性質なり。其  
 中に自由の靈やどりて鼓舞するが故に、斷乎として教會は其釘づけせらるゝを拒み、其石に化せ  
 らるゝを拒み、其鑄つけらるゝを拒み、飽までも變化自在にして能く萬殊の世態人情に應ず。我が  
 宗教は猶太人民の宗教の如く單に一箇の人種または民族に適する形を以て與へられたる者に非  
 ず、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、人民の文野に關せず、百般なる政體の下に在て世界  
 萬國に往く處として一も均しく可ならざるは無く、實に天下を以て家郷とす。キリスト自身の如  
 く、一統教會は凡そ眞箇に人間の事なる者には何にまれ盡く同情を表せざるは無し、又何にまれ  
 人間全體に及ばざるが如き狹隘なる者には界限せらるゝを肯んぜず、是れ教會はキリストが開き  
 たまへる新人間社會と其廣大(廣狹大小)を等しうする者なれば也。教會の任は各箇の人心を捕  
 捉し、之を薰陶し開發し、之をして其終に合せんことを預定せられたるキリストの生命の特色を呈  
 はさしむるに在るなり。

惟に是に止まらず。我等もし更に一步を進めて基督教會は何に由て斯く千態萬狀の人類を均しく  
 教化することを得るやと尋ねるならば、是れ教會が滯る使命の性質の然らしむる所なるを曉らん。  
 基督教會は天下に統の教會なり、何となれば是れ天下に統に傳ふべき福音なれば也。天下には一  
 人として之に漏るべき者は無し。或る點に於ては天下萬人皆ひとし。皆眞神の性質を教へられん  
 ことを要す、皆罪を犯したり、而して畢竟みな其罪を償ふの必要を感ず、皆——一箇人とし又社  
 會の人員として——其罪を脱せんために神の助を要む。福音中の主要なる元素は是等の必需に應  
 ず、而して一統教會は此等の要素を天下に明言するを以て任とし、右にも左にも之を避けて曲が



ることを肯んぜず。宗派なる者(sects)は或る特別の見解(眞にもあれ偽にもあれ)を主張せんことを目的とし、又は或る特別なる行事(是にもあれ非にもあれ)を進張せんことを目的として立てども、一統の正教會は「眞理の言を正しく頌ち教へ」て(提摩太後書二章十五)、泰然と其步履を進む、——或は又多分聖パウロの語が言外に含蓄するならんが如く、眞理の言を大道の如く一直線に敷き設けて傍徑岐路に陥まよふの恐なからしむ。さりて教會は決して眞正の研究問題を等閑にせず又蔑視せず。教會は一切の眞理を敬重す。教會の一統普遍なることは、其が自から此の如き無上なる天下の大事實を勇猛に主張して失墜せざらしめんと努むるに於ても、又此等の大事實を細目に應用するに方りて沈着に正統の見解を守るに於ても、俱に顯然として見るべし。されば教會は重に此の道理を以て一統と稱す、——即ち教會が一統なるは天下の人々を糾合して就かしむる中心たる教義の性質に因る者なり、其が眞理を教へ、眞理の全部を教へ、唯眞理のみを教ふるに因る者なり。何にまれ基督教會には「特殊の教義」ありと想像するは誤なり、如何となれば凡て眞なる者はことごとく教會が信ずる所の本體に屬する者にして、凡て虚なる者はことごとく教會が排斥する所なるが故なり。

第五節 但し以上に説き來れる「一統」なる者(Catholicity)は或は凡そ眞理を求むる人々に對する曖昧模糊たる薄弱の禮貌と化したしらんこと、今日半基督教「化せられたる」世界に於て人々が「一統」Catholicityと考ふる者の如くならんと危ぶむ杞憂家なきに非ず。然り、基督教會内に若し上古よりの相傳説力ありしに非ざれば、如何にも是の如く成りゆきつらん。其相傳説を

重んずることは古來基督教會の一大特色にして、亦これ基督教會の一統なる品質を防衛せる大干城なりき。此點に於て教會は唯に人間の保守的精神に支配されたるのみならず、又神に對する責任といふの念を以て支配されたる也。教會は己れが相互の同意より生ぜし如き地上の産に非ざるを知り、基督のために證を立つべき目的を以て神の特に創造したまへる者なるを知りて因て、其最初に授かりたる默示(天啓)を其儘に無疵無雜にして代々相傳ふることを其義務の最第一なる者と古來常に深く自ら感じたり。任意の社會或は團體(即ち宗派の如き者)には是の如き義務あること無し。其創立者の説を改易することは斯る任意の社會に在りては毫も罪なる者にあらざ。然れども基督教會に於ては是れ罪の最も大なる者なり。教會に於ては其創立者を自ら「眞理」なりし者と信ず(聖約翰福音書十四章六)。教會に於ては其創立者が眞理の靈を授けたまへるを知れり(同書十六の十三)。教會に於ては深く信ず其創立者は始めて天啓を垂るゝに當りて先づ其極初の信徒——使徒たち及び之に次ぐ所の人々——に授くるに眞理の富の全體を以てし、彼等をして之を自ら理會することを得せしめ、又善く之を以て人を教ふることを得せしめたまへり。此等の明哲なる教師の口を経て教會は萬國および萬世のために、神聖の委託物として、眞理を授かりぬ。「爾が托せられし事を守れ」とは將に世を辭せんとする使徒たちが嚴かに命じたる所なり(提摩太前書六の二十)。「聖徒が一たび傳へられし信仰の道のために力を盡して戦かへ」とは彼等と偕に天啓を與かり受けたる同僚の唱へたる所なり(猶太書三節)。「教會相傳の説には毫も新たに加ふる所あらざれ」とは第三世紀に羅馬の監督が答へたる所ならずや。「古代よりの風習を重んぜよ」とは第四世紀に於てニクアの監督會議に再言せられたる所にあらずや。萬事この尺度を以て臧否



を導られたり。是果して基督教會の初より信ぜし所を行なひし所に適ふ者なるや。若かなはずんば、是れ其非なるを自白せる也。此の尺度の照してニクア會場に衆聖師はアリウス宗を排斥せり。此の尺度に照して今日の議論も決せざる可らず。何等の新説にもあれ決して舊來の聖遺産に加ふべからず、——縦や或る方面に於て新説も已に年ふる久しくして古代の色を呈するありとも、努め之を取る勿れ、又何れの方面に於てなりとも、該聖遺産の部分にして若し排除せられ或は無視せられたるあらば、一統たるの權理を明らかにし得る前に先づ之を挽回せざんばあるべからず。聖經は——特別にも新約聖書は——一統教會の相傳説を護持する錨なり。固より基督教の新説および慣行を悉く現存する使徒たちの文書に原ね徴せんとするは、歴史に暗き者と謂はざるを得ず、何となれば一統教會の相傳説は是等の文書よりも古き者なれば也、然のみならず、此等の文書中には一統教會の相傳説あるに非れば解説に惑ふべき者おほし。例へば「主の日」を守りたりと云ふ記事の散見するが如き是なり（黙示録一章十）。此等の記事の意味は、新約聖書中に載たる解釋に照して之を知るに非ず、基督教會の慣行を實地の註疏として之を知る也。但し新約書の價値の一大要素たる者は其善く吾人のために初代に於ける信仰と慣行との實歴史を保全して矜式の標準となるに在りとす。基督教會に於いては其最後の事物其最初の事物と相一致して恃らざらんと若し果して之が一統たるに缺くべからざる者なりとせば、我等は此に言細むる能はざる見證者を有す。教會に宿れる聖靈にとりては、此の手段を用ひずとも教會の教義を恒久に保全するを得たらん、然し乍ら教會は尙其生來の嗜僻をたもてる人群の團結體なるが故に、又口碑に係る傳説は新分子を吸収し舊分子の若干を漸々に失なふを以て著しき者なるが故に、聖靈は後年の増減を

除くの保證として教會に與るに此等の文書（其自身も亦是れ教會の最第一最善美なる思想）を收めたる者を以てせり。教會の内において聖靈は恒に聖書に對して見證をなしつゝあり、古來教會の何れの部分にもあれ、若し聖書に訴ふることを好まざるあらば、是れ或は他の靈が基督の靈の地位を奪ひて之に代れる者なるの明驗なりとす。「聖書の護持者」なりといふは教會が古來最も誇りたる所の一なりき。此の如き名稱は教會が其相傳説——教會が使徒たちの指導の下に在て歴史上の行程に荷ひ上れる相傳説——に飽きまでも忠實なる者なることを暗々裏に示す者とす。

**第六節** 聖書は一統教會の教義を萬世に鞏固ならしむる大保證なりと雖も、また是同時に其教義の無盡藏なる富をも均しく表出し、隨つて又其教義中なる進歩の元素を代標す。決して聖書は單に初代の基督教徒の信ぜし所を行なひし所とを網羅せる古實の寶藏には非ず、神の語は一として死物または廢物となる者にあらず。聖書は神の永遠なる活聲にして、萬世の人々に對して其説くところの新たなることは、初代の人々に説けるの新たなるに異ならず。聖書は神の感動を受けて書きたる者と我等は信ず。正しく學びたる時には、其一部分として、思想言行の嚮導たる神の訓誨ならざるは無し。「聖書の字句には凡て神の感動の充ち満てるありて、能く教訓となり警戒となり、道に歸せしめ義を學ばしむるに益あり」（提摩太後書三の十六）。聖パウロが此に舊約書につきて言ひたる所は亦少なくとも新約書につきても然る者なり。

但し神の感動（神感或は神來）は如何にして起りしかといふにつきては、教會は何の機械的なる見解にも拘泥する者に非ず。聖書の筆者は「聖靈に感じて」書きたり（聖彼得後書一の二十一）と



信じて教會は満足す。筆録者は聖靈の機關として一に天の刺激する隨に夢中に之を書けること恰かも琴瑟が彈奏者の手下に鳴るが如しと始めて唱へたるは異端家たる教師なり、一統教會の教師に非ず。却つて「其心のまゝに各人に願與ふ」る（哥林多前書十二の十一）聖靈は此大事業を成さしむべき人々を特に選びて之を其器に堪ふる者とならしめれば、彼等が天然の氣風、境界、教育、並に其弱點および過失さへも聖靈の用となして、其が目的を達するの具とは成りぬ。聖靈は人々に教ふる所あらんとせる者なるに因て、先づ己れの思想を人々（人類）の思想たらしめたり、是れ其思想をして幾層明瞭にして勧誘に力あらしめ、人間の生命と同情とを以て活動せしめんが爲なりき。

例へば最初の三福音書における小異同、小齟齬、——或は多分小過失——の如きも、聖筆者（神に感動せられたる人々）に此自由ありと假定して始めて了解するを得べき爾。聖馬太はガダラの岸に二人の懐鬼家「鬼に憑られたる人」ありしと書けと直接に感動せられ、聖馬可は一人の懐鬼者ありしと書けと直接に感動せられたりと思ふが如きは、聖書をして人の笑を招かしむる者とする。基督教會の信仰を懐く人々には斯る事どもは決して困難なる者にあらず。此等は却つて恭敬深慮なる人々を導いて一層深遠に且満足に神感を觀念せしむるに至る、是れ斯る神感に單に聖靈が聖筆録者の手を執へしを示すのみに非ず、直ちに之が骨髓を感動したるを示す者なれば也。是に由て之を觀れば聖筆録者の思想が呈する形跡「記事の躰裁」は聖靈の特別なる感動に出たる者と謂んよりは、聖靈の一般なる指導に出でたる者こそは謂ふべけれ。神の目的は文字の誤なきを致さしむるに在るに非ずして筆る真理の靈を注入するに在りしと言ふども、不敬の譏は無からん。

聖書は最大要點に於て全く眞實無妄なる者なりとの説を基督教會にては決して棄たるに非ず。舊約書中に於ける戦死者の數は或は誤りて書されたらん（恐くは傳寫者の誤ならん）雖も、福音記者中或ひは此の預言者の詞を彼の預言者の詞として引きたるあらん（もつとも其解説は當時に存して今日に傳はらざる事實中に或は見えたらんと雖も）、——然れども此の如き細節枝葉における精不精は夫の教義、禮拜、道德等の根幹事件に於ける精密と固より日を同じうして論すべきに非ず。例へば聖パウロの如き、キリストに對する熾なる忠烈を以て徹したる心魂の人は、或は斯る歴史上の論争をば憤然として蔑如したらんと雖も、我等の主の性質または救贖の道を暗くし若しくは明らかたすべき一字一語につきては最も熱心に千萬言を費やすを辭せざりしならん、而して我等は能く其然る所以を了知す。教理上の説は聖書の中に在て全然正確にして眞實無妄なるを見る、如何となれば教理上の説は思想恭敬及び經驗の骨髓（全内生活）より生ずる者なれば也、其他の諸點に於ては精密と不精密とは只是れ記憶若くは探研の何如に由るのみ。

然し乍ら眞實無妄（不能錯的 infallibility）は唯是れ聖書神來の一方面——消極的なる一方面——のみ。古來教會に於ては常に信ずらく我が受けたる聖書は、唯に其載る限りは信を置くべき者たるのみならず、又完全にして足らぬ所なしと。聖書結集の歴史を查べても吾人は學ぶ所おほし、該事件に於ても亦聖靈の一般の指導は聖靈が教會に昇へたる天性と協和して働らけり。使徒たちの書翰中已に遺失して傳はらざる者は今現存する所の書翰よりも神の感動を受けたること少なかりしと思ふべき道理たえて無し、其事は恰も我等の主の言行中其記録せられざる者は其記録せられたる者よりも少く神妙なりしと謂ふべからざるが如し。然れども神の御旨によりて其等の



文書は速かに消滅し去りぬ、而して教會は其消滅せしを敢て眩やかざりし。斯くて基督教徒の心には漸々に左の感を形づくり來れり、云く今日聖書と稱する一群の篇籍は教會に於て始めて受たる「賜はりたる」教を唯に真正に代表するのみならず、又十分に代表す、云く自餘の卷帙にして保存せられたらば、其富には毫も新元素を加ふる無くして徒らに基督教徒が學ぶべき者の量をやしたらんと。故を以て聖書に載せざる事を唱ふるは新奇を街ふの事と稱せられ、遂に虚妄なる事または（少なくとも）不必要或は無用なる事と同一視せらるゝに至りぬ。聖バシル(St. Basil)の「猛烈なる語」(マエリミ、テローラ氏の句)は本件に對する師父「教會祖師」たちの感情を明かにす、曰く——「聖書に載たる者を輕んじ、載せざる者を加ふるは、是れ信仰の道を失墜せる者なること明らかにして、又僧妄の罪を犯せる者なるや甚だ大いなり。」

但し新奇にして且未經なる事を信仰の箇條として唱道するは、——縱や基督教徒てふ名稱は失なはぬにもせよ——「一統教會」といふの權理を失なふ者なれども、聖書に載せたる本來固有なる者を闡明開發するは、一統教會の生氣勃々たる徵なり。教義を宣ふる辭に千篇一律にして、正統教會の式文を單に反復するに止まるが如きは、一統教會員たる心の確證には非ず。是れ或は敬虔なる思想の停滞を示す者ならん。聖書の田園は、已に幾千年が間耕やされたれども、其尙膏腴なることは新墾の土地に異ならず、而して教會は世紀を重ねる毎に益々其收穫の増加する者なるを曉れり。今日の我等は使徒たちの膝下に坐することポリカルプやクレメントに毫も異ならず、而して我等が使徒たちの言を理會するの力は一千八百年間雲のごとく起りたる聖徒の勞に由て大いに増したる也。教會にして若し忠信ならば、一統教會の教義上に進歩あらざるを得ず。唯一つ

必要なる用心は其進歩中に信仰の道を變ぜざらん事のみ。レリンの聖ツァンセント(St. Vincent of Lerins)は新奇の説を教會に加ふる事には飽までも反對したれども、教理上の進歩をば之を生物の成長に比して明らかにせり、謂へらく其本體は千古同一なる事を失なはず、其四肢百骸の比例は依然として永く存し、只其衆部分の益々發達し、其鞏固と力量と柔徳の日々に加はるある耳と。

**第七節** 諸かくのごとく教會が一統なる事は、其一なる事、及び其聖なる事とひとしく、尙吾人に與ふるに前途に目ざすべきの目標を以てす、既に呈し得たるを賀すべきの奏功を以てするに非ず。聖靈はなほ「我等を導きて一切の眞理を知らしむ」るに爲すべき事おほし(聖約翰福音書十六章十三)。此事は各支教會および各基督信徒が一統といふ稱號を獲て戴かんことを努むるの時に至りて始めて完たうせらるべし。聖パシアン(St. Pasian)曰く、「基督教徒といふは吾が名なり、一統といふは吾が姓なり」と。何等の基督教徒にもあれ、何等の基督教團體にもあれ、自ら徳に慚ること無くしては是に異なる他の告白をなすを得ず。但し一箇人若くは一教會が由て以て一統なるべき唯一の道は一統なる教會の權威を護んで敬重するに在る也。

斯る敬重は盲然たる服従にあらず、又は思想の眞自由或は一己獨立の判断に反する者にあらず。謬妄「を吐く」の靈が、不聖潔「を傳ふる」の靈のごとく、天下の教會に跋扈する時も來らざるに非ず、斯の時に於ては僅少の忠信家如何なる孤立の苦を忍びても奮然身を挺きて起ちて其横行濶歩まつのある虚妄の教説を打開かざんばあるべからず。基督教會は錯まる能はぬ者なりと雖も、尙



時として眞理は片隅に逐おとやらるゝあらん、當時の人々に異端邪説の徒として退放せられ、迫害せられ、義絶せられたるアサナシウスありて僅かに基督教義の命脈を維持するが如きあらん。各基督教徒は自ら己れの爲に考へずんばあるべからず。然らざれば、我が主の學校に於て善良の學生たることを得ず。且又其教へらるゝ所の者を受くるに疑惑し且躊躇するは必ずしも常に精神の誤まれる徴にあらず。眞理を疑がふは屢眞理の纖微をききめ委曲をつくさんと欲するの情に外ならず。懷疑の精神——只批評するのみにして毫も堅く信ぜざる精神——は基督教徒の精神に非ずと雖ども、研究の精神——眞理を終に達し得べき者と信じ、而して善く悟らん爲に先づ疑問する所の精神——は是れ聖書の中に「志氣の高き」*Robo*。者と評せられたる所なり（使徒行傳十七の十一）。竊かに按ずるに「眞理を愛するの愛」は縦や紛錯迷謬の中に彷徨すとも、愛する精神なしに持する最も正確なる信經よりも却つて神に悦ばるゝ者ならんとは、實に聖パウロの語に依て我等が敢て信ずる所なり（帖撒路尼迦後書二章十一節を見よ）。該使徒も亦我等の主も俱に認めたまへり人間には眞理を悟るの能力ありて、其能力は正當に運用する時には信憑すべき者なりと。斯の如く聖パウロは己れの宣教を稱して曰く是れ「眞理を願はして神の前に己を衆人の良心に質す」者の擧なりと（哥林多後書四章二）。又キリストは己れを信ぜしユダヤ人（——即ち信仰の初歩を著けたる者にして尙満足の見識を去ること極めて遠き人々——）に向ひて言たまはく、「爾曹もし我がことばに居らば誠に我が弟子なり、且眞理を識らん、眞理は爾曹に自由を得さすべし」（聖約翰八章三十一二節）。

但しキリストの眞正の弟子たる者は必ず記憶せん我が連なれる社會は誰も彼も或は均しく推量し

中つるを得らるらしき冒險推量家輩の團躰にあらず、是既に眞理を保ちをり、且其眞理を天下に宣傳せんことを神より任せられたる社會なりと。固より各箇の人は其教へられたる所を自ら證驗して大に益する所あるべしと雖も、其聖書に對するや未だ其中には一物も確實に證明せられたる者あらざるが如くにして之に臨むには非ず。猶ほ研究せらるべき所は多し、然れども若干の點に於ては教會は已に極めて明瞭に其證詞を與へたるありき。例へばキリストは神性を具有すとの教を今日に於て復審再考せんことを教會に望むが如きは既に晚し。一箇人としては若し之を未決問題と思はば然か思ふことを得ん、然れども然かするは是れ自ら基督教會を審判する者として立つなり、随つて又これ夫の「爾曹を棄る者は我を棄る也、我を棄る者は我を遣はし、者を棄るなり」と宣のたまひし者を審判するに當るなり（聖路加福音十章十六）。此事は其他の許多の教説につきても——即ち教會よりは未だ判然明瞭なる宣言を得ざれども、古來實際に衆説の一致したるが如き件々につきても——亦同じく然る者とす。

若し一統教會の金科玉條とすべき教は何處に之を求むべきかと問ふならば、其答は性急の人間が得んと望むほどに單純なる者には非ず。基督教會は教ふる人々と教へらるゝ人々とに大別す。該社會内の領袖たる役員は教會の教説を宣布することを委任せられたる者なり、然れども會長または監督は其大任を帯ぶるが爲に萬々錯ること無き者とせられたりとは、古來未だ嘗て主張せられず。教ふる地位に立てる人々にありても、教へらるゝ地位にたてる人々に在りても、教義上に精なると不精なるとは、一に其が心光發明の聖靈と一般の正教會とに忠信なると否らざるに依る者とす。羅馬の監督（法王）の場合に於ても亦然り、決して例外を立つべき十分の道理あるを見ず。



是の如き思想（法王の言行が眞實無妄にして萬々錯まる能はざる者なりとの事）は只これ一片の理屈上より斯る地位を地上に要すとの説を以て根據となせる而已、而して是また預め歴史に誤まられたる者なりき。種々の道理によりて上代の基督教徒は羅馬府の教會と該教會を代表せる監督とに非常の尊敬を呈したり、然れども大疑問は凡て衆議を待て決せられたり、羅馬監督を萬々錯まる無き者のごとくして獨之に裁決を仰ぎたることは無かりき。一統教會が然か一監督（法王）の領分内に必然に集中し、常に必ず正しく教會の相傳説を代表すといふことは、到底了解する能はざる所なり。神が其教會を経て世に諭したまふ方法は是の如く機械的なる者にあらず、一層其通常の手段に類する者にして、是よりは幾層活氣の充滿せる者なり、——即ち此方法たるや是れ外部の託宣に諮ふ事または既成の神語に服する事に比ぶれば、智力の訓練と信仰の修養を要すること遙かに大いなる者とす。

全社會の協同合議に由るに非れば、眞理は終極の定解をも細目の決定をも與へらるべきに非ず。古代の教誨に依れば、基督教の信仰の道は教會の諸監督に——一箇人として又一團體として——均しく嚴かに委託せられたる者なり。一切の監督衆は一同に、又別々に均しく之を護持するに責任ある者とす。天下一般の監督衆が合議して決したる所は或は「一統」決議たるの觀あらん、然るも尙其決議は天下一般の信徒に之を諮詢す、而して監督會議は其決議が天下一般の信徒の採納を以て批准確定せらるゝまでは天下一統の監督會議（Ecumenical Councils）と稱するを得ず。且又今日の教會信徒悉く其説を一にするに至りたればとて、其一致にして前代の教とも一和するに非れば、未だ以て足れりとすべからず。聖ツァンセント曰く、「或る近來の腐敗もし單に一教會に

傳染することを以て足れりとせず、尙も進んで天下の全基督教會に徧く傳染せば、一統教會の基督教徒は將之を如何せんとするか、斯る時に於ては須らく現今の欺妄誘惑の及ぶ無き古代の明教に固着して離れざるべし」と。教會と教會との間にあける、及び教師と信徒との間にあける、及び世と世との間にあける、斯の如き交渉（交互作用）に由て一致と愛と相互の信任とは漸々に發達す、而して教會が由て以て一なる者とせられ、聖なる者とせられ、併せて又一統なる者とせられたるキリストの靈は隨時隨處に天下の基督教會の全軀に徧滿磅礴すと感ぜらる。

### 第八節

神の教會の最後の標識は其使徒相傳なるに在り。此稱呼の基督教會に屬するは強ち教會に於て最古の教義を教ふるに因るに非ず、又は使徒たちの生活の如き單純なる生活をなさんことを目的とするに因るに非ず、其托せられたる使命の撓むことなき者なるに職として維れ由る也。教會は今も尙ほ其眞に遺はされたる者なること其創立の當時に於ける使徒たちの如し、——否な基督自身の如しとさへも謂つべし。實に教會の使命（派遣）は唯にキリストの使命に比すべきのみならず、歴史上より之を言へば、全たく同じき者とす。我等の主が復活の夜に吐きたまひし大文章に於ては字々皆この意味を明かにす、曰く——「父の我を遣はし、如く我も爾曹を遣はさん」（聖約翰福音書二十章二十一節）。我等の主の使命は同様なる他の使命の來り嗣がんとたれに已に終を告げたるに非ず。キリストの使命は尙も効力を有してありき、否な寧ろ今方に十分の効力を呈せんとしつゝありき、而して基督が其使命を行なひたまふ方法は其使徒教會に由て世を教化するに在る也。又キリストが始めて教會を「派遣し」たまひし刺衝は已に用ひて竭きたるに非ず、又永



久竭きざるべし、是れ滾々と出で、窮りなき者、——其滾々たるは教會をして有力ならしむる者のごとく、即ち聖靈が教會に注ぎ入るの滾々たるが如し。キリストが「陰府の門は之〔我が教會〕に勝つべからず」と言たまひしは（聖馬太十六の十八）、單に教義上の眞實無妄——錯まる能はざるの事——を指すに非ず、更に是よりも深遠なる者ありて其中に存す。教義上の誤謬は教會の生命が時に或は累らはさる、一種の患のみ。然れども教會は是等の患には願得て餘りあらんとす。基督教會の或る二三の部分は或ひは衰微して死滅せん、然れども全躰としては教會は唯に活るのみならず、依然として永久に若し。教會は罪惡の「汚點」をあらはすこと無かるべきのみならず、又老年の「皺」をも戴くこと無かるべき者と稱す（以弗所書五の二十七）。教會が一たび有ちし力は星霜のために無くなる者にあらず。昔は奇蹟を行なひたりと稱しながら今は何故に奇蹟を行なはざるやと嘲りて問ふ者あらば、之に對して神は奇蹟を行なふの力を教會より取りたまへりと言ふが如きは、不忠信の讒を免かれじ、宜しく答へて言ふべし事情すでに一變し了れり也。キリストも其使徒たちも奇蹟を行なはざるべからざる事情あるを見ざれば奇蹟を行なはざりし也。事情にして果して奇蹟を要する者あらば、昔と同じき「主の力」(神力)ふたゝび我等に臨みて、我等もまた奇蹟を行なはん耳（路加五章十七）、如何となれば奇蹟を行なふの事は只是れ夫の今もなほ永遠に教會の生命氣力たる聖靈の一行事なれば也。

時として教會は其天下萬人に對する天の使命を忘れ、未だ教化せられざる人民の中に道を傳ふることを廢めて、只獨り自ら淑して満足せんとする無きに非ず。又教會の或る部分はエラスマス主義 (Erastianism) を持して徒らに王侯の奴隸とならん、又或る部分は羅馬帝國の如き帝政主義

(Imperialism) に倣ひて、猥りに天下を統御せんことを謀らん。然れども斯る不忠信あるにも拘はらず、主はなほも教會を此世における己れの全權公使として用ひ、教會の妄動に由て自ら世の譏諷を招くをすらも咎やきたまはず。世々代々教會は其主より委ねられたる權力を行用し、主の名と主の權威もて福音を宣べ眞理を教へ、罪を赦し或は赦さず、擧げ或は釋きて信徒のために訓戒の則を定め（馬太十六の十九）、恒久の犠牲をさへげて祝福し且仲保し、聖成の方法を施し、又人々を聖職に任命す。

**第九節** 今此に少しく基督教の聖職員を論ぜんとす。但し我等は劈頭第一に先づ是は使徒の衣鉢をつげる教會の信徒全體を謂へる者にして、唯に其中の或る一階級を謂へる者にあらずと明かに認めざるべからず。キリストが復生の夜を以て與へたまへる委任は、單に「十一の弟子」に與へたる者にして「彼等と偕にをれる者ども」は毫も之に與からずとは到底證明すべからず（路加傳福音書二十四章三十三）、——或はまたペンテコスタの日に聖靈は唯十二使徒に降りしのみにして、自餘の人々は使徒等より之を願與せられたりとも謂ふべからず。全社會の人々その委任或は使命を承けたり、全社會一時に神の感動をうけて其使命を行ふを得る者となりぬ。教會内に現存する區別或は階級は決して教會の一なることを破るが如き者にあらず。使徒教會の内に在りては皆「祭司」なり。俗信徒のために禮拜を執り行なふことを司とれる僧級の如き者（一統教會に反對せる或る人々が教會にて創設したりと想像せし如き特殊の聖職員）は絶て無し。教職と俗信徒の差別は只これ祭司たる地位の上下なる而已。此事は任職式 Ordination 及び聖品 Holy Orders



といふ古名稱の中に含まれて見ゆ、此等の名稱はすなはち教師と俗信徒との差別が職掌と品秩と  
 互相の關係に屬する者にして、根本より相表裏するの差別に非ざることを證すれば也。教師は若  
 し縱まゝに忠信なる俗信徒より分離するならば、キリストの名を以て事を爲すの權を失なひ了ら  
 ん爾、彼等が教師(祭司)として務むる所の職は教會全體の職にして、唯彼等を之が執行の機關とな  
 せる而已。

但し此に二件の忘るべからざる者ありて存す。基督教教師は祭司たる性質の者に非ずと論ずる人  
 々は、動もすれば之れと併せて亦基督教全信徒の祭司たる性質をも滅し去らんとす、即ち彼等は  
 我等皆祭司(教職)なりとの言をして何人も祭司に非ずとの言と同一義ならしめんとす。基督教徒  
 が眞に祭司たるは、唯に自ら直接に神に近づくの權あるを謂ふのみに非ず、是また我等を其各の  
 地位に於て聖成して他人のために中保者たらしめ、而して我等に負はしむるに靈界に教權を握る  
 の特權と責任とを以てす。我等が皆員に列する聖階級中に於て高き地位を占むる事は亦是れ祭司  
 たるの力を増せる者とす。——第二には、教會の品等は人爲苟且の制に非ず、是れ本然固有なる者  
 なり。我等の主は(前にも言ひし如く)其苦死の前すでに其社會に與ふるに構造の基礎を以てし  
 たまへり。聖靈は其來れる時之を斯る者と視、斯る者として之を印證したまへり。聖靈は元來  
 一般に秩序を以て其業とせる者なれば、次序なく定形なき群團の人衆を選びて人類救贖の使命を  
 帶べる機械となしたらん事は、理に於て有るべからざる怪事と謂はざるを得ず。基督教社會全體  
 の福利を維持せんためには、部分が全體に對する關係を正しくし、全體が部分に對する關係を正  
 しくせざるべからず。目もし其人體上に本來占むる所の地位に在るに非れば物を視る能はざる者

ならば、人體もまた其神設の目を棄て、或る他の視官を起さんことを計るべきに非ず、各々定分  
 の在るあれば也。

人々時としては謂へらく、教會の聖職員衆は下より總代の委任を受けたる者なりと。謂へらく團體  
 中の或る人々便利のために選ばれて自餘の會員を代表す、若し此委任あるに非ざれば、其職掌は  
 他の基督教徒何人にも之を執り行なふことを得べしと。斯の如き臆説は聖書の中に規定せられ  
 たる任職法に適はず、教會にて初より行なひ來れる聖成式に適はざるを奈何せんや。始めて會吏  
 を選びたるの事は此に適切なる一例なるべし。彼の時には俗信徒をして會吏を其職に選ばしめ  
 り、是れ教職に在る人々は秘密團體をなして萬事を其仲間にて辨ずるが如き者にあらざれば也。  
 今日にいたるまで凡て一統教會の任職あるに際しては俗信徒の意見を問ふを常とす。但し被指名  
 者は其指名を得るや直ちに聖職員となるに非ず、其聖職員となさるべきや否やを決するは一に教  
 會の最上階級に位する者の權内に存す。使徒たちは其選ばれたる人々を「立つ」といふ(使徒行  
 傳六章三)、是れ使命と管轄を附與する者なり、使徒たち「祈りて其上に手を按けり」、——是れ聖  
 なる資格および靈なる賜物を授る者にして、是に由て彼等は自餘の群信徒と永へに區別せられ、  
 恩恵を其職務上に饒かに賜はるに至る。此等の二件は使徒教會に必要にして缺くべからず、——  
 即ち其聖職員は適當の任職式に由て聖なる資格と賜物を授けられ、——又其職務を行ふべき委  
 任および權力を附與せらる。又此等の二者に加ふるに管轄(擔任地の配與)を以てして職務執行上  
 に秩序あらしむ。此等の性格は群信徒の與ふる者に非ず又群信徒の代表者が與ふる者にも非ず。  
 例へば帝王に於て人を監督領に任命するあらん、或は教區内の納稅者に於て其區立教會の牧師を



選ぶあらん、然れども後者は監督の聖成を待て始めて牧師となるを得べく、前者(帝王の被指名者)といふとも正教會の諸監督が之に按手禮を施すまでは、監督の稱號を戴だくを得ず。下より總代として委任せられたりとの説果して真ならば、按手する者は俗信徒ならざるべからず、而して監督領の空位となる毎に領内の代表者輩は其前任者の死に由て己れ等に復したる權力を其後任者たるべき監督に授けざるべからず。然るに斯の如きは聖書の中に於ても古代に於ても未だ嘗て聞かざる所なり。聖パウロは任職の權威を其他の統治權力とともに専らテモテまたはテトスの如き教師の手に委ね(提摩太前書五章二十二、提多書一章五)、之をして獨り神にむかひて責任を帯しめたり、而して又之をして適當の順序を経て其後任者を立しめんと欲したることは一目にして瞭然たるを覺ゆ(提摩太後書二章二)。

第一世紀の末と第二世紀の初に關する史料の乏しきために、該時期の教會組織につきては若干の疑ふこりぬ、然れども其疑團は重大なる者にあらず。縦や或る地方に暫らく小不規則の行なはれたるありとも、开は使徒たちより親しく再提命を蒙りたる人々の生前中に已に全く消滅し了りぬ、而して遂に教會は三級の聖職員あるに非れば完全なる能はずとの事一般に認めらるゝに至りぬ。任職式を行ひ按手禮を施し得たる者は監督のみ。此確信は如何様にして起りしにもせよ、或は(多分然らんと思はるゝ如く)主の命を奉じて使徒たちが直接に論したる所に係るか、或は教會の自然の天性に出たるか、——孰れにもせよ、是れ聖靈の業なりき。使徒相續は則ち基督教會の歴史的に連綿として始終同一なるの確證なり。之を失なひたる教會は假令其所爲を他の諸教會(即ち上代よりの相傳説を保てる教會)より無効力視せらるゝとも、苦情をとらふるを得ず、

自業自得なる而已。

**第十節** 此一たり聖たり一統たり使徒相傳たる教會は唯に此世の終まで同一なる者として存するのみならず、又永遠に同一なる者として存せんとす。基督の新婦にして我等すべての母たる者の行徑は凡そ彼女の代表的なる子たる者の行徑に多く類するあり。先づ彼女「教會」は此世にて試煉を経ざるべからず、而して我等彼女は失敗に歸し終るべき者に非ずと知ると雖も、其約束は須臾も警戒を緩むるを許すが如き者に非ず。聖書の中には大失墜の來んとする事を以て我等を警め、虚妄の教説が狡猾なる外形を以て宣傳せられんとすることを以て我等を警しめ、淫猥なる教誨および禮拜が奇蹟を以て維持せられ嚴平たる聖行の觀を呈せんとすることを以て我等を警しむるあり。眞正の教會(眞正の基督教徒)は之を棄教したる大群民に比ぶれば遂に或は少數なる殘餘者となりをはらんも知るべからず、——否な剩さへ其棄教は基督敎國內に於ける最も勢力ある監督領中の或る者これを鼓舞獎勵せんも知るべからず。何等の特別教會の將來につきても確然たる保證あるを見ず。然しなながら千萬年後の教會も(萬一僅少の遺餘者たるに過ぎぬ者となりたるにもせよ)唯に初代の教會と靈心上の同情を有せんのみならず、又實質上に於ても同一なるべし、基督の立てたまひし教會は決して死して他の代る所となるべき者にあらず。今は其一なるに於ても、聖なるに於ても、其信する所に於ても、其使命或は天職を感ずるに於ても、凡て不完全なり、然れども後には完全なる者とならん。但し完全にしても不完全にしても、基督の正教會たるは即ち一なり。アフリカの一統教會員は昔し嘗てドナタス宗徒(Donatism)に反對して主張して曰



二百四十四  
く、「今日善人と悪人とを併せ含む所の教會は是の如き混合物あらざらんとする純潔の『神の國』と異なる者にあらず。是れ全く同一の聖教會なり、唯今日は此の状態にあり將來は彼の状態にあるの差ある耳」。

## 第九章

### 施恩の要具

施恩の要具 (The Means of Grace) は社會ト個人トニ同時ニ屬ス―神ノことば―「サクラメント」ノ根本主義或ハ大本―其ノ數―はぶてすまニ由テキリスミニ合時ス―罪ヲ洗ヒ潔ムル事―更生―小兒ノばぶてすま―「此サクラメント」ノ執行―堅信禮―堅信禮ノ施行法―聖餐ノ聖面ニ横タハシテキリスミニ吾等ノ扶持者タリトノ觀念―實現 (The Real Presence) ノ既―キリスミニ血―聖餐ノ犧牲―基督ノ祈禱―解罪 (懺悔)―病者ノ抹油―聖品―結婚

第一節 教會と一箇の信者との接続點は施恩の要具―キリストの立て聖靈の用ふる諸方法―に存す。謂ゆる施恩の要具 means of Grace は二重の功用を成す。同時に是れ一には基督教會が由て以て擴められ堅めらるゝ要具たり、一には亦箇々の信徒が由て以て基督の功業の持きたせる恩澤に與らしめらるゝ要具たるなり。神の智慧が之を斯の如くに安排したるを觀れば、是等二箇の目的は彼此相分離すべき者にあらず、又其一は他よりも重き者にあらざること明らかなり。基督教においては一己の魂は極めて重き者にして同時に又極めて輕し。即ち一方に於ては、是れ神の國を大きくするの具となり、基督教社會の富を増すに特別に益するの具となるだけを以て重んぜらる。然れども他方に於ては又基督教會は―之を構成する一己一己の魂あるに非れば、教會其物は只名のみ、只抽象的の空觀念のみ。抑も教會は單に人魂を拯ふ爲に裝置せる一片の機械にあらざして眞に活物なりと雖も、其活物たる生命は拯救事業を盡すに存す、彼がキリストの新婦として眞箇に存在するを得るは全く實地に新アダムの爲に人々を生みて「群生の母」と成るに因



る者とす(創世記三章二十、加拉太書四章二十六)。

二百四十六

第二節 基督の設定に係れる施恩の要具中にありて第一に位を占める者は神の言を宣べ傳ふる事なり。説教は之をサクラメントの中に列せしむべき理由も多かりしならん。雖も、教會は其天性に導びかれて遂に之をサクラメント外に置くこととなりぬ。キリストは判然と特に命じたまひけらく、「獨り世界を廻りて萬人に福音を宣傳へよ」と(馬可福音書十六の十五)。其帶る外形は、目や手には訴たふる者ならざれども、耳に訴たふる者なれば、身軀もまた他のサクラメントに於けるごとく之に與かる也。且又説教には眞にサクラメントたるの恩恵と力ある者とす。其辭は單に辭たるに非ず、辭の外に或物を乗す。キリスト曰たまはく、「我が爾曹に曰ひし言は靈なり生命なり」(約翰福音書六章六十三節)。言語は全く是れ一大秘密なり。言語が人を動かすの力は絶大なる者にして、何人も之を十分に揣り盡したりとは謂ふをえず、是れ空氣の振動、音聲の擺搖を以て、種々の觀念を人々に注入し、以て其人の行徑と品質を全然豹變すれば也。基督教にては斯の如き大勢力を決して看過せず、説教にしてサクラメントの中に列せしめられずして之と並行せしめられたるならば、其故は是れサクラメントよりも多き處ある者なるに因る、サクラメントよりも少なき處あるに非ず。固より説教に由て來る賜物は一層大いなるには非ざらんと雖も、是れ一層直接に思想と意志の根據を動かすに力ある者なり。實に或る意味に於ては凡てのサクラメントは悉く説教を待て始めて其功を奏すとしも謂つべし。信仰なくんばサクラメントを受くるも益なし、然るに「信仰は聞くより出で、聞くところは神の言に由れば也」(羅馬書十章十七節)。會衆の

中に公然と説教する事の外にも尙神の言が人心に入るの道は無きに非ず、例へば宗教書を讀むが如き、宗教家の談話を聞くが如き皆其道に非るは無し、教會堂内に於ける活聲の嚴然たる又凜然たる説教には特別の力ありて存するを見る。公然たる説教が私かに道を教ふるの事におけるは、教會堂内に於ける一同の祈禱が家に於ける一己の祈禱に於けるが如し。神恩は雙方孰れにも宿る、然ども前者にはキリストの現前せんとの特別なる約束あるに似たり(馬太十八の二十)。勿論福音を説く事(即ち説教)がサクラメントと考へられざりし他の一理由は、其外形が一定不變の姿を具へざるの故に是れ由る者とす。説教の辭は千差萬別にして、聽衆の人物に應ずるを尙とす。言語の聖役(説教)においては、他の聖役におけるよりも、役者の人物を待つこと遙かに大なり。能辯や想像力のごとき枝葉の長技すらも説教の功力を大いならしむるに足る、況んや是よりも更に貴き靈なる力においてをや。説教者にして己が使命の現實なるを感ずること愈々深ければ、其聽聞人を動かすこと愈々大いなり、之に反して若し自ら信せずして、又は冷淡にして、徒らに宣べなば、施恩の力は幾分か弱くなるべし。然し乍ら教師の薄信なるが爲め、又は會衆の無頓着なるより來る反動のために、如何に多く聖靈は「熄」るありとも(帖撒路尼迦前書五の十九)、基督の説教は凡て聖靈の業なり。何方にもあれ、キリストの任命に係る公使(教師)が其合法の職掌を盡さんとしてキリストの名を以て語る處にては、キリスト尙ほ聖靈に由て語りたまふ者とす。教師輩は或は虚飾、誤謬、または混淆に由て福音の光を却つて暗くせんも知るべからず、然れども神の元素は其中に全く缺けたるにあらず、而して其心を神に感動せられたる聽聞人は砂礫の重疊せる下に此の黄金を必ず發見せんとす。教師が其目的に一心不亂なると其職務を正しく觀ずる

二百四十七



の大いなるに隨がひて此の神の元素なる者は益々彰はれ來るべし。護教的なる臆病の形を呈するにもせよ、博識を街ふの姿を取れるにもせよ、凡て自覺なる聖役者は其役者たるや弱し、併し乍ら天賦の能力は如何に少なきにもせよ、若し「人もし道と語らば神の示(託宣)と意ひて語るべし」といふ聖ペテロの言(彼得前書四章十一)に循がひて之を用ひなば、世を驚かすの大業をも成すことを得ん。聖ペテロの意は人をして聖書に恃らざる所の事を語らしめんとには非ず、其意に曰く凡そ基督教會に立て人に語るを職とする者は、キリスト以前における預言者たちのごとく、又使徒行傳中に載たる預言者たちの如く、須らく一に神に感動せられて語るべし、毫も私意を其間に挿むべからず、其能力を擧りて聖靈の使用に供し、聖靈の指導を奉じて忠誠に謙遜に之を活動すべし、——然らば寔に是れ神の託宣たる者なるべしと。

神の聖語を宣傳するの職は、基督教會内に於ける他のすべての禮典のごとく、之をして結果おぼからしめんには先づ信仰を以て之を受け、然る後深く之を沈思冥想するを要す。「聞きて忘るる者」(雅各書一章二十五)は——之を聞くときに於て恩澤をそぐがること如何に大いなりとも——何の益をも擔ひ去る者にあらず。是に於てか基督教會は聖書を一般人民の手に持たしむることを敢てせざりし時代に於てすらも、福音の眞理を私かに觀想するの風を常に獎勵したりき。公やけに説教するの事と私かに讀書し觀想するの事との間には親密の關係ありて存す。即ち公然たる説教は一己の修行に指導と活氣を予ふ、又忠實なる一己の修行は基督教徒をして公宣せらるる使命(説教にて聽く所の者)を益々明かに理會し且玩味することを得せしむ。

## 第二節

凡てのサクラメントが基をなす大本は基督教の信仰の骨髓に深く根柢す。是れ表面上の細節には非ず、表面上の細節のごときは之を措て顧みざるも或は可ならんとす。此大本たるや夫の太初より受造物と御ことばとの間に成たてる關係中に直ちに其根柢を有す、否や御ことば其物自身の性質に其根柢を有すとさへも謂つべし。神子に冠したる彼の尊稱は即ち是れ神の圓滿なる徳が客觀的なる形にて顯はれんとする勢ある者なることを暗示す。上に已に論じ明らかたる如く、御子が御父とともに存在したまへる事は則ち無始より以來これ天地開闢(萬物の創造せられんとする事)の預言たり保證たりき、而して又萬物は其神を去ること最も遠きとしも謂ふべき點にまで羅列せられたる時にも、尙其中に御ことばの磅礴して現前するあり、——此現前する御ことばは「段々の程度を経て漸々と萬物を再び其創造主の方に引よせたまふ、而して終には御ことば」自から其手を以て造りたる視るべく又捫るべき世界の中に——人間の躰質もて形づくりにたる躰を以て全然表出せられ、且十分に神の性質を啓示したまふ。古代の教會師父(祖師)たちの語を以て言へば、神子の受肉降誕もまた一種のサクラメントなりき。是は神の生命を有形の躰に繋ぎたる者にして、其之を繋げるや決して幻想または虚假または苟且の結合を以てせる者にあらず。御ことば「肉躰となれり。是の如くにして成就せられたる合躰は決して昇天によりて破れしに非ず、却つて推擴められ完たうせられし也。キリストは「諸天の上に昇れり」、是れ世界より及ぶ限り遠く離れんが爲にあらず、「萬の物に満たん」が爲めなりとす(以弗所書四章十節)、斯く雙方と活ける接觸をなすに因りて、基督は其昇りし天の極を其嘗て降りし「地の下」と合せしめたまへり(同書四の九)。其肉躰となりたまひし身位に今や唯に神性の充足れる徳の集中凝収するのみならず、又



受造物の充足れる徳も同じく集中凝收す。イエス、キリスト萬物の各部各分と活きて聯なり給ふ。

斯の如く我宗教はユダヤ人の宗教に凌駕すること實に千萬倍なり。彼等の宗教も、我等のと同じく、表號宗教なり。然れども彼等に於ては表號は只表號たりしのみ。彼等の割禮と我等のバプティスマとの間、彼等の犠牲と我等の聖餐との間には、幾分か相似たる所あらん。彼等にとりては、其規定せられたる行事の義理は或は學ばるべき教訓なりけんも、領會せらるべき賜物には非りし。例へば割禮は甚だ著るしき表號を以てユダヤ人に訓へて曰く、至聖なる神との契約に入らんに、苦を忍び血を流してすらも、吾人が墮落する心の惡念を除かざるべからずと、然れども人々をして其惡念を除くを得せしむべき手段をば一も授くる無し。又犠牲を獻ぐるの事は種々の感佩すべき細目を以て最後の大犠牲——罪を除きて人と神との親交を挽回するを得べき者——を指して示せり、然れども是等の犠牲其物は何の罪をも除くに至らざりき、而して其人は其供獻物を與かり食ふといへども神と實際交はるには終に至らざりき。然し乍ら是の如き制度に由て表號の原則は聖別せられ、更に高尚なる用に供せらるゝに堪ふる者とはなりぬ。キリストが榮を受け且其靈を灌ぎたまひてより以來、我等は幾多の徵號に接するが、其等の徵號は皆唯に靈なる奧秘を語るのみならず、又能く其語る所の者と與ふ。然らずんば、キリスト何を以てか外部の儀式を設けたまはんや。キリストの宗教は靈なる宗教なり、——恩恵の宗教にして、律法の宗教にあらず。さればキリスト若し其高尚にして靈なる教説の中に一二の表號たる行事——神の訓誨に順がふことを告白し、且神に服従するの義務ありてふ念を常に胸中に活かしおくは、心魂を富しむる者なりと言は

い率知らず、其他には毫も人心を富ますに至らざりつらんが如き一二の表號的なる行事——を其教會信徒に義務として負はせたまひしならば、是却つて退歩と謂ふべかりしならん、是たゞ猶太教を少しく取舍したる者に過ぎざりしならん。サクラメントに對する我等の見解にして果して斯の如き者ならんには、我等もまたキリストの靈に倣ひて外部の表號をば一片の誤解文字として放棄して可ならん。クニエーカル宗徒の見ど一統教會派の見との中間にはキリストをして自家矛盾に陥るを免かれしむべき者絶て無し。サクラメントにして若しツウヰングリ (Zwingli) の言へるとき者ならば、是れ基督教のサクラメントとなすに足らず。「大綱」中に「唯基督の信徒が其教を奉ずる記號のみ」と稱するが如きサクラメントはキリストが得て設立したまはざりし所なり。サクラメント若し果してキリストの立てたまひし者ならば、是れ「確實なる印證にして、我等に對する神の愛心深きと恩恵の厚きとを示すの明徴」と謂はざるべからず、「此サクラメントを以て神は冥々の裏に吾等の心を感化し、唯に我等をして神を信ずるの信仰を起さしむるのみならず、更に又由て此を強め且堅うしたまふ」(聖公會大綱第二十五條を參觀せよ)。

最後に引たる「大綱」の語は亦サクラメントの一義が慈悲に在ること——即ち其が善く薄信家の需に應ずる者なる事——を明らかにす。豪傑の士はサクラメントを待たずして聖域に達すとも、尋常の基督教徒は福徳の餘りに廣く天下に散漫せる無きが爲に却つて之を獲るに便なるを思ひて恐らくはサクラメントの存在するを感謝するならん。天下到る處にて獲らるべき賜物は人おほくは之を何處にも獲ざらんぞ。されば吾人が最も要する靈の賜物は何處に何時如何にして各々確かに發見し得べきかを示さるゝは、慈悲に非ずして何ぞや。是の如き道理あるが故に、我等はキリス



トがサクラメントに附せし約束(恩恵の約束)を宛がら其獲否が一に禮拜者の信仰如何に由て決する者のごとくに解釋し去るべからず。固より實際靈軀内に吸入する恩恵の量は受領者の信仰の厚薄に比例す。——悪心の者は施恩の要具たるサクラメントを用ひても利なくして却つて害ある耳、——信仰の強くして活潑なる人はサクラメントのために益を得ること信仰の弱くして微温なる人に倍蓰す、是れ萬人の均しく認むる所なりとす。然れども受けたる恩恵は必ずしも與へんとせられたる恩恵と同じき者にあらず。其處に在らざる賜物を造り出し又は喚び起すことは禮拜者の業に非ず。禮拜者は只其處に在る所の賜物を受けて之を最も善く活用すべき耳。我等は信ずキリストの仁慈なる必ずや其與へんと約したる所の者を悉く我等に垂れんと待かまへたまふならん、決して我等が之を受けんとて懐き往く信仰の多寡を明かにするまで抑へ置きたまはじと。薄信の人々にとりては、唯に恩恵を其處に在る時に受くる力あるのみならず、又或る意味に於ては之を其處へ招くことを得ると思ふよりも何物か更に大膽なる者あらんや。

然し乍ら之を要するにサクラメントは亦た是れ單に薄志弱行なる人々の需に枉げて應ぜざる者に非ず。神子の受肉降誕もまた然か見なすべき者なりと言はれ去來知らずと雖も、是の如きは我等が懐く能はざる所の觀念なるを奈何せんや。基督が肉軀にて來ませしは單に是れ尋常一般の人々をして基督が彼等の爲に行なひたまへる所を信ずるに容易ならしむるが爲なる者にあらず。彼は天と地を合躰せしめんため、又己が取りたる性質(人性)を高めんために來りたまへり。是と同一の目的を遂行せんために彼はまた其若干のサクラメント或は聖禮典を設立したまへり。其サクラメントを以てキリストは有形なる受造物の眞品格を明らかにし、更に幾層これに尊榮を蒙らしめ

たまふ。彼は唯に有形なる者が虚靈なる者の基址となさるゝを得べく又所乗となさるゝを得べき者なるを教ふるのみにあらず、又實際これをして斯る者と成らしめたまへり。神子降誕(インカーネーション)の光に照して見れば、サクラメントの功用は同一の歩趨を以て内界に起る靈なる變化を外界に標出する所以の道なりと言ふは、未だ以てサクラメントてふ觀念を満足せしむるに足らず。然か思ふは是れサクラメントに當つるにイエスの身位につきてキリストが吐きたる所の原則を以てする者ならん。さりとて又我等は之が反對の方向に走りてユナクス宗に類する邪見に陥り以て外界と内界とを混同すべきに非ず。サクラメントは之が對して以てサクラメントたる所の者と決して同一なるに非ず、但内なる者と外なる者と親密に相合躰したるにこそあれ。我等は靈なる恩恵が之れの表號たる行事または元素上に實際形を成して標出せらるゝを見る。前者は即ち茲に宿れり。基督は唯に規定の禮式を忠實に執行する事に副へて契約の恩恵を賜ふのみならず、又其禮式をして全く文字どほりに施恩の要具たらしめ、而して其教會にて用ひ或は爲す所の事に蒙むらしむるに己れの圓滿を以てしたまふ。内なる者と外なる者との活ける合躰を斯の如く高尚に感ずるに於いてや、聖パウロは例へばテモテにむかひて左のごとく言ふを猶豫せざりき、曰く——「我が按手に由て爾が受けし神の賜物を再び熾んにせよ」(提摩太後書一章六節)。斯の如くサクラメントは萬有神教に於て吐露し且曲解する所の希望を満足せしむるの端なり。神と世界とは同一なる者に非ず、又いつまでも同一なるに至らじ、されど神は其御「ことば」の受肉降誕に由て萬物を己れに引よせつゝゐたまふ、今にてすらも「神の榮光は天地に充つ」。神の創造したまへる物の各部各分はいづれも神の思想の一片を具して顯はれたる者なれば、凡て之に臨む基



督教徒は聖地靈場にあるの感をいだけずんばあるべからず。語に曰く天地萬物は皆サクラメントたる者なりと。水とパンとの如き代表物質を聖別して天下の最大事件のために用ひ、由て以て基督は此の思想を強く言あらはし、且之に適切なる意味を與へたまへり。之に由て彼は自然界の諸物體を悉く聖成すること恰も若干の聖日を選定して之に由て三百六十日を悉く聖成したまふが如し。古代に在てサクラメントを論じたる人々の中に巨擘たる聖イレニウス(S. Irenaeus)は聖ヨハテの直弟子たりし人々の口より相傳の說を學び得たる者なるが、此種の思想を特別にも重んじて主張したり、此思想たるや神智宗徒が物質を輕んずるの事ありしに因て殊に彼にとりては意味深長なる者と見えき。彼より之を觀れば、聖餐の獻げ物は神の受造物中より初果をとりて獻ぐる者なりき「雅各書一章十八節を見よ」、而して此事たるや固より其が基督の體を獻ぐるの事たるを離れて然るに非ず、却つて其が基督の體を獻ぐるの事たるが爲に然る者とす。御「ことば」が自然界に働きて萬物を恩恵の用に供せしめつゝありたることをイレニウスは再三再四論じたり。乃ち説て曰く、「吾人は基督の體にして且受造物 (creature) を以て養はるゝ者なり、而して又彼は受造物を吾人のために供し、聖意のまにまに日を照らし雨を降らしたまふ、是故に彼は受造物が供する杯(酒)を我が血なりと説きたまひ、之を以て我等の血に注入し、——受造物が供する麵包を我が體なりと宣まひ、之を以て我等の體を大きくす」と。是れ物質の聖なることを辨證せる者。——夫の單に靈ならざる者には何の價值あるをも見ざる虛妄の唯靈說を駁倒せる者なり。是の如く聖イレニウスがサクラメントの教を體の復活と連れ、又御「ことば」の受肉降誕と連れ、御「ことば」に由て世界の創造せられ開發したる事と連れたるは其當を得たる者と謂ふべし。

**第四節** サクラメントといふ稱呼の下に幾何の聖禮典を含ましむるやは大事ならず。古代の師父中には該稱呼は漠然と用ひられたり。其稀に之が數をいへるあれば、或人は二と言ひ、或人は三と言ひ、或人は四と言へり。歲月の進むにまたがひて七の成數つひに一般に認めらるゝに至りぬ。是れ全く定義の如何に依るのみ、而るに此語は聖書より取りたる者にあらずして、聖書の中には固より之が精密の意義を載せざれば、教會に於ては自由に之が定義を下だすことを得る也。然し乍ら是れ教會に年久しく行なはれ來りし語なれば、今にして之に新しき意味を附するは遺憾の至りなり、故に例へば結婚はサクラメントなるや否といふが如き問題のために教會は決して分裂すべからず。大英教會の大綱を按ずるに、其中には夫の「俗にサクラメントと稱して」實は「パテスマと主の晚餐なるサクラメントと同日の論に非ざる」五種のサクラメントと簡別して、特に「福音のサクラメント」二件を擧たるあれば、衆サクラメントの間に内部の區別をたてんと欲したる者なるや明らかなり。且又我が問答に於ても唯キリストが其教會に立てたまひしサクラメントのみを論ずと稱す、但し其他にもサクラメントあるを否まらず、謂へらく其他のサクラメントは一般に拯救に必要な者にあらず、——即ち萬人に均しく必要なる者にあらず、——或は或る人々の解釋することく、其類に従がひて必要なる者、——其施し得べき處にて必要なる者のみと。此等二種のサクラメント(パテスマと聖晚餐)は一般に必要な者なり、如何となれば是に由るに非れば教會に入る能はず、又教會の員に列する能はざれば也、而して又教會の外には何處にも印證せられたる拯救あること無し。自餘のサクラメントは是等に補助たる者なれば、其是等と少



しく異なる平面に位りせしめられたるは當然なる者とす。例へば懺罪禮(Penance)はパプテスマに於て一たび已に與へられたる賜物を連続して活用するの事に外ならず。堅信禮は實際パプテスマと同一のサクラメントにして、パプテスマが始めたる所を完うするを主とする。聖品は堅信禮に於て賜はれる恩恵の特別に開發したる者、病者の抹油禮もまた多分然る者ならん。結婚禮は教會の懷において特別の榮譽と恩恵を受けたれども是れ固より基督教に限れる禮式には非ず。是の如くパプテスマ(堅信禮を以て完たうせられたるが如きパプテスマ)と聖餐を以て自餘のサクラメントに對比するに、其間には重大の逕庭ありて存するや明らかなり。我等かくのごとく此の二大サクラメントの貴きことを主張するとも、他のサクラメントを賤しとするが故には非ず。實に前者と後者の間には天地の懸隔ありて存す、後者は徳を立つるを目的とせる者にして教會に夥だしと雖も、教會は之に附するに恩恵といふの觀念を以てせざる也。例へば指環を印證として結婚式を行ふことは年久しく教會の慣例なりしかども、若し結婚の恩恵が其指環によりて傳はると想はば、教會は之を凡俗の迷信として排斥せん。神妙の表號は一切のサクラメントに附着す、而してサクラメント其物やがて是れ神の立てたまひし表號なりとす。然れども施恩の要具たる此等の行事と單に人心を感ぜしむるの譬喩たる行事とは決して相混同する者にあらず。

**第五節** 我等の主イエス基督と合夥することは拯救に極めて必要なる最第一事なりとす。此點に於て今日世俗間に教ふる所の者は聖書の基督教を去ること最も遠き多し。現今の此の福音に依れば、基督と合夥することは靈魂が其發達の新行徑に上るの發程點には非ずして、靈魂が基督

教徒たるの好進歩をなしたる報賞なりと云ふ。思へらく我等キリストを信するに因て義とせられ、我等の信する所に循がひて暫らく生活したらん時には、茲に始めてキリストと親密なる合夥をなすに至るなりと。是れ真正の順序を顛倒したる者のみ。福音の本色たる福祥は——稱義にもせよ、聖成にもせよ、神妙の知識にもせよ、永遠の生命にもせよ、其他何にまれ、凡て——「基督に在る」者の外には誰れも與へらるゝの約束なし。勿論我等がキリストに合夥する前に幾分の悔悟及び信仰は與へられん、尙ほ基督の外に在る間に早くも心の感化を賜はるを得ん。然れども是等の賜物は福音の特賜物に非ず。此等の物は律法(舊約の)の下にありても亦賜はるを得たり。此等の物はパプテスマのヨハナの事業中に於ける特色なりき。基督の義を與かり享くる者とならんには、基督の功を受くる者とならんには、我等は單に遠くに立ちて信するのみにては未だ足れりとせず。銅蛇の預表は、其意味深長なりと雖も、畢竟これ十分の預表には非ず。是れ左に掲ぐるが如き聖書中に徧ねき富麗の文字を以て補はずんばあるべからず。——曰く「神罪を誦らざる者我儕の代りに罪人となせり、是れ我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲なり」(哥林多後書五章二十一)。「基督の贖に頼りて神の恩を受け功なくして義とせらるゝ也」(羅馬書三章二十四)。「彼にありて我等その血により贖すなはち罪の赦を得るなり」(以弗所書一章七)。「基督によりて義とせられん事をこひねがひ」云々(加拉太書二章十七)。我等は此等の物を先づ受けて、然る後に基督と一つに成るに非ず、先づ彼に在て始めて此等の物を得るなり。我等はキリスト自身の生命を分享すべき者と已に爲されしと會得し始めし時に始めて此等の特權を味はふ者とす。



我等の方に信あるに非れば、我等が基督との合夥は有名無實なりと雖も、我等の信仰その合夥を形づくるには非ず。此の合夥を相互の合夥たらしむる爲め、合夥をして其目的とする諸の佳物に富贖ならしむる爲めに、信仰は必要なり、然れども信仰は、其れ自身にては、我等を彼の合夥に入らしむるに足らじ。是れ基督自身の業なり、我等の功には非ず。

基督に入ることばペントスマの大なる賜物なり。ペントスマは由て以て我等が顯露に正教會に入るの行事なりとは、基督教徒が皆其説を一にする所なり。但し正教會もし我等が既に論ぜし如く單に形似の辭たるのみにあらずして眞にキリストの體ならば、教會に入ることば必ず是れ基督に在て肢員たるの福を荷ふ者とす。而して實に是また聖書の中に常に教ふる所に係る。聖パウロは「ペントスマを受けて基督に入る」といふことを二回まで説けり（羅馬書六章三、加拉太書三章二七）。此辭は之をペントスマを受けて基督の宗教または基督の契約に入りたりといふと同義なるものごとくに見做して解き去るべきに非ず。彼も一回は「ペントスマを受けてモーセに入れり」云々と説きたるに相違なければ（哥林多前書十章二節）、或ひは斯の如き解説を是とするの觀なきにしもあらず。然れども該使徒は彼處にて特に新舊二約を比較しつゝありたるなれば、之が爲に其の實は只基督についての「言ふべき所の事を此に斯くはモーセに移し用ひたる也」「基督の肢」といふが如き、「基督に在て」といふが如き、「首すなはちキリストに由りて聯なり」といふが如き、「キリスト我に在て活く」といふが如き、皆これ聖パウロが他處においてキリストにつきて説き及ぶ所の者なれども、未だ一回もモーセにつきて之を用ひたる者あるを見ず。聖靈に感じたるパウロの心より觀れば、キリストとの合夥といふ事は一の譬喩たるよりは千萬倍も意味深き者なりけり。

んこと明かなり。パウロの心に於ては是れ決して單にキリストの主義と一致するの事若くは基督の身位と同情的交通をたもつる事を謂へるのみには非ず。是れ實に文字の如くキリストの御身を興かり分つと謂ふ者とす。基督教徒は基督に合併したる也。キリストの生命彼（基督教徒）に溢れ、彼を籠め、彼を蓋へり。此事の然るを始めたる期ありき、是すなはちペントスマ「を受くる」の時なりき。此時までには信者は尙外より感化せられつゝありしが、該のサクラメントに由て今は其教主に對して新しき關係を生じたること恰も葡萄の幹に接れたる葡萄の枝のごとし、最早外にあるに非ず、内に在る也。

### 第七節

斯の如く基督と合夥したるより直接の結果として二大慶福の吾人が靈魂に流注し來るあり。此等二者の中、最も偏く認められたる者は罪の赦宥なりとす。尼契亞信經に於ては、聖書の辭もて、公然と之をペントスマと相連ねたり。使徒信經にては一統聖公會に員に列するの第一結果として罪の赦宥を掲げたれば、是亦隱に之「罪の赦宥」をペントスマと連ねたる也。此事は該サクラメント（聖洗）の表號中に含まれて見ゆ。垢を洗ふ元素「水」を外部に當るとを以て之に伴なふ内部の道徳的洗淨を表す。我等の主は「水と靈によりて生れされば」云々とニコデモに告げし時に、恐らくは此理を胸中に觀じたまひしならん（聖約翰福音書三章五）。「水」といふ語を用ひたれば之を聞ける人は必ずヨハネが神の國に入る爲に人々を淨めつゝありし懺罪の禮式を憶ひ出したるならん。同時に又此「水」といふ語は、——特別にも其が「靈」と對比せられたる時には、——唯に外界の元素を思ふの念を興さしめしのみならず、又凡て外部の元素が暗示し得たる者を考ふるの



心をも起さしめたるならん。且又「水によりて生る」との辭を以て我等の主は夫の「靈に由て生る」との辭を以て表せる聖靈の予命作用「生命を與ふる働」と簡別して特に聖靈の洗淨作用「罪を洗ひ淨むる働」を指したまひし者と見ゆ。水を用ひて表する所の事は基督教のバプテスマに於ても、ヨハチのバプテスマに於ても俱に其意味を同じうす。雙方に於て兩ながら是れ罪人が罪を告白し良心の潔淨を要むる者なり（恐らくは亦是れ彼得前書三章二十一節の意味ならん）。但しヨハチのバプテスマと我がバプテスマとの一大差別は左に存す、——ヨハチに就ける悔罪者はヨハチが指しせる主の來るまで其内部の洗淨を待たざるを得ざりしが、我等は之に反して、外部の洗淨に由て直ちに内部の洗淨を蒙むる也。ヨハチはバプテスマを施せると同時に其行を以て己れが禮式の不十分なることを告白したり。然れどもキリストの贖罪事業の完たうせられ、而して聖靈の臨むや否や、此の意味深長なる禮式に大功力こそ忽ちにして加へられたれ、而して聖ペテロは服罪したる良心「人々」にむかひて斷乎と確言するを得たり、曰く、「爾曹の悔改めて罪の赦を得んが爲にイエス、基督の名によりてバプテスマを受けよ」と（使徒行傳二章三十八節）。服罪、悔恨、感化等は其れ自身にては罪の重負と汚點とを除くに足らず、之を除く者は此等が遂に導き「進み」至る所のバプテスマなり。斯く我が主が感化せられたるサウロに其すべて爲すべく定められたる事どもを示さしめんとて遣はしたまへる人はサウロを尙も洗ひ淨められざる者のごとくに遇らひて、之に洗淨を得べき道を示せり、曰く「今なんぞ如何で緩らふべけんや、起ちて主の名を顧びてバプテスマを受けて其罪をすゝぎ去るべし」と（使徒行傳廿二章十六節）。罪は原罪も犯罪も俱にバプテスマにて洗ひ去らる。正しく洗淨を蒙りたる靈魂（人）はもはや神

の聖目に厭惡すべき者と見ゆる無く、もはや神の逆鱗にふるゝ無し、如何となれば神に怒り憎まらるべき罪愆はことごとくキリストとの合躰に由て亡びたれば也。且又其洗淨は唯既往にかゝはる者とのみ思ふべからず。此誤れる思想に加ふるに受洗後の犯罪は更に幾層憎むべき者なりとの正しき念慮を以てして、古代に於ては本サウロメントを老年にまで、或は死床（臨終）にまで、延ばすこと屢なりき。斯る行爲はバプテスマの賜物の第二にして且更に大いなる者——我等が由て以て聖潔なる生活をなすことを得、又平安なる死に就くことを得る賜物——を唯に無視するのみに非ず、是また、キリストと合躰する事の永遠なる性質を無視す、此の永遠なる合躰を我が祈禱文には「神の聖洗滌の永遠無窮なる恩澤」と稱す。限ある時間（光陰）の上（上）にあり且外にある所の潮流來りて我等を捉ふ。單に我等の相續で起滅する行爲のみならず、我等の極衷心までも一新せらる。バプテスマを受けたる人は單に彼の點まで（即ち受洗の時まで）の罪を赦さるゝに非ず、全く是れキリストに於ける赦罪の域にまで移し植ゑられたる也。爾後其人もし恣まゝに自ら出で去るに非れば、其中に在て常に生活し動止すべし。受洗者とても固より再び罪を犯さぬ者と印證せられしに非ず、且受洗後の犯罪は其人がキリストに於ける度生の經驗を積めることの深きに隨がひて益々重きを加ふ。併し乍ら一罪一愆ことごとく其の人をキリストの合躰より斷つには非ず。彼が罪は或は其合躰を弱めんと雖も、尙懺罪と信仰とに由て彼は其全く失墜するを免かれん。神はバプテスマを施すの事を幾度も繰かへす無しにバプテスマの洗淨を常に新たに成しおくべき方法を其の教會に與へたまへり。實にバプテスマの再施といふ思想のごとく教會にて思む所の事件は稀なり。此の意味に於てすらも、「罪の赦免を得さすべきバプテスマは唯一つのみ」（尼奧亞信經參



觀)。我等は其携へ入れられたる聖域を出入して。或は前進し或は後退するを得ず。或はキリストに在るなり、或はキリストに在らざる也、必ず其一に在る者なり。若し一たびペテラスマを受けて後キリストに在らば、然るときには何物も其人をキリストに還らしむる能はず。若しキリストに在らば、然る時には、縦や其身の罪のために罰せらるべきも、尙少なくとも赦免を得らるべき領域内に在るなり。我等もし手を伸べて取るならば、是なほ依然として我等の有たるなり。

## 第七節

罪人にとりて最第一の必要物は赦免なり、其他の賜物は若し之を罪に定められたる人に與ふるならば、是れ其人を戲弄する者とも謂つべし、然し乍らペテラスマを受けてキリストと合夥するの事は罪の赦宥よりは非常に大いなる惠福を帯び來たる者なり。有罪の人は其罪を恩赦せられても尙毫も其元の境界より高めらるゝ無きあらん、尙依然として其元の地位にとまる無しと謂ふべからず。然るに此事たるや我等の境界には非ず。我等にとりてはペテラスマは唯に罪の洗たるのみに非ず、又「重生の洗」たる也（提多書三章五節）。此等二者の關係は甚だ親密なり、偶然に伴侶たるにあらざり。我が祈禱文中の簡潔にして含蓄多き句に曰く、「我等は靈なる更生によりて罪の赦免を蒙むる」と。然らば此順序は或は顛倒され得たるが如くにも見えたらん、而して人は罪を赦されつゝ、其既往の行爲のために枉げらるゝ無しに、全く新人として將來の途に安然と出發するに因りて、斯くは更生したりとも言はるべけん。然れども是は未だ足れりとせず。キリストの合夥は其人に傳ふるに高尚なる新生活を以てする者なるが故に、赦罪「罪の赦免」をば一種の分離すべからざる必隨の結果として持ち來たす者とす。我等は墮落したるが故に、罪の赦

免を要す、然れども更生（重生）に由て却つて我等は墮落以前の無爲（無辜）なる地位よりも幾層高き地位に達す。我等がペテラスマに由て賜はるが如き榮光はバプタイスに居れるアダムも有せざりき。神子の受内降臨が我等のために爲したる所は豈た我等の罪を除くの事に止まらんや、之よりも遙かに多くの功績の在るあり。是は我等をして「神なる性質を有しめ」たり（彼得後書一章四節）。聖アサナシウスの曰く、「神子が人となれるは我等をして神とせられしめんが爲めなり」と。我等が神とせらるゝはペテラスマに於てす、是れ該禮典に由て我等はキリストの神聖なる人性に合併するが故なり。

我等がペテラスマに由て神の子とせられたりと云ふ時には必ず此の意味あるものとす。マウリス（Fred. Denison Maurice）の如き敬虔なる思想家は斯る言語を用ふるの困難なるを感ぜり、是れ斯く言ふときはペテラスマ以前には我等神の子ならざりし如く見ゆれば也。然りと雖も、其實は決して然る者にあらざり。一の意味にては、天下の萬人は人たるに由て即ち皆神の子たる也、而して其子たる特權は其の罪の結果として當然に褫はれたれども、尙神と天然の親縁をたもちて失なはず。然し乍らペテラスマに於て我等は降世の神子と合夥して其肢となるが故に、全く新たに子たる者となる也、之に比ぶれば未だペテラスマを受けざる人々は神の子にあらずと謂ふも失當にあらず。是故に我等は「子とせられ」 adopted たりと稱す（以弗所書一章五）。——是れ褫はれたる特權の回復されたるを謂ふにあらず、全く是れ子たるの特權——天地間未曾有の大特權——を享受するを許さるゝを謂ふ。我等が子とせらるゝ事は單に我等をして天父に自由に敢て近づくの特權を得せしむるのみに非ず、又是れ我等をしてキリストと偕に神の子たることを得せしむる



也。基督は自然にして然り、我等は彼に在て恩恵に由て然る者とせらる。彼が「多くの兄弟の中に嫡子」たる者となりたまふは（羅馬書八章二十九）、彼が我等の性質をどれるに由るに非ず、我等が彼れの性質を遂に受くるに由る者なり。

更生（重生 Regeneration）とは道徳上の向背または品質に變化の起るを謂ふと思ふ人々は聖書の更生説を未だ決して十分に會得したる者とは謂ふべからず。聖ヨハネが其第二章二十九節に「公義を行なふ者は皆主の生むところなり」と言へる者は、前後の關係を按ずるに、是れ單に道徳上の矯正を更生と同一視したる者に非るや明らかなり。彼は教會の内に一種の甄別法を適用したる也、基督教徒と他者（即ち教内の人と教外の人）とに差別なく適用したるに非ず。義、愛等の美徳が基督教徒中にあるを見ては、彼は之を更生の成就したる明瞭と爲したるならん、然れども是等の美徳は更生を形づくる者にあらず、ニコデモが人幼稚に還るに非ずんば争でか異に對するを得んやと言ひし時には、更生と感化とは同じとの觀念彼れの胸中にありしや疑なし。然れども其神師は彼が思ひたるよりは深き意味を以て之を説きたまへる也。ニコデモの意味に於て人は幾度「生れ更る」とも、其の性質は全然一變すること或は無からん、——其性質は或は淨められ且高められたらんも、尙依然として「肉」なるあらん。我等の主は全然たる新天地——自然の步履を以てしては到底達する能はざる新乾坤——を開かんために來ませり。肉に由て生る、者は肉なり、靈に由て生る、者は靈なり（聖約翰福音書三章六）。肉も光彩燦爛たる貴き品質を呈するあらん、其達したる聖潔の態は基督教に於ても殆んど勝る能はざる者あらん。ペテラスのヨハネの如きに於ては即ち然り、我等の主は彼を以て當時に存在せる人間の最も殊勝なる者となし給へり。然れ

ども我等の主は曰たはま、ヨハネも畢竟自然の人道に屬する者（凡夫）、すなはち「婦より生れたる者」のみと（馬太福音書十一章十一節）。新天地に於ける者は其最も小さき者にては彼よりは大きいなり（彼に勝るとは言はず）、彼よりは高等の域に位する、如何となれば、人性の最も高き者を具有するのみにあらずして、又神性をも分享するを以て也。

故にペテラスはキリストの受肉降誕が由て以て此人より彼の人と順次に隔ねく廣まる所以の具なり。凡てペテラスを受けたる人にはキリストに於ける兩性の合體にも比すべき者ありて存す。キリストは實に神なる御身にして人性の全軀を我等人類より受けたまひ、我等は人なる身にして、基督の人性を経て神性の一部分を受けたり。彼は其神たるに由りて罪を犯すとを得ず。我等は元と人なるに由て尙罪を犯すを免かれず。但し此等及び其他の深遠なる差別あるにも拘はらず、我等も彼のごとく複合物なり。我等は二つの性質を（雙方俱に十分には非ざれども）一つの身位の下に有す、而して彼は悉くも降誕して「人」となりたまひし如く、我等はまたペテラスを受けて彼に入りて（——彼が舊約の下に於て「神の言を受けし者」につきて宣まひし如く——）「神」となる也（聖約翰福音書十章三十五）。併し乍ら之を辨別せんには信仰の目なくんばあるべからず。我等その更生に負かすして忠實に行なふ時には、其好結果は不信仰の目にも認めらるべし、然れども不信仰の目は其原因を看破する能はず。風は己がまゝに吹く、汝その聲を聞ども何處より來り何處へ往くを知らず、凡て靈に由て生る、者も此の如し（聖約翰福音書三章八節）。イエスの地上生活に於ては此の如くなりき、我等の生活に於ても皆此の如し。視よ、我等稱へられて神の子たることを得、これ父の我等に賜ふ如何ばかりの愛ぞ、世は父を識らず、是に由て我等をも識ざる也」



第八節 何れの齡もバプテスマを受くるに適せざるは無し。バプテスマを洗淨の禮と見做すときは、我等は之を小兒の爲に無用なる者とは思ふ能はず、如何となれば人心は初よりして罪の萌芽を(如何に未だ開發せざるにもせよ)含めば也。且又小兒は恩恵を受くるに堪へずと我等は思ふを得ず、果して受くるに堪へざる者ならば、我等の主は其許に携へられたる小兒を祝福はしたまはざりしならん。小兒は或る他種の恩恵を受くれども、更生の恩恵を受ずとは思ふに難し。生命は其本來の性質の然らしむる所として全然たる賜物として來る也、之を受くる人の選擇に任する者には非ず。成長したる人は固よりバプテスマを與へられんことを請ひ、而して新しき生命を賜はるを得ん、然し乍ら若し其生命にして外より押つけられしならば、如何に之を拒み得しかは知るに難し。其人もし欲せば、速かに之を其靈魂中より滅ぼし去ることを得ん、然し乍ら縱し暫くにもせよ、其人は之を有てり。小兒の心の中立なるや新生命の入るにむかひて決して障礙を構へざるや確かなり。年の長ざるに及びても亦サクラメントの賜物は都て吾人が理會力の究り盡す能はざる者なることは一般の通則と稱して可なり。而して基督は嘗て其一につきて宜まひし所を此等のすべてに付ても亦言ふを得たまふ、曰く——「我が爲すことを爾いま知らず、後これを知るべし」(聖約翰福音書十三章七)。斯る場合に於ては速かに之を受くるを以て愈れりとす。基督は「嬰兒や乳哺子の口」より出たる讚美を讚美の完全なる者と見なし(聖馬太二十一章十六節)、而して之に反する説を憤然として排せけつ、却つて小兒は恩恵の國に入るに最も適したる者なりと公言

したまへり(馬可福音書十章十四)。聖イレニウスは指點して曰く、イエスの聖潔なる幼時を稱ふれば、イエスが人間の生活を唯に其成長せる、其愛多き、其自覺の念つよき齡に於て領會せんと欲したまひしのみならず、始より終まで十分に之を領會せんと欲したまひしとを明らかにすべしと。即ち之を論じて曰く、「基督は幼より長に至るまで一々の齡を悉く經過して之を聖成したまへり。基督は己れに由て萬人を救はんために來れり、萬人とは即ち基督に由て再び生れ「生れ更り」て神に歸順せる者、嬰兒、幼童、少年、青年、壯丁、老人等を稱す。因てキリストは一々の年齢を經、嬰兒のためには嬰兒となりて嬰兒を聖成し、幼童のためには幼童となりて幼童を聖成し、同時に亦彼等のために愛情と善行と孝順の模範となりたまへり、斯の如く少青年のためには少青年となりて、之が儀表を垂れ、且之を主に聖成したまへり、壯者に於ても亦然りとす」と。讀來りて興味津々たるを覺ゆ。

「大に聖物を與ふる勿れ」といふ(馬太七の六)我が主の警戒を服膺して、基督教會にては通例保證人なき者にはバプテスマを授くることを拒めり。保證人(スポンソル)は教會にむかひて其志願人が相當の資格あり、且其授けられんとする恩恵を妄用せざらん由を保證し、且其能くし得る限りは之を扶けて其誓約を全たうせしめんことを約するを其任とす。

第九節 此のサクラメントを施すべき當該役者は會長なり、然れども會長不在なるときは會吏これを施すことを許さる。實にキリストと合體するの境に入ることは、其次に隨ひ來る何等の賜物よりも關係の極めて重大なる者なるが故に、古來非常の時に際しては俗信徒すらも、



否な婦人さへも、バプタスマを人に施すことを正當視せられたり。然のみならず、本サクラムメントは之を施したる人が異端を唱ふる者なるにもせよ、教會内に分裂を起せる者なるにもせよ、有効なる者と信ぜらる。何人にもあれ水と式文とを以てバプタスマを施す限りは、是れバプタスマを授けて己れの宗派に入るゝにあらざ、一統教會に入るゝ者なり。若しバプタスマを以て人を己れの宗派に入れんと欲せば、禮典執行の際に其宗派の名を唱へずんばあるべからず、——然るに若し己が宗派の名を唱へたらば、其バプタスマは基督教のバプタスマたらざる者とならん。正しき言語(聖洗式文)及び正しき元素(水)が用ひられしや否やと云ふにつきて真正の疑團あるに非れば、他處にてバプタスマを受たる人を教會に受ふるゝに當りて再び之にバプタスマを授くべからず。古昔にありてはバプタスマ上の不合法は何にまれ接手を以て補はるゝ者と思へり。身軀の幾何が聖水を受けたるか「水を濯がれしか水に浸められしか」はバプタスマの効力上に毫も輕重をなす者にあらず。水に浸「沈」むることはバプタスマの正常なる而して又最も訓誨となる法式なり。英國教會にては水を濯ぎてするバプタスマを許せども、水を灑かけてするバプタスマを許さず。

第十節

堅信禮は別に一箇のサクラムメントをなす者とは思ふ能はず、宜くバプタスマなる一サクラムメントの第二の部分と見做すべし。是たゞ聖餐の杯が聖餐のパンと別なる一サクラムメントと言はれ得べきと同意味にて別箇のサクラムメントと稱し得る耳。キリスト左の語を以て之を設立したまへり、曰く「萬國の民にバプタスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」(聖馬太福音二十八章十九)。バプタスマを受けたる者堅信禮を受けずして止む時には、バプ

タスマの恩恵は未だ全く與へらるゝに至らず。聖ペテロが夫のバプタスマを受けて罪の赦宥に入りたる人々にむかひて「爾曹も聖靈の賜を受くべし」と告げたるも、亦此意味に外ならず(使徒行傳二章二十八節)。「聖ペテロエペソの或る人々が聖靈の賜に暗きを訝かりて言へらく「然ば爾曹はバプタスマを受けて何に入れられしや」と、是また此義を演べたる者のみ(使徒行傳十九章三節)。此等二事の關係親密なるが故に、聖書中に於ても古代の父師たちの著書中に於ても、俱に堅信の特色たる賜を屢々バプタスマに歸したるあり。勿論此賜物がバプタスマの水其物に由て傳へらるゝとは思はれしに非ず、實はバプタスマといふ名の中に接手の義をも含みたる也、——恰もパンを劈くの事が亦杯を干かり享くるの事をも含めるが如し。本サクラムメントの此等兩部分を離すことの必要起りし時には、此等の區分は十分判然と明に認められき、即ち使徒行傳第八章十五——十七節に特記せられたるが如し、曰く「ペテロとヨハネ來りて彼等が聖靈を受けん爲に祈れり、蓋かれら唯主イエスの名に入られ、バプタスマを受けしのみにて、未だ其一人にも聖靈くだらざりしに因る。此時二人の者手を彼等の上に受けければ彼等聖靈を受たり」。此の文句は聖靈の賜がバプタスマの水とは聯ならずして接手と聯なれる者なることを明らかに示すと同時に又「唯」といふ文字を以てバプタスマが此の賜物なくしては未だ全たからざる者なる事を均しく明らかにす。基督が其教會にて爲したまふ所の事は都て聖靈に由て行はるゝ者にして、我等が由て以て新受造物(新たに造られたる者)とせらるゝ所の業もまた之が例外なる者にあらず。然しなばら靈に由て生るとは靈を受くと同事には非ず。バプタスマが堅信に關係することは猶我等の主が復活の夜に於て其弟子たちに息を嘘きたまひし事がペンテコスタの聖靈灌注に於けるが如し。教會に於て



若し聖靈が堅信禮を待つなくして與へらるゝことを荷くも説くならば、必ずや特に其賜物の範圍を明言す、曰く——「御聖靈を此の兒に予へて生れ更らしめたまへ」。該の制限なくして此の賜物を乞ふは正しからざらん。嚴正なる神學に於ては、聖書の言語に循がひて、例へば聖靈を手ふる、受くる、有つ、聖靈が人に降る、宿る、人をして其殿堂たらしむ、人の心に溢る、人を印證す、人に膏をいぐといふが如き辭句を堅信禮と連接せしむ、單にパフテスマ稱りとは連接せしめず。彼等は「基督の體」に我等を引接する該第一行事（パフテスマ）に由て活かされて新しき、永遠なる、神妙なる生命に入るなり。新しき能力の萌芽を茲に我等は與へらるゝ之を「來世の權能」と稱す（希百來書六章五）。我等は直ちに聖靈の感動を蒙むることを始む、是の如きは未領洗者の決して經驗すとは言ふ能はざる所なり。但しキリストの靈は直ちに我等を占むるに非ず、直ちに我等の衷に貫ぬきて充ち渉るには非ず。基督御自身に於ても——其誕生は幾分か我等の更生に類する者にして——聖靈の十分なる灌注をば出生後多年を経るまでは受けたまはざりき。

聖書に暗き基督教徒は屢々信ずらく、最初按手によりて賜はりし聖靈の賜物は、種々の方言（國語）を語りて衆を教へ若くは奇蹟を行ひ異能を顯はすに在り、如何となれば該の賜物を受けたる者は其第一の結果として時に或は斯る非凡の事をなしたりと聖書に記されたれば也。或は又斯くも尊重せらるゝ賜物は斯の如き淺近なる性質の者たる能はずと認むるや、人々あるへらく聖靈を受くるには必ず先づ聖潔なる者とならざるべからずと。然し乍ら斯の如きは該賜物を其結果と混同する者のみ。最初には該賜物の眞實不虛なることを其受領者と他の人衆とに確知せしめんとために異常奇特なる結果之が受領に伴なひて起りぬ。此等の結果は今もはや生ぜず、是は我等今

は之なくして信ずるを得れば也。奇蹟を行なひ方言を語るの力今は無くとも、我等は之がために聖靈の現前するを毫も疑がはず。不良の生活すらも聖靈の其處に在らざるを證する者にあらず。聖パウロはコリント人が聖靈の己れ等が内にいますと初より常に知り乍ら放肆の行をなすと云ふを以て特に彼等を責めたるありき（哥林多前書第六章十九）。是に由て觀るときは、該の賜物は受るは則ち受たりと雖ども、此の點までは徒らに受たる者なりき。神の賜物は其何たるを論ぜず凡て受領者が之を正しく用ふべき責任を取去る者にあらず、而して又聖靈にとりても人の胸中に徒然として宿ること十分に有り得べけん、毫も爲すこと無くして空しく止まらんこと決して無しと謂ふべからず。此事に於ては其最も單純なる説こそ最も眞實なる者なれ。我等が堅信禮にて受る所の者は神の働きたは力にあらず、活ける有心の靈其物なり。彼は之に由て我等と新しき關係を形づくり、我等の思想および情慾の源に接近して住し、我等をして其（我等が）彼に許して爲さしむる所の者と成らしめんとす。

特別に顯はるゝ諸の恩恵（神の恩恵）の背後には夫の一統に要する所の大いなる賜物ありて横たはれり。通例これを數へて七種となす、而して是みな開拓啓發せられたる靈心上および道德上の知覺が露呈し來る形たる也。此内部の教誨——唯に眞理を我等の眼の前に掲ぐるのみならず、又我等の能力を活かして之を曉らしむる此内部の教誨に由て、聖靈は我等を聖成す。此の七重の賜物は衆徳の群團中において果を結ぶべき者とす、其が別々の人にありて千差萬別に配合するよりして種々の品性は生ず、而して内に住みたまふ靈の萬殊の技巧は之に由て顯はる。聖靈は「各人」に其身と其社會における地位とに適する特別の恩恵を「心のまゝに預け與ふ」（哥林多前書十二章十



一) 恩恵が斯の如く箇人化するの状相は時としては一定の形にある恩賜 (charismata) と稱せらる。堅信禮を受けたる人にして或る恩賜あらざるは無し、此箇々別々の恩賜は即ち其人が教會の一般の富に一資を加ふる者と成るなり。

堅信は屢印證と呼ばれる。按ずるに十中八九は是れ其がペテラスマに對する關係のたりに然か呼ばれたるなるべし。印證は第一の行事にあらず、第二の行事なり。堅信に於ては神の印證を其既に爲したる所の事に受くる者とす。是すでに吐露せる「然り」(是 Yes) に加ふる「アーメン」也 (哥林多後書一章二十——二十二)。但し是れ單に一行爲の確定には非ず、靈知者を印證するの事なり (以弗所書四章三十)。我等みづからは之が爲に特別の聖成に由て神の所屬と永く記號せらる。彼の聖成はまた抹油の形容を以て描出せられたり、如何となれば、堅信に於て、我等は我等の程度にて、主の下にありて、世間に預言者たるべく、祭司たるべく、王たるべく、主と同種の職に聖成せらるれば也。

### 第十一節

前節に述たる此最後の思想は英國教會にては堅信禮に油を用ふることを廢したるが爲に其在昔の著明を失ひをはれり。然し乍ら手を按くことは確かに是れ使徒たちが聖靈を施せる方法なりき。極初代に於ては手を按く事に加ふるに實際油を用ふるの事 (抹油) を以てしたるや否やは詳かならざれども、抹油は該サクラメントの本來固有なる一部分と速かに見做さるゝに至りぬ。故に此禮典につきては英國教會は或る他の古き教會どもと少なくとも同等の地位に立てる者とす、如何となれば彼等は抹油の一點を保ちたれども、按手の點を失なひたれば也。

堅信禮を施すことは教會の第一階級 (監督) に獨り専ら屬す。使徒時代の先例にしたがひて (使徒行傳八の十四)、教會は監督の外には何人にも堅信禮を行なはしめず、但し地方の慣例は時として一様ならざる事もなきに非ず。東部教會に於ては只油のみを用ふるの習なるが、會長もまた堅信禮を施すことを許さる、但し必ず監督が特に調製したる油を以てす。

東部に於ては亦本禮式をペテラスマと併せて小兒にまで施せども、西部にては教權を振つて、小兒の段にては之をペテラスマと分離し、被施者が「分別の齡にいたるまで」之を延ばす事とす。事理を辨ふるの年に達するや、先づ志願者に其ペテラスマ (受洗) の誓言につきて問ふ所あり、其果して斯の如き大いなる賜物を受くるに堪るやを審かにせんことを計る。通常の場合に於ては、堅信禮を受るまでは何人も聖餐に列せしめられず、其故何んといふに正に聖バシルが言へる如し、曰く「主の跡と血を干かり享くることを許さるゝ所以の理を了らずして聖餐に臨む人は何の利益をも是より獲る無し」。固より聖バシルは堅信禮を先きにすべき理由として之を唱へたるには非ず、然れどもキリストに屬する所の物は獨り聖靈 (神の深奥を獨り究むる聖靈) に由て我等の眼に示され得るのみなるが故に、我等聖餐といふが如き深遠なる奧義に臨まん前に先づ聖靈の啓發を求むることは、理の自然なる者と謂ふべし。

### 第十二節

聖餐のうちに含まれたる根本觀念は吾人は受肉降誕の主に恒に依立して存すとの觀念なり。恰もペテラスマといふの觀念がニコデモとの談話において示されたるが如く、此の觀念はオペナナムに於ける我が主の説話にて明らかになりぬ。我等は彼に由て「たゞび生命、——



永遠の生命——に至らしめられたるのみにては未だ足れりとせず。我等の永生は我等が各々其れの獨立なる中心となりて爾後唯我等を以て源となすが如くに然か更生の時に於て我等に與へらるる者にあらず。我等は尙も我等の生命が元と出で來し源、すなはちキリストに其榮養を仰がざるべからず。我等がキリストに對する關係をキリストは己れが御父神に對するの關係に比したまへり。「御子は自ら生命を有つ」者にして(約翰福音書五の二十六)、單に一時偶生の者にあらずと雖も、基督は自ら吾人に告て宣まはく、彼に在てすらも其の生命はそれが唯一永遠なる源を離れて獨立なるものにあらず。「我は父に由て活く」と(同福音書六の五十七)。御子は父神の一切の圓滿を恒に己れに吸収するに由て活く、斯の如く我等は御子の圓滿を其の受くるに堪ふるだけ恒に己れに吸収するに由て活く。神自身の生命は我等の及ぶ能はざる所なれば、我等直接に之に就て汲む能はず。然れども神の生命は宛がら涯畔なき大海に於ける如くにして御子の身中に我等人類のために蓄はへらる、而して御子は其降世に於て之を我等に持ち來せり、而して(我等墮落したる者なるが故に)我等をして之を一層確かに且一層饒かに得せしむるの道を其苦死に於て我等のために開けり。

是等の思想は飲食の言語を以て我等に説き示さる。但し其事の骨髓に究めたらんと欲する者は須らく記憶すべし吾人の肉體を支持する飲食もまた深遠なる奧秘にして、同一の造物主——今之を教會に於て靈なる大目的のために用ひたまふ造物主——より出で來る者なりと。按ずるに我等の構造は元來この大靈用に供するため工夫したる者なり、而してキリストは單に後日の考案として既成の物を拾ひ得て甘く當嵌たるに非ず、實に是の如く言ふとも我等は其適當に非るを信ず。

我等が天然の構造は孤立しては生存する能はざるが如き者なり。生命を維持せんには食はざるべからず、——即ち我等のならざる物象を我等の身中に取られて之を同化せざるべからず。我等は周囲の百物と常に結合して離れず、果實、菜蔬、及び禽獸は其生命を獻げて我等の榮養に供す。但し其如何にして然成るかは學術の未だ我等に解説する能はざる所なり、如何となれば、少なくとも今日までは、生命は何たるか未だ詳かならざれば也。或る他の物を構成する無命の物質分子如何にして我等の部分となり、(其來り養なふ)我等の生命を以て活くるかは、——極めて一般普通なる事にして我等は退いて之を冥想する稀なりと雖ども、——是なほ未だ解説せられざる奇觀なりとす。吾人の體が由て以て活かし置かる、飲食は是れ自然界の構造中における一大難問たるなり。此事は基督が人類に對する己れの關係を奧妙に説き進めたまへる左の語中に其解答を得べし。「——なんぢら壞る糧のために勞がずして永生に至る糧すなはち人の子の手ふる糧の爲に勞らくべし、蓋父の神かれに印して證すれば也(此目的のために聖成たれば也)。「我は生命のパン也」我わたふるパンは我が肉なり、世の生命の爲に我これを予へん」。「誠に實に爾曹に告ん若し人の子の肉を食はず其血を飲ざれば爾曹に生命なし」。「活ける父われを遣はす、父に由て我が活ける如く我を食ふ者も我に由て活くべし」(聖約翰福音書六章二十七、三十三、三十五、五十一、五十三、五十七)。

是等の語を我等の主は信仰の思料にとて吐露したまへり、斯くて一年の後主の「交されたまへる夜」此等の語は——固より其奧秘はますます深められたれば決して解説せられたるには非ずと雖も——一つに集められて目に見るべきの形に寫し出され、——キリストの再び臨みたまはん時ま



で、至聖なる晩餐の禮典を以て教會に記念せらる。

### 第十二節

サクラメント物體の性質につきて已に論ずる所ありたる以上は、聖餐は單に前述の觀念を繰かへせる者——單に言語に代ふるに表號を以てして之を標出したる者——に非ざること明らかならば、今又茲に改めて此事を明言するは蓋し必要ならじ。聖餐は是れ其表する所の者を現實に信者に傳通する所の表號なり。我が主の口語を用て之を言へば、此の神妙なる奧義に於て我等はキリストを「食ふ」者とす、而して其之を食ふの事たるや單に敬虔なる記憶と篤信なる觀想を以てするに非ず、單に(他處または他時に於て爲さるべきが如く)内界の行爲たる信仰と愛を以てするに非ず、——基督このサクラメントにて「誠まことに眞まことに」其御身を我等に與へたまふが故に、——「誠まことに眞まことに」之を食ふ者とす。基督が眞まことに御身を與へたまふことは即ち是れ信仰が知らんことを要する最大要點にぞある。フーカル(Hooper)が種々の相闘々宗派を——にせんために之を基礎として其不十分なれども有名なる調和説を吐きたるは、豈偶然の事ならんや。羅馬教徒も、英國教會も、東部教徒も、ルーテル宗徒も、否カールビン宗徒までも、皆誠實に主張すらく、聖靈の力に由て眞面目の陪餐者は皆活るキリストを眞まことに與へり食ふ者となる。此等の諸宗徒は皆一齊に謹んで唱道す、信者が蒙むる惠福は其信仰の造り出したる者に非ず、畢竟其處そこに無き或る者を心中に描き出したる影像の類に非ず、是れ眞まことに外部より己れに傳はり來れる物なりと、——是すなはち降世の救主が己れの御身を我等の胸臆裏に最も深く植ゑたまふ所以の働なりとす。此事をだに恭しく信するならば、諸宗派の相一致和合するには決して越え難きが如き障礙あらじ。其

他本問題につきて我等が言ふべき所は只是れ此の根本眞理を細目にわたりて敷衍せる者のみ。如何に迷信と懷疑とを均しく脱したる者にもせよ、靈知のキリストを活捉すること無くして、單に教義の巨細巔末をのみ維れ明かに究め盡さんよりは、却つて細目を忘れて、中樞の眞理を堅く持せんことは、箇人の靈魂のためにも教會全體のためにも俱に遙かに勝れる者なるべし。然し乍ら鞏固なる一致は「是より以上は究めず」と相約したればとて決して造り得べき者にあらざ、却つて恭敬と慈愛の精神を以て力の及ぶ限り深く考覈し、同様の精神を以て研究に従事する凡ての人々をば、其が眼前の歸結よしや謬あやまれるとも、之を善く忍びて寛待してこそ鞏固の一致は庶幾たゞふべきなれ。斯の如き精神を以て我等は他人が何處にて誤あやまれりを見ゆるかを敢て腹藏なく指點せんとす、是れ議論または批評のためにするに非ず、誤あやままれる如く見ゆる説を討究することとは屢是れ眞理に達するに最も有功なる道なれば也。是を以て基督教會は夫のカルビン宗徒が主張し、(例へば)マヘリミ、テロール(Jeremy Taylor)が英國に傳播したる如き純然たる靈現説(purely Spiritual Presence)を以て満足する者に非ず。此説は夫の肉に偏し形に泥むと感ぜられたる教説に對する反動として起りたる者にして、自らは又内界と外界との間に存する眞聯關を輕視するの過に陥いれり。我等の主は唯に死者の中より復生せしのみならず、又榮を受けたる體にて甦よみがへりたまへり、又我等が未來の榮光は素裸なる靈の榮光には非ず、程よく體からだせる靈の榮光なり、然るに此説は之を忘れたる者に似たり。我等の主の教誨中及び神子の愛肉降誕説中に若し何事か明瞭なる者ありとせば、是れ必ず左の一事なりとす、曰く、基督の人性は人々が由て以て基督の神性を受くる所の媒なり而して其神性は人々が由



て以て基督の人性を受くる所の媒たるに非ず。是れカルビン宗の教理に於て無視したる所なり。最上の目的たる(こと疑なき)者に達せんと銳意するの餘り、幾分か輕蔑に類する短氣を以て、該宗に於ては我等の主が寄せて以て己れの再び來らんことを標したまへるサクラメント、及び我等の主が口づから該サクラメントを以て一種特別なる者と示したまへる聖肉あるひは聖骸を兩つながら併せ棄つ。是の如きは唯これ吾人の靈を感化する靈なる作用に着目する者のみ、吾人が全骸の複雜きはまれる性質、——其靈なる組織と其肉なる構造とを兼たる吾人が性質を處遇する作用に着眼する者にあらず。聖餐に基督の現前する事と信徒が聖靈を受くる事とを混同して、其間に毫も眞箇の差別をなす無し。此の宗派の人々もし我等信徒はキリストの聖肉を與かり食ふ者となされたりと萬一に認むるおらば、其之を認むるは、只これ我等が是よりも更に大なる賜物に既に與かる者となされたるの結果として認むる者たる而已。斯の如くにしてサクラメントの眞正の觀念は失せ去りぬ、而して謂ゆるチメトリウスの觀念なる者入り來れり。此の教義は福音信仰の本色たる單純を缺ける者とす。サクラメントと其が對して以てサクラメントたる物との差別は濫にして毫も典據なし。該宗徒の見に依れば、聖餐の物質を聖成するは、只これ之を某禮式に表號として用ひんが爲めのみ、而して是また其禮式に實際必要なる者にも非ず。謂へらく、信仰を公言する事、及び教會の親交に入る事を外にして、其他に眞に有用なる者は全く陪餐者が靈なる恩恵を内部に受くるの事のみ、而して此事がサクラメントの物質に附着すといふは唯名義上の説のみと。されば敬虔なる信徒にして若し聖成と願與との間だ卓上に横たはれる者は何物ぞやと問ふならば、其答は「是れ我が體なり」て主の辭を誠心より引くの事には恐らく有る能はざらん。

聖餐的現前の此觀念に反對して、——恰もユナクス宗がチメトリウス宗に反對する如くに、——中古の神哲學者の謂ゆる化質(變質transubstantiation)の説立てり。是また大綱に言へる如く「サクラメントの本意を廢する」者とす。此臆説によれば、麵包と葡萄酒は之に來り乘ずる夫の幾層榮光ある骸質の觸るゝあるや其骸消滅して、只幻影を其あとに留むるのみ、而して麵包と酒とに代りて或る他の物が現前することを示すと。此の如き教説は動もすれば藉甚なる文字を以て大書せられんとす、又實に最初は至極良好の精神を以て書かれたりき。是れ最初は聖餐の眞傳榮を護持する者の如く、智力の安んじ止まるを得べき明瞭の立脚地を供する者の如く、争ふべからざる形にて基督を其民の中に現前せしめ奉る者の如く見えき。然れども是亦ユナクス宗の如く眞理の或る富贖なる若干元素を失なひたり、斯くして又自餘の元素を危うくす。我等が本教義に對して第一に呈する異議は其が或る廢りたる哲學に基つくと云ふに存す。今日に於て學識ある思想家中本教義にて再燃せしめたる實骸(本骸substance)及び偶有(accidents)てふ哲理論を持つる者果して有るや否や疑はしと謂はざるを得ず。該理論は羅馬教會に於てすらも聖餐の教義と離れては自ら肝要なる者にあらず。想ふに該教會の學者を集めて之に其聖餐の教理を載せたる文章を改正せしめ、ラテラン(Lateran)及びトレント(Trent)の兩監督會議にて表明せんと務めたる緊要の思想をば之を保存すると同時に、其言語文字を一層精練し、唯に宗教上の知見を一層よく副はしむるのみならず、又學問上の進歩とも善く和せしめなば、蓋し美事ならん。但し「變質化質」の哲理よしや維持せらるべき者なるにもせよ、其中に合まるべき奇蹟は是れ神の行事中において他に比類を見ざる一種異様の者ならん。神は通例吾人の視聽を欺むきたまはず。且又羅馬教にてパンの骸



質消滅すと説くが如くに、其一たび造りたる物を濫りに消滅せしむるも神の常道にあらず。却つて神は其宇宙の各箇の極微分子をも一々に貯藏したまふ。固より若し之を外にしては他に然か富贖なる十分の意味を聖餐に關する基督の語中より學び得るに由なしとせば、斯る異議の如きは或は速やかに排除し得られん。然れども是と同一の意味もし或る他の解釋法に由て保つことを得べくんば、我等は——神の賜へる諸覺官の信任すべき者なるを感じ、又神が我等と甚だ親密に聯接せしめたまへる有形の受造物をも倍して尊重するに至りて——幾層大いなる榮光を神に歸せんとす。茲には一種の二中擇一ありて存す。本奧義に關しては中間の解説または推托(遁避)を容るべき謂ある無し。「是れ我が體なり」といへる我が主の語は我等に要むるに之を眞の「變質」とする中古神學の説と之を形似の言とする某論者の説とについて其一を擇ばんことを以てする者に非ず。吾人が視る所の物は其外見よりは深大なるを得べし。聖トマスが甦がへれる基督の手と肋に捫らしめられて「我が主よ我が神よ」と叫びたる時には其心果して如何なりしぞや。彼は其己れが招かれて捫れる所の者は眞實なる人體なりしといふことを否まず、却つて其が自身よりは大きいなる或る物より成り立てる肉體なりしといふことを否まず、否な更に其が水素と酸素の分子と合體したりしを感じ、是れ單に神物の現前を示すの表號として顯はれたる一團の幻妄なる偶有(accidents)には非ざりき、是は彼が偶像禮拜の譏なくして俯伏禮拜することを得たりし者なりき、何となればトマスは其時神をば見ざりしかども、其見たる所の者は彼れの主また彼れの神たる者なりければ也。基督が我等にむかひて汝等「取りて食らへ、是は我が體なり」と宣まふときにも、我等は然か感ずるを得べし。

英國の教會は第十六世紀、若くは其他の世紀における、何れの一神學者、または群神學者の説にも雷同着する者にあらず。然し乍ら本問題に關する現行の條文を製定せる人々の胸中に當時ありたる思想は如何なりしかといふ明證にして今日まで保存せられたる者あるは寔に天の賜物とや謂はまし。我が大綱三十九條の製定せらるゝに當りてクラウセスタルの監督チエニー Cheney (——メーリ女王の治下にありて、他の監督衆の逃避せしにも拘はらず、危を冒し生命をかけて獨り陷とまりつゝ其議席より侃々と變質説を辨駁したる膽勇の名士——)は該大綱中に今第二十八條を成せる者に抗論して曰く、「主の晚餐に於て基督の體を與へられ之を受け之を食ふは唯靈の上に在るのみ」といふは允當ならずと。彼は更に進んで主張して曰く、ロチエスタルの監督グレスト(Greast) (其日缺席しをれる者)も同じく之を允當ならずとす。是に於てグレスト書をセシルにおくりて曰く、「余は信ず閣下は必ずクラウチエスタルの監督が此「唯」といふ副詞の挿入を如何に心ぐるしく思へるかを聞かれしならん、是れ基督の體が本サクラメントに現前するの義を没し去れる如くなれば也、而して私に我にも之に就て彼を賛成せんことを求めたるのみならず、昨日我が缺席の議場に公然我を之が同意者として呈出したり。然し乍ら彼と我との間においては少しく趣を異にせるなきに非ず、我は明々白々に彼に告げて曰く、此「唯」といふ文字は決して基督の體の現前を本サクラメント上より滅し去る者にあらず、唯これを受くるに於ての粗形偏肉の觀を排除するのみ。我は即ち彼に告げて曰へり子は基督の體を手に取り、之を口に受け、眞に肉體を以て實體として之を食ふと雖も、然るも尙子は之(基督の體)を見ず、之に觸れず、之を嗅がず、之を味はざる也。故に我は本件に於ては子に反對せんとす、該條文は我れの起草に係れる者



なれば、殊に以て然りとす。然はあれども尙ほ我は基督の現前説を賛成したりしこと確實にして秋毫も疑なし。監督ゲストが自家起草の該條文に下せし解釋にして果して英國の改革教會の見解を忠實に代表する者ならば、化轉變質の説の排ぞけられしは當時の人々が聖餐現前説(基督の體が本サクラメントに現前すとの説)を思みたるが爲にあらざりしや照々として明らかなり。是れ全く該現前の様子が當時すでに蛇足的に定解せられてありしのみならず、又極めて心苦しく誤解せらるゝの恐ありたるに由る者とす。聖餐現前の正統説「一統教會の見」を護持し保全し推薦せんためには、之を暗ましたる新奇の定義あるひは解釋を脱除せずんばあるべからざりし也。

此の大問題につきては、西部の教會における其の異同間に立ちて東部教會は恐らく或は仲裁となるを得たらんか。東部教會に於ては、後年に及びて變質 transubstantiation といふ語を採用したりと雖も、未だ嘗て一質去りて一質これに來り代はるといふが如き歐洲中古に盛んなりし哲學的臆説を之に輸入せざりき、實に斯る思想は、羅馬教の所説に依れば、神の大事蹟といはんよりは寧ろ幾分か人間の巧技に彷彿たるがごとく思はる。東部の神學者は小心に指示して曰く、此語は彼等が用ふる所にては毫も變化の如何にして起るやを解く者に非ず(彼等は之を解かんとするは愚にして且不敬なる事なりと考へたればなり)、全くこれ麵包と酒の基督の體におけるは唯之を見て彼を思ふの關係あるのみと唱ふるが如き、若くは又ルーテル宗徒の鑿に倣ひて局部的相互透入(local interpenetration)を唱ふるが如き諸説を杜絶せんために用ふる而已と。想ふに大體の覺悟としては之に優る者あるべくもあらず。是れ教會師父たちの教へたる所と善く一致す。按ずるに教會師父たちの中にありては、其用ひたる言語文字の千差萬別なるが中にありて、少なくとも

聖マヤステン、マールタルの説に歸一する所あるが如し、曰く聖餐に呈供せる者は最早「尋常の麵包に非ず、尋常の酒に非ず」。一たび聖成のなるや、麵包と葡萄酒は單に舊のまゝにてあるにあらざ、聖靈の之を覆ふあるに因て、言ふべからざるの變化これに起れり。其變化は人間の學術を以て定解すべからず、哲學上の言語には之を説き出し得るものも無し。此等三種の物は我等の主イエス基督の御身に對して關係を有する者とせられしとは、吾人が肉體の物質が聖處女の胎内に於て新しき關係を生ぜしめられしが如し。麵包と酒は新しき目的に供せらるると云ふが如き、我等にむかひて新しき意味を有すと云ふが如き、若くは又内部の變化あるひは靈上の變化を経たりと云ふが如きは、未だ人心を満足せしむるに足らず。此の語は疎遠且冷淡なる者と聞ゆ。此の變化は唯に靈なる者なるのみならず、又生命を其中に有す。ニッサのグレゴリが左の如く言ひたるは、其句は混雜しをると雖ども、要するに此の思想を陳べたる者と見ゆ、曰く、我等の主は地上にいませる時食物に由て活きたまへり、其食物は主の體につらなりて主の體となれり、彼の時此等の物質に對して成し就けたまひし合體を主は今サクラメントに於て一層高尚なる方法を以て我等のために成し就けたまふ。茲に御「ことば」の恩恵をかきや自ら一箇の聖體を造りいだし給へり、此聖體たるや其食へる食物より成れる者にして、自らは一種の食物たる者と謂ふべし。諸亦其食物は聖パウロの言へる如く「神の言と祈禱に由て潔くなる」也、飲食に由て御「ことば」の體に化するに非ず、御「ことば」が自ら「是は我が體なり」と宣まひし如く、直接に一變して御「ことば」の體とは成る也。是の如く聖靈が聖餐にあたりて行なふ奇蹟は、中古の神學者輩が想像したるよりも一層高尚にして又一層自然なる者なるを見る、而して榮を受けたまへる主の實現は吾人の何



れ的能力をも毫も枉ぐるに及ばずして十二分に信ずるを得べし。

#### 第十四節

此の説は羅馬教の所説に對して屢(もつとも多少の無知識よりして)提出せられたる夫の難題——基督の躰は天と地に同時に在る能はずとの事——を含む者にあらず。此異議は奇なる由來ありて我が祈禱文本(Prayer-book)中にさへも載られたり、是すなはち「黒指揮文」Black Rubricと稱する部分に見えて、實は思慮ある神學者の奮ける者にあらず、而して是は他の「指揮文」と同等の重を有する者にあらず。此の異議は彼處に書せられたる文字に依て之れを見るに、二箇の隱見を其裏に藏す、但し其言はんと欲せる意味は十分に正しき者とす。キリストの體はもはや我等の躰のごとく「自然の」躰にあらず、是れ「靈なる」體たる也。而して天とは遙遠の處にあらず、神妙に高められたる處を謂ふ。是故にキリストの自然の躰は天に在りと言ふは畢竟是れキリストの躰は自然の躰たることを止め、吾人が知識の及ばざる自由と榮光の狀態を受けたりとの事を唯拙なく説きたる者と見做さる可らず。基督果して尙身躰を有ちたまふや否かと疑がふ人は是れ基督教の信仰の道を疑がふ也。然りと雖も、處所といふ觀念に於て吾人が種々兎や角思ふ所の者を悉くキリストの今の躰にも擴めて同日に論ずるは、至極の輕躁と謂はざるを得ず。例へば夫の榮を受けたる靈なる躰の如きは——之を具有する者の自意に由れば去來知らず——何物とも東西遠邇等の關係を果して有し得るかは知るに難しとす。况てや其が同時に幾何の物と右の如き關係をたもち得るかは知り得べき所にあらず、「萬物に滿ち」たまふ者の上に於ては殊に然りとす(以弗所書四章十節)。併し乍ら此の斯く拙なく言顯はされたる困難教義にして若し是れキ

リストの體は同時に天と地の二状態に在ること能はずとの義なりと解き示されなば、基督教會は悦んで之を容れん。キリストの躰は聖餐にて我等の眼前に現する時には、固より是れ天上より持くだられし者にあらず、又は天上より持かへられし者にあらず。聖餐に於けるの現前は決してキリストの躰をして今日の榮を失なはざるを得ざらしむるが如き性質の者に非ず。是れキリストが地上に住みたまへる際に於けるが如き者に非ず、されば是れキリストが死して十字架に懸りたまへる時に於けるが如き者にあらざるは尙更の事のみ、實は是れキリストが神の右に坐しるたまひて爲したまふ所に係る。此の奇絶妙絶なる奧秘に在りては、尙此の下土に過客たる我等は、兩眼をば蓋はれをると雖も、夫の今後公然我等の榮養とならんとする者——即ち天使の眞麵包——を食ふとを許さる。是すなはち地上にて與へられたる天の預言とこそは稱すべけれ。之を食へる者は已に「永生」を獲たり、而して其躰に傳へらるゝ聖榮なる物は其人みづからの復活すべき印證を併せて帯び來る(聖約翰福音書六章五十四節)。

且又此サクラメントたるや唯に我等がキリストとの合躰を保つ手段たるのみに非ず、又これ我等が相互との合躰を保つ手段なりとす。此等二者は必然に併行す。靈魂の一々孤立してキリストに附くと云ふが如き事は無し。實に一々の靈魂は——少なくとも——宛がら他者の絶て無きがごとくに、極めて直接に極めて親しくキリストに附麗す、而してキリストは宛がら其外には恩澤を分掌すべき者絶て無きが如くにして、全く、總て、己れを各箇の靈魂に與へたまふ。キリストの全部の躰、及びキリストの身位の圓滿なる徳が一々のサクラメント執行に於て現在すと云ふは、此の意味なるや疑を容れず。然し乍ら何人もキリストの躰を一種の私有財産として受くる



を得ず。我等は兄弟相愛しつゝ一致となりて須らくキリストを受くべし、然らずんば毫も受くべからず。聖晚餐の名即ち此の事を合著す。聖パウロが「我等が劈くところのパンは共にキリストの躰を享くるに非ずや」と言ひしは(哥林多前書十章十六節)、其を靈魂とキリストとの交通なりと謂ひしに非ず、况んや又其パンはキリストの躰を傳ふるの媒介なりと謂ひし者とするの解釋に於てをや、是れ該希臘文の許さざる所なるを奈何せんや。實は聖パウロの意味に曰く、我等信徒は一同にキリストの躰を與かり享けつ之に在て兄弟たるなりと。是は彼が此に特にパンを「劈く」ことを擧たる所以なりとす。夫の意味深長なる行事は決してキリストの躰が十字架の上に劈かれたるを謂ふにあらず、如何となれば——聖クリソストムが此事に關して指點せし如く——聖ヨハネはキリストの躰が十字架の上にて毫も劈かれざりしことを筆勢強く特記したれば也。パンを劈くことは萬人がことごとく同一の全躰を與かり享けんために爲せる者とす。故に聖パウロは既を進めて曰く、「我等は、多しと雖も、一塊のパンなり一つの體なり、そは皆該の一つのパンを與かり享ければ也」と。謹んで付度るに、基督が本サクラメントを設立するに當りて、其嘗てカペナウムにて用ひたるとは異なる語を用ひて、「是は我が肉なり」とは曰はで、「是は我が躰なり」と宣まひしも此精神なりけんか。キリストの肉はキリストの人性なり、之に由てキリストは人たるを得たまへり。是は或は箇々分立なる一團の靈魂にも與へられたらんも知らず。然れどもキリストの躰は構造を経たる一全躰にして、キリストが蒙りて現出したまふ機躰なりとす。是すなほち我等がみな共に與かり享くる所の者なり。我等は唯に同一の躰質を受くるのみならず、又離ること無き合躰を形づくる所の者を享く。斯く聖餐は基督教會の大常設サクラメントなり。基督

教會の會員たるを明らかにする唯一方法は聖餐を受くるに在る而已。聖餐に陪するとを禁めらるゝは即ち信徒たるの權を停止せられたる者なり。聖餐はキリストの躰にして、教會もキリストの躰なりと云ふは、是れ單に偶然に好借喻の符合したる者にあらず、是れ教會の全く存在するは聖餐にあれば也。之に由て教會は支持せられ、充足せられ、統一せらるれば也。之に由てキリストは教會に自ら形を成して働きたまふ。さればキリストは「是は我が體なり」と曰ひて聖卓にて御身を我等に與へたまふ時に、教會をもまた併せて與へたまふ、故に我等もし斟酌なく教會を蔑視するならば、キリストをも受くる能はず。此の思想は今日に於て之を主張すること如何に少なきにもせよ、是れ上に引きたる哥林多書に安置せられて炳然たるのみならず、又古代の師父たちの教誨中に一大要素を成せる者なりき。聖パウロがステパン曰く、汝等もしキリストの躰また肢たらば主の卓上に載せたる奧義は是れ汝等の奧義なり。請ふ汝等が目に見る所の者たれ、汝等が身みづから有る所の者たれ。

聖晚餐禮の大目的は明かに是れ我等が其榮を受けたまへる首長との合躰、ならびに同胞會員との合躰を擴め且強めんとするに存す。吾人をしてキリストと合躰せしむるペテラスマの福祥は大いなりと雖も、之を既に完成して此に止まる者とは思へからず。キリストとの合躰は漸々に進む者なり。誠實忠信なる陪餐(親交 communion)は唯に其一たび形づくりたる結合を護り温めて破れざらしむるのみならず、又益々我等をして深くキリストに居らしめ、キリストをして我等に居らしむるに至る。聖徒にとりては其最後の陪餐を以て其第一(最初)の陪餐よりも遙かに大いなる事とす、——是れ強ち其受くる所の者が全く異なるがために然るに非ず、一々の善良なる陪餐は其次



の陪餐に與ふるに一層深く徹するの好結果を以てす。更生に於て第一にキリストと合夥すること  
は我等の意志の干かる所にあらず、然れども其合夥の漸々の發達進歩は然らず。是すなはち此サク  
ラメントが食ふの形をとれる所以なりとす。食ふといふとは養ふことを謂ふのみに非ず、食ふ者  
と食はるゝ物との同一化するを謂ふのみに非ず、——食ふことは眞箇に自意の動作なり。キリ  
ストは我等がキリストとの有功なる合夥は自意的なる性質の者なることを示さんとて、カペルナ  
ウムカペルナの講話に於て、漸々に普通の「食ふ」といふ語に易ふるに普通ならざる「食ふ」といふ語——美味  
を食ふを謂ふ文字、其食ふ所の物を玩味して食ふを表する者——を以てしたまふ。是故に「惡き人  
は主の晩餐に列なるもキリストの躰を食はず」といへるは虚ならず。其物は惡き人に呈せらるゝ  
こと其が忠信なる信徒に呈せらるゝに異ならず、然れども前者は之を同化するの意志もなければ力も無し。正實の信仰あれば、如何に未熟なるにもせよ、——又志正しければ、如何に實行は  
薄弱なるにもせよ、俱に是れキリストの躰を受ることを望み得べし。之に反して故意の不信、輕蔑、  
不從順等は本サクラメントを潰すや大いなり。心の戸の堅く闔されたる處へはキリストの躰は入  
る能はず、又入るを肯んぜず、又不敬不虔にして聖餐を食ふ人は唯震怒と殃禍を頭上に招かん  
耳。

### 第十五節

凡そ聖餐の論及せられたる處にては、必ずや天性自然に、主の躰カキのサクラメント  
を最第一とす、而して寶血のサクラメントは之を飲むに於るが如く、又思想に於ても、第二の地  
位を占む。杯を廢して信徒に與へざることは、之をパンを與へざるに比すれば、キリストの制度

を破るに輕き者とす。古代にありては、病める者および獄ひびにある者に施すに唯本サクラメント  
の前半のみを以てして、後半には及ばざりしこと、時として有りしや疑ひ無し。然し乍ら此事は  
今日羅馬教に於て規則とする所の者と如何に異なるかは指示するを待たずして著るし。聖パウロ  
も哥林多前書第十一章二十七節に、「其パンを食ひ、または其杯を飲み」云々と曰ひて、此等二者  
を思想上に分離せり、此辭は此等二者の中時としては只其一のみを施し得べきをいへる者と從  
來認められき。但し若果して然らんには、其中には自然に左の思想を含蓄せんか、曰く酒なくし  
てパンのみを與へんよりは、寧ろパンなくして酒のみを施しても可ならん、然れども斯る風  
俗は古來毫も痕跡あるを見ず。聖パウロが此等二者を思想にて分離したるを思ひ、殊に又キリス  
トが最後の晩餐において此等二者の間に長き時間を挿みたまへるを考がふれば、此等は決して全  
く同一の意味なる者に非るを察知すべし。我等の主は第二の禮にして若し自家特有の惠福を載る  
者ならずば、徒らに二段の行事を設けたまはざりつらん。されば人々が己れの過失に由るに非ず  
して「止むを得ざる事情ありて」、キリストの血のサクラメントを受くるを妨たげられたる時に  
は、少なくとも之が惠福の幾分はキリストの躰を忠信に受くる事に由て與へらるべしと信じて無  
理ならじ。然しながら若し教會にて不十分なる理由を以て杯を常に廢して全躰の俗信徒に之を與  
へずば、其結果教會に對して遂に何如なるべきかは逆視すべからず。

公明に棄たらん方遙かに好からんと思はるゝ見解を維持せんとして、羅馬教の神學者輩は教へて  
曰く、基督の血は已に基督の肉の賜物中に含まれたり、然るに彼等は此事を主張するに於て惟  
に聖杯を無用の贅物たらしむるのみならず、又二つの肝要なる眞理を輕々しく看過するを奈何ん



せんや。彼等の用ふる言語は我等の主の體が其地上に在りしときと同じき意味に於て尙「肉と血」の體なりといふことを暗示するに餘りに屢なるが如し、されど斯る體は「神の國を嗣ぐ能はず」とは聖パウロの語にあらざるや(哥林多前書十五章五十節)。——第二に、彼等は斯く幾分か物質的に考へなせる其實血が尙我等の救主の脈絡に循環しつゝある者として受けらるゝや、又は信者の飲物たるべく灌ぎたる者として受けらるゝやは、大事ならざる者のごとくして論ず、是すなはち肝要なる點なりとす。聖杯の賜物は單に基督の血を賜はるの謂にあらざる、「衆くの人の爲に流したる」基督の血を賜はる者なり(聖馬可傳福音書十四章二十四節)。是れ追究するには難き思想なれども、之を謹んで學ぶ者には必ず其勞を償ふの好結果あらん。

上古の律法に依れば、——否な又最近の物理研究に依れば、「血は生命なり」(申命記十二章二十三節)、一層精密に之を言へば、血は生命の所在及び媒介なり、「肉の生命は血に在り」(利未記十七の十一)。血は體を通りて過ぐるに當りてや、一方には不潔物を載せ去り、一方には耗損を補ふ諸元素を載せ來る。血の此の作用をはるや體は死す。斯の如くなるを以て血は眞に體の生命と同一視せらる。故に血が體より悉く流れ去るや生命も之れどもに去る。此これを犠牲に用ふるの意味とす。犠牲の血は犠牲の死を表せしにあらざる、其生命を獻ぐるを表せり。生命が屠殺に由て全く消滅したりと考へたるに非ず、只生命が其地上の活動を失ふ、其寓したりし自然の機軸(身體)を離れたるを謂ふ。屍骸は已に死せり、然れども血は尙活く。屍骸の何れの部分をなりとも内庭の聖所に携ふるはイスラエル人には寒心すべき褻瀆と見えたらん、然ど是れ生命たる血の當然なる結局なりき。牲畜を殺すの事には他の理由の充つべき者ある無し、如何となれば神は

「死ぬる者の死を好みたまはざれば也」(以西結書十八章三十二節)。されども神は有罪なる生命を諒りて獻ぐる者を悦びたまふ、是れ斯る生命は地上に存在すべき權を失ふたるを自から認めて全然己れを神にたてまつるが故なり。

是すなはち我が萬福なる救主の我等がために爲したまひし所なりき。人類の罪を告白する者として我等の主は一たび己れの血を流したまへり。此事すなはち是れ一大サクラメントなりき、即ち是れ眞に「靈魂をそそぎて死にいたりたる者」にして(以賽亞書五十三章十二節)、自然なる、快活なる表號を以て衣となせり、此行爲たるや之に先だてる諸式の獻牲にことごとく應ずる者にして、將來萬世の人々の心に訴ふる者なりき。但し是は終にあらざる。預表たる祭司長は至聖所に入るるときには「他の物の血」を携へてゆかざるを得ざりし(希百來書九の二十五)、如何となれば己れの生命を離して之を獻ぐるには由なかりしを以てなり。是れ單に預表的に爲し得たる而已。然れども基督は——其復活に於て永遠に祭司長となりたれば——「己が血を以て」我等のために天に入りたまへり(希百來書九章十二節)。彼は聖アウガステンがらる如く「勝利の犠牲」Victor-Victimにして、永遠に御父の前に——唯に其死をのみにあらず、唯に其生命をのみにあらず——又其苦劇なる、而も甘心なる獻身の死を一たび經たまへるに由て高められ且富まされたる、不滅無窮の生命——を呈することを得たまふ。我等は萬福なる主がニダヤの祭司長のごとく、天上の贖罪所に或る靈化せる物質(主の生命が主を離れて尙宿りをる所の物質)を灌ぎめたまふと想像すると要せず、又實に然か想像する能はず。基督の生命は再び永遠に其本當の機體——其榮化せる體——に宿りをる。但し其榮化せる體は其表面に殺されたる跡(如何なる者にもせよ)を帶ぶ(獻



示録五章六節)、因て之を生動する人命の素は其がカルバリに於ける榮耀ある自家濯濯に由て極めて深く變更せらるゝ也。「濯ぐ所の血」——贖罪所と我等とに兩つながら濯げる者——にして、「アベルの血の言ふところよりは尤も愈れ」る者は、斯く思想に於ては、「新約の中保たるイエスと別にして教會の榮光として特に觀するを得(希百來書十二章二十四)」。固より是れイエスの身位を離れて存する者にあらざり、イエスの身位より出る莫大なる利益を蒐收す。彼れの血は彼が磔死の諸の功徳を悉く載す。

是に由て觀きたれば聖餐の第二の部分は我等が罪人としての特別なる需に應ずる者なるや知るべし。人類若し毫も墮落せず、而して神子尙降誕せしむたらんには體のサクラメントと云ふが如き者は或は與へられたらんも、血のサクラメントは與へられざりしならん。是亦聖餐設立の語に於て我等の主が暗示したまひし所なるが如し。パンを與ふる時には主は苦死または罪惡の事は何も言たまはず、而して特に杯を「罪の赦免」と連ねたまへり(馬太二十六の二十八)。體を與へたまふの事は復た是れ自身にて絶對的に全たし、他に之に比すべき者なし。是れ單に禍を轉じて福となすの事に止まらず、失ひたる惠福を回復するの事に止まらず。御血を與へたまふの事は我等を罪に定めたる所の契約とは判然對比して設けられたり、是すなはち「彼れの血を以て立る所の新約」なりとす(哥林多前書十一章二十五、出埃及記二十四章八)。斯の如く本サクラメントの兩部分は神子降誕および贖罪救世として相互に關係して立てり。此の見解に於てすれば、其兩部分の先後の如きも極めて意味の深長なるを覺ゆ。我等は先づ罪を淨められて然る後に基督に合躰するにあらざ。却つて我等は先づ基督の躰の親交に入り、然る後に基督の嘗て一たび流されし寶血の洗滌を

蒙むるを得るに至る也。我等もし陪餐者の資格をたもち、即ち「光の中を歩かば」、互に同心なるを得、且イエスの血すべての罪より我等を潔む(約翰第一書一章七)。先づ高められて基督の榮化したる體にあづかり、然る後基督の生命の特殊なる功徳(彼れの死が生じたる所の者)に就て飲むことを許さる。其第一の賜物は一層廣大なる者なりと雖も、凡そ罪を深く感ずる者は第二の賜物を無用とは決して思はじ、又は罪人の需を無用に過大にすとも決して感ぜじ。

**第十六節** 最も古き時代よりして聖餐は教會に於て唯に我等信徒が由て以て我等が受榮の主および彼が諸の恩澤を己れに取るを得るの大手段と見なされしのみならず、又教會の最大なる犠牲と見なされたり。初代の基督教徒は一齊に馬拉基の謂ゆる天下何處にても獻ぐる潔き犠牲云々の預言を我が聖餐を指せる者と解きたれば、我等は其れが使徒たちの教誨の一部分なりしといふことを疑がふ能はず(馬拉基書一章十一節)。聖餐といふ語は單に其獻祭に伴なふ讚美と感謝にのみ當る者にあらず(讚美と感謝も聖餐の一部分にして、特別にも聖餐に著しき者なれば、遂に聖餐をイウカリスト Eucharist 即ち感謝祭と名くる程なりとは雖も)。亦これ單に基督教徒が常に必ず之と併せて獻じ、「眞に神の前に記ちかるべき」者として喜捨したる施濟金にも當る者にあらず(使徒行傳十の四)。且又本獻祭は彼の禮典に用ふる麵包と葡萄酒の呈供に單に在る者にあらず(古昔の禮拜式にては此呈供を甚だ嚴かに行ひたりと雖も)。我等もし「自ら己れの魂をも體をも」ともに犠牲と思はじ、一層宜きにかなへる者とす。例へば疎漏に聖アウガスチンの書を讀まば、彼は聖餐に於て此外に他の犠牲(獻祭)あるを知らざりしとの結論に我等は殆んど必ず達せん



とす。聖アウガスチンは再三反復して主張すらく、教會其物は即ち犠牲にして茲に獻げらる。其語に曰く、「是すなほち基督教にての犠牲獻祭にして、衆くの者キリストに在て一となる。之を基督教會にては信徒の熟知する聖晚餐のサンラメントに於て執行す、該禮典に於て教會は自ら學び知る我は其獻ぐる所に於て實は己れ自身を獻ぐる也」と。聖アウガスチンは此に譬喩的なる、若くは哲學的なる言語を用ひたるなりと云ふは未だ足らず。該師父が言へる所は眞實の事實なり、「キリストの體」を獻ぐる事にして今や其諸の肢をも一括して併せ獻ぐる事たらざる如き者は想像すべからず。キリストの軀もし教會なくしては犠牲に獻げらるゝこと能はずんば、况て教會は彼の聖物（之を與かり食ふ者はキリストの軀となりて神に悦こばるゝ者と成る）なくしては争でか獻げらるゝを得ん。我等自身の犠牲——並に我等の獻納物、喜捨金、讚美等——は各聖餐禮に於て新たに加ふる所の元素なり。然れども是は其基めすべき或る他の幾層有力にして常住なる犠牲を必ず要む。

我等のすべての供獻物に實形と價值をあたふる者は則ちイエス、キリストの其身位を軀も魂もあはせて常に神の御前にさゝぐるに在り。キリストは其聖餐を以て代へたまへる年々歳々の踰越節が出埃及の記念なりしごとく（出埃及記十二の十四）、聖餐を以て己れの記念となしたまへる時に、其使徒たちに之をなすの權をあたへ、又之をなさんことを命じたまへり。然し乍らキリストは「我が死を記せんために之をなせ」とは言ひたまはざりき。聖餐は直ちにキリストと連なるべき者なり、如何に大いなるにもせよキリストの一言や一行とのみ連なるべき者にあらず。キリストは己に死して去りし者としては其教會の中に記念せらるゝを得ず、其形は見えぬども活きて現前する

者としてこそ記念せらるゝを得るなれ、而して其活きて現前することは彼が己に我が軀なり我が血なりと説かれしパンと酒とを以て保證せらる。是等の聖物にむかひてキリストが眞に現前し、且其今まで我等のために爲したる所をことごとく御身に攝して其處に立ちたまふと我等は記念す。但し我等がキリストに對する記念は何の方向を取るや。觀想におけるが如き單に内心にのみ止まる者にあらず。聖パウロは之を世より世、國より國と徧く宣布する所の者と稱す。聖餐は主の死を宣べて又宣ぶ（哥林多前書十一章二十六）、——此死や是れ人類よりは大きいなる者の受けたまひし所なり、——彼につきては此所爲やがて彼が活けることを證す、而して彼れの見證はたゞ彼が再び來る時まで要するのみ、其再び來りたまはん時には、記念は變じて實物とならんとす。但し聖餐は單に入と人との間の事とは見做すべからず。該記念にして若し單に内心に於けるの事のみ止まらずば、亦これ單に教會の肢員間に於けるに限らじ、是更に數歩を進めて神に對するの記念たる也。是を其本初の義とす。神の諸の慈惠——平常における飲食の賜、人類一般に對する攝理等——を感謝するとも、我等は特別にもキリストに於て與へられたる慈惠を神に感謝し、神にむかひて（唯に我等相互間におけるのみならず）夫の我等が一切の望の集中する所たる寶血及び寶血を呈供す。是の如き行爲は最も眞實に是れ犠牲獻祭なりとす。

〔註〕許多の學者はおもへらく聖路加福音書第廿二章十九節に用ひたる「是を爲せ」「我を記せんために之を爲せ」てふ文字は即ち犠牲獻祭の意味を含めたる者なれば、須らく「是を獻げよ」と譯すべしと。然るときには勿論「是」といふ文字は聖餐のパンと酒とを各自に指す者なるべくして、聖餐禮の執行を指す者に非ず、——即ち「此物を獻げよ」也、「此事



を行なへ」には非ざる也。希臘語の「なす」は舊約書中にて屢々此義に用ひられたり、例へば「我れ牡羊と牡山羊をさしけ或そなへん」(詩第六十六篇十五節)といふ處にて七十士希臘譯本には我れ牡羊と牡山羊をなさんと書けるが如し。此「なす」といふ語は、斯る關係にありては、牲畜の屠宰を特別に指して謂ふに非らず、犠牲獻祭の全軀を表す。故に斯る議論に對しては毫も教義上の故障ある無からん。我等の主もし屠宰の語を少しも用ふる無くして只「是を獻げよ」と言はんと欲したまひしとて、彼の語より外の語を用ひたまひは得せざりつらん。哥林多前書第十一章二十五節における難句——「飲ごども是を爲せ」と和譯、如此おこなひて飲ごどもに云々——は同じき目的物を兩方の動詞に跨がらせ得たらんには、大いに解し易くなるべきか。但し「是を獻げよ」との譯は其由て來る所日淺し。希臘師父たちは、聖ヤサチン、マートルを除くの外、皆悉く此等の語を「此事を行なへ」の義に取りたり。固より彼等も此等の語を全軀としては其中に犠牲獻祭の意味の籠れるを見たりと雖も、此の「是」をパンと酒の義なりとは彼等が言外に暗示せざりし所なり。福音記者および使徒たちにして若し然か思ひしならば、此事は決して是の如くならざりしならん。

但し、誤謬を防ぐために、我等は此の聖餐を以て犠牲なりとする正統説に於て第一に左の點々を明らかにするを要す、曰く此説は毫も十字架上の犠牲の圓滿なるを傷つくる者にあらず、又決して受祭の主を再び苦痛あるひは死に服せしむる者に非ず。獻げられたる物の變壞することは犠牲の獻祭に必要ななりといふベルラミン(Bellarmine)の説には我等賛同する能はず。預表の犠牲に

於ては——少なくとも其若干部分に於ては——此事は然りとす、如何となれば焚かれなどするに非れば、其祭物が眞に人用を離れて全く神に歸したりといふことを表すの道たえて無ければ也。但し壞滅はたゞ預表物の性質の不完全なるに因て必要なる者とす。犠牲獻祭の本意は我等に貴とく神に悦ばるゝ如き物を上まつるに在り。是故に聖餐禮においてキリスト若し神に獻げらるゝと信するならば、最早キリストを尙も苦みつゝありとは信するを要せず。師父たちの著書中には彼等が然か思ひたるを示すが如き文字散見すとは雖も、斯る文句は亦然か思はざりしことの確かなる人々の著述中に於ても容易く發見せらるべし。聖餐に於ける「屠宰」のために犠牲の身上に變化おこれりと云ふが如き、聖成に由てイエス、基督は變性したりと云ふが如き、「是は我が體なり」、「是は我が血なり」と別々に宣べたるサクラメントの語は利刀の如くにして不可思議にも基督の軀と血を別々に斷割すといふが如き、斯る奇説を現今の君牧師たる者が公然と書きて神學校の教科書となしたるを見れば、聖クリソストムや聖アンブローズの如き人々は、必ず悚然として寒心せん。「律法」の<sup>〇</sup>日々の<sup>〇</sup>贖罪行と<sup>〇</sup>キリストの<sup>〇</sup>十字架<sup>〇</sup>上<sup>〇</sup>における<sup>〇</sup>只<sup>〇</sup>一回<sup>〇</sup>にして<sup>〇</sup>足れる<sup>〇</sup>獻身<sup>〇</sup>とを明快に對照して縷々説き來り説き去れる希百來書<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>全精神——並に又凡そ正統の信仰<sup>〇</sup>を持する<sup>〇</sup>人々の<sup>〇</sup>感情——は是の如く福音を枉ぐる説、否々寧ろ是の如く福音に背く説を斷然として排斥す。基督が聖餐に實現したまふ<sup>〇</sup>狀は<sup>〇</sup>基督を<sup>〇</sup>其が<sup>〇</sup>榮光の<sup>〇</sup>地位より<sup>〇</sup>曳もどすが<sup>〇</sup>如き<sup>〇</sup>者に<sup>〇</sup>あらざる<sup>〇</sup>ことは<sup>〇</sup>我等が<sup>〇</sup>既に<sup>〇</sup>論じたる<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>如し、而して<sup>〇</sup>又<sup>〇</sup>基督教の<sup>〇</sup>犠牲の<sup>〇</sup>性質は<sup>〇</sup>キリストをして<sup>〇</sup>日に<sup>〇</sup>新たなる<sup>〇</sup>間斷なき<sup>〇</sup>苦には<sup>〇</sup>まらしむる<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>如き<sup>〇</sup>者に<sup>〇</sup>非ず。若し<sup>〇</sup>然らずんば<sup>〇</sup>是れ<sup>〇</sup>イウカリスト(感謝祭)に<sup>〇</sup>非ずと<sup>〇</sup>謂ふ<sup>〇</sup>べし。我等の<sup>〇</sup>諸教會には<sup>〇</sup>歡喜の<sup>〇</sup>讚美歌を<sup>〇</sup>となふる<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>引かへて、却つて<sup>〇</sup>罪人の<sup>〇</sup>號泣<sup>〇</sup>嗚咽<sup>〇</sup>みち<sup>〇</sup>わたらん、是れ<sup>〇</sup>罪を<sup>〇</sup>犯



せる人々は自ら救はれん爲に日々其甘心の救贖者を呼ぶとして己れが爲に新たに不可思議の苦を受けしむるを以てなり。我等の中には斯る非常の價をばらひて其靈魂を拯はれんことをば肯んぜざる者多からん。我等の知らざる中に基督が其犠牲に由て我等のために嘗て成したまひし所の事を感謝の涙もて受くるは素より別問題に屬す、嚴かに且故らに聖壇に近づきて基督をして多少となく其救贖の苦を再び尋がしめんとするとは決して同日の談にあらず。

されば本犠牲を正しく観ずるの道は左の如けん。——基督は天上に於けると同じき狀にて聖餐に於て我等の前に實現し給ふ。彼は天にて自ら爲す所を我等をして聖壇にて彼に對して爲すことを得せしめ給ふ。基督は其勞苦の既に終れる者として恒に其處に坐したまふと雖ども、尙彼は「位にある祭司」にして（撒加利亞書六の十三）、常に其生命——嘗て一たび捐て、復どりかへし、爾後かさねて捐るを要せざる生命——を我等のために獻呈しめたまふ。彼が我等の手に授けたまへる此サクラメントを以て我等もまた然かす。我等は單に十字架を聖父の神に申すにあらず、亦活現する救世主の躰と血を神前に呈する也、彼は即ち十字架上に死したまひし者にして、唯に一たび彼處にて我等のために挽回の祭物となりたまひし而已ならず、實に又常に「我等の罪の挽回の祭物なり、第に我等の爲のみならず、徧く世（天下）のための挽回の祭物なり」（約翰第一書二章二節）。此意味に於ては我等敢て言はんとなす聖餐は挽回の犠牲なりと。是は基督が天にて己れを獻呈したまふと同じき狀にて然る者となす。本當に之を言へば、十字架上の犠牲（獻身）には幾たびも繰かへすの事は無く又これを續くるの事も無し、さりとして又單に之を記憶するの事のみには非ず。基督の活ける御身に於ては、カルペ山なる永遠の獻身は何時も新なる事蹟にして、更に繰かへす

を要せず、又繰かへすを容さず。基督は其既往の苦難よりする無盡の功德を以て我等のために天にて己れを獻呈したまふ、而して聖餐の諸効果はことごとく是より出で来る。

### 第十七節

基督教にての祈禱はみな聖餐上の親交および獻身に基づけり。基督と合躰せるに因て我等は祈禱するの權を得、而して基督の功を戴いて之を實行す。此事は我等が禱るときに「我等の主イエス、キリストに由て」と唱る辭の中に含まれて見ゆ。之を聖誓にては「彼れの名に由て」禱ると稱す。一箇の信者の單獨なる祈禱も、一教會の信徒の合併せる祈禱も此點に於ては全く均し。是たキリストに支として屬するに因て聽かるのみ、而して此事は彼れ自身の中保と眞に一致するかぎり然るのみ。基督の名を以てしたればとて一々の祈禱かならずしも、基督の名に由れる者にあらざることば、猶「二三入」基督教徒と自ら稱してあつたりたればとて必ずしも「基督の名のために」名に由て或は名を以て「集まれる」者にあらざるが如し（聖馬太十八章二十）。基督の名を若し適切に用ふべくんば毫も他の主義をまじふべからず。信徒が相集るところの基址若し——例へばユニテリアンの基督教またはアルビオンチャイナ Irvingites の基督教の如く——基督教に外來の私見を加へ或は之を減せる者ならば、是純ばら基督の名を以て集れる者にあらず、隨て又基督が其約せし如く來りて其中に在さんとを信じて望むべからず。基督が自ら立てたまへる一統教會を除くの外は、何物も純ばら基督の名を以て集まる者にあらず。是れ一統教會外の聖餐が其有効なるや否やを疑はるゝ所以なりとす。基督は——分離派の中においてすらも——箇々の信者に己れを與ふるを得たまふことは何人も之を然らずとはせず（否ます）、然れども分離派の



せる人々は自ら救はれん爲に日々其甘心の救贖者を呼もどして己れが爲に新たに不可思議の苦を受けしむるを以てなり。我等の中には斯る非常の價をばらひて其靈魂を拯はれんことをば肯んぜざる者多からん。我等の知らざる中に基督が其犠牲に由て我等のために嘗て成したまひし所の事を感謝の涙もて受くるは素より別問題に屬す、嚴かに且故らに聖壇に近づきて基督をして多少となく其救贖の苦を再び尋がしめんとするとは決して同日の談にあらず。

されば本犠牲を正しく観ずるの道は左の如けん。——基督は天上に於けると同じき狀にて聖餐に於て我等の前に實現し給ふ。彼は天にて自ら爲す所を我等をして聖壇にて彼に對して爲すことを得せしめ給ふ。基督は其勞苦の既に終れる者として恒に其處に坐したまふと雖ども、尙彼は「位にある祭司」にして（撒加利亞書六の十三）、常に其生命——嘗て一たび捐て、復どりかへし、爾後かさねて捐るを要せざる生命——を我等のために獻呈しおたまふ。彼が我等の手に授けたまへる此サクラメントを以て我等もまた然かす。我等は單に十字架を聖父の神に申すにあらず、亦活現する救世主の躰と血を神前に呈する也、彼は即ち十字架上に死したまひし者にして、唯一たび彼處にて我等のために挽回の祭物となりたまひし而已ならず、實に又常に「我等の罪の挽回の祭物なり、第に我等の爲のみならず、徧く世（天下）のための挽回の祭物なり」（約翰第一書二章二節）。此意味に於ては我等敢て言はんとす聖餐は挽回の犠牲なりと。是は基督が天にて己れを獻呈したまふと同じき狀にて然る者とす。本當に之を言へば、十字架上の犠牲（獻身）には幾たびも繰かへすの事は無く又これを續くるの事も無し、さりとして又單に之を記憶するの事のみには非ず。基督の活ける御身に於ては、カルバラ山なる永遠の獻身は何時も新なる事蹟にして、更に繰かへす

を要せず、又繰かへすを容さず。基督は其既往の苦難よりする無盡の功德を以て我等のために天にて己れを獻呈したまふ、而して聖餐の諸効果はことごとく是より出で来る。

### 第十七節

基督教にての祈禱はみな聖餐上の親交および獻身に基づけり。基督と合躰せるに因て我等は祈禱するの權を得、而して基督の功を戴いて之を實行す。此事は我等が禱るときに「我等の主イエス、キリストに由て」と唱る辭の中に含まれて見ゆ。之を聖書にては「彼れの名に由て」禱ると稱す。一箇の信者の單獨なる祈禱も、一教會の信徒の合併せる祈禱も此點に於ては全く均し。是たキリストに支として屬するに因て聽かるのみ、而して此事は彼れ自身の中保と眞に一致するかぎり然るのみ。基督の名を以てしたればとて一々の祈禱かならずしも、基督の名に由れる者にあらざることは、猶「二三人」基督教徒と自ら稱してあつたりたればとて必ずしも「基督の名のために」名に由て或は名を以て「集まれる」者にあらざるが如し（聖馬太十八章二十）。基督の名を若し適切に用ふべくんば毫も他の主義をまじふべからず。信徒が相集るところの基址若し——例へばユニテリアンの基督教またはアルビオンチャイナ Irvingites の基督教の如く——基督教に外來の私見を加へ或は之を減せる者ならば、是純ばら基督の名を以て集れる者にあらず、隨て又基督が其約せし如く來りて其中に在さんとを信じて望むべからず。基督が自ら立てたまへる一統教會を除くの外は、何物も純ばら基督の名を以て集まる者にあらず。是れ一統教會外の聖餐が其有効なるや否やを疑はるゝ所以なりとす。基督は——分離派の中においてすらも——箇々の信者に己れを與ふるを得たまふことは何人も之を然らずとはせず（否ます）、然れども分離派の



名を以て集る者はキリストの必ず来り現前せんとを期すべからず、却つて其然らざらんことを恐れざるべからず。

基督の名を以て禱することは、公けにもわれ私にもわれ、啓示せられたるキリストの品性および趣旨に飽くまでも合はざるべからず。聖アウガスチンの曰く、「我等は其主の規矩準繩に由るに非ずして求むる所の物は其主の名に由りて求むるに非ず」と。斯る用心は我等をして祈禱を苟くもせざらしむ。是れ我等をして我等が利害得失を審かにせざる所の事物を祈るときに若し可ならば與へたまへと言はしむ。我等が其由て禱る所の名「キリストの名」を衷心より感佩するやそれと同時に該の名は二つの方向に於て我等に完全の保證を與ふ。即ち一方に於ては我等に保證して曰く、我等の祈禱は——如何に熱心に禱るとも若し其求むる所にして我等自身もしくは教會もしくはキリストの名聲に害ある者ならば——言語のまゝにも機械的にも應驗をたまはること無かるべし。又一方に於ては保證して曰く、若我等の求むる所にして善くば必ず遂に獲らるべしと。斯く基督教の祈禱に制限を置きなればとて、是れ決して祈禱に氣力を失はする者に非ず、又之を一片の不活潑なる定數觀に陥らしむる者にもならず。却つて我等の主は熱心なる祈禱を鼓舞したまへり。キリスト自らゲッセマの園にて其聽かるとの疑がはしき時にすらも痛く哭きて涙を流したまへり、而して我等は聞く彼は「其敬畏によりて聽るを得たり」と(希百來書五章七節)。彼が若し御意にかなはし云々と祈りたまひし所は允されざりしかども、其祈禱は徒勞には非りき、否な惟に徒勞ならざりしのみならず、更に勝れる物を獲たまへり。斯く祈禱は單に人類の意志が神の聖旨に服するの事たるのみに非ず、是れ天父の智慧は我等のに千萬倍すと信じ、又其御力と

愛は其智慧のごとくに絶大なりと信じて、我等が子たるの心をもて之に自由に願望を吐露する所の者にこそあれ。祈禱は決して退いて其境遇に安んじ悶へざるをいふ者に非ず却つて進んで實地に神を然なくば棄ち給はん方向に働かしむる者なり。世間の事において然るが如く、靈界の事に於ても亦然り、神は己れの働をして我等人類の働によりて其方向を決せしむ。神が膏腹の邦土に藏めたまへる富源は其所有者の勤惰と巧拙にしたがひて或は開導せられ或は委棄せらる。恩恵の國(靈界)の富源もまた斯の如し。若し之を大いに活用し利導せんと欲せば、基督教徒は私にも公けにも禱らざるべからず、「聖靈に由て」禱らざるべからず(猶太書二十節)。聖靈に由て「和譯、聖靈に感じて」禱るは基督の名に由て禱ると相待つこと恰も車の兩輪のごとし。是すなはち一には熱心を以て禱るべきを示し、一には祈禱の神聖なるを示す者とす。

### 第十八節

ペテラスマは、洗淨の禮としては、是れ我等をして原罪の汚穢および羞耻を脱せしむ、又更生の典としては、是れ原罪の力に打勝つべき新生命を我等の衷に植ゆ。然りと雖も、

「大綱」に言へる如く、「性中の邪慝は新たに生れし人にも尙殘れり」。ペテラスマを受けたる人にも——其更生の功果著しかる者すらも——内部に罪の働あるを全くは免かれず、而して時に或は實際の罪に陥り、長く罪惡の圈内に彷徨せんとす。聖ヨハネの教へたる所にも此趣は有り。彼は「凡そ神に由て生るゝ者は罪を犯さず、蓋神の種その衷に在るに因る、彼また罪を犯すこと能はず、蓋神に由て生るれば也」(約翰第一書三章九節)と説きて、廢律論的なる放肆濫行(antinomian license)を排撃せり。罪は神に由りて生るゝの事と正常に於て善く相容ると曰ふが如き、若くは罪は更生者



にとりては無頓着の事たるを得と曰ふが如きは、聖ヨハネが断然排斥する所なり。却つて彼は教へて曰く、更生者は其の性の性質に負かざる以上は、罪は其人と水炭相容れざる者にして、其人  
が罪を犯す間は、是れ其の自性に悖りをる者とす。バプテスマを受けたる人の重て犯す罪は幾倍  
憎むべき者とす、是れ極めて其性質に悖る者なれば也。是故に領洗者が罪を犯したる時には、其  
挽回に果して何の設備ありや。

バプテスマは再びすべからず又再びするを要せずとのことは已に之を説けり。バプテスマを以て  
するキリストとの合躰は、其一たび與へらるゝや、凡て浄められんことを冀がふ靈魂を首より尾ま  
で、内も外も残る限なく全たく浄むる者なり。但し此觀念を其まゝに領會することは精神にとり  
て難しとす(容易ならず)。吾人は生命を度りつゝあるが故に、之を一日一日の件として一片一片  
に考へざるを得ず。是を以て、吾人は屢ちのれが罪に陥れるを見、良心に己れが有罪なるを感ず  
るが故に、バプテスマの洗淨を新たなる現實の事件として眼前に示されんことを要む。斯る恵を  
ば我等の主左の辭を垂れて之を約したまへるを見る、云く人は再び大水盤に入りて全身を濯ふに  
及ばず、而して全く清しと知るべし、然るも尙足の汚穢をば之を濯ぐを要せんと(聖約翰第十三章  
十節)。キリストは我等に命ずるに此の縦し幾分か長たらしく面白からぬとも慈悲なる役を相互に  
譲りて盡さんことを以てしたまへり、曰く「爾曹も亦たがひに足を濯ふべし」(同章十四節)。是の  
如く宣まひて基督は夫の時としては懺罪(Penances)のサクラメントと稱する者を——形に於てに  
は無けれども、實躰に於て——設立したまへり(\*下の註を見よ)。是れ新元素を適用する者にあ  
らず、夫の我等が由て以て始めて浄められたる所の者「バプテスマ」を我等の必要にしたがひて連

續して幾分か宛適用する者とす。是に縁て新たなる賜物の授けらるゝにあらざ、只バプテスマの  
潔淨を保ち且新たにするに在る耳。

(\*註) 通例人々ハ信ズラク、復活ノ夜ニ基督ガ爾曹誰ノ罪ヲ釋ストモ云々ト言ヒタマヘル語(約翰二十章二十三)即チ此  
らめんニ設立ナリト、然レドモ彼ノ語ハ此くらめんニテ其特別ノ禮典トスル所ノ力ヲ謂フト見ルチ一層其ニ近  
シトス、是等ノ語ハばてすま後ノ釋罪ノミナラズ、又ばばてすまノ釋罪ヲモ其中ニ含メリ、而シテ其レ自身ニアリテハ  
解罪ノ直接命令ヲ載スル者ニアラズ、

懺罪のサクラメントは如何なる行為に特に在る者なるかは未だ詳かならず。羅馬教の神學者輩は  
受領者の思想と行為に——縦や悉皆ならずとも、せめて幾分は——在る者と之を見做さんとする  
者に似たり。受領者の悔悟及び之が適當なる發表は該サクラメントの本躰を構成すと彼等は思ふ。  
此の如き説は不悔悟者に形式上の解罪(釋罪)を言わたすは無用なりとの真正なる而して善く福音  
の精神にかなふ意味を呈する者なるや論なし。然し乍ら此等の事をば擧る恩恵を受くるに缺くべ  
からざる資格と考がへ、解罪行をして獨り眞にサクラメントなる者たらしむることは、是よりも一  
層單純にして、且一層善く類例に適ふ者なるに似たり。懺悔告白を以て良心の重荷をおろすは安心  
の種ならざるに非ず、然れども權威を以て罪を解くのは即ち神の慈悲が來り働らく點なりとす。  
懺悔告白は人間の事なり、されど解罪は實に人間以上の事に係る。教會の役員としてイエス、キリ  
ストが解罪の權を附托したまへる人々(聖約翰福音書二十章二十三)は此權を己れの有として行用  
するに非ず、役事者としてキリストに代りて之を行用する也。彼等はキリストの使臣にして、只  
基督の聖旨に基づける條件を以て復和を與へんと宣布す。彼等が與へんとする復和なる者は單に  
教會の譴責を免ずるの事に冷々ど之を歸し去るべきにあらず、是れ正當に怒れる活神の大御前に



再び自由に敢然と近づくと得せしめらるゝの恩澤なりとす。且又此の解罪は單に純然たる内界の事にも非ず。其中には、ペテスマに於けるが如く、夫の洗淨の恩惠の眞箇に活動する者ありて存す、此の恩惠は是れ基督教會に蓄はへられある實にぞある。此活動が好結果を呈すると呈せざるとは一に受領者の性情何如んに依て決す、いづれの場合に於ても恩惠は必らず其處に存す。或る人々は言ふ、解罪は唯私かに一人一人に言わたす時に於てサクラメントたる力ある者なりと、然れども斯の如く推斷すべき十分の理由とは之れあるを見ず。其れ自身に於て之を言へば、

——恩惠の活動する點にては、——解罪は公にもせよ私にもせよ全く同じき者とす。若し然らずんば、公解罪を言わたすことを教師にのみ限るの謂れ無からんとす。其差別は之を受くるために用意する方法に存す。靈魂にして之を堅く自ら捉ふるの力だにあらば、一人一人に之を言わたすも千人に一時に之を言わたすも、其有効なることは全く同じかるべし。公解罪は或は私解罪よりも一層等閑に與へられ又一層等閑に受けられんとの恐もなきに非ず、然れども神は慈悲ふかし、想ふに等閑の信仰——其無知なるが爲に當時等閑なるが如き信仰——にては、眼前に必ず要する如き分量の恩惠をば之を賜はるに足るべし。

懺罪のサクラメントを若し狹義にて——其一形にて、私かに施す者として——考ふるならば、其必要といふ事につきては一切を包括するが如き規則を我等は提出するを得ず。凡て拯はんと欲する人々は罪を解かれざるべからず、凡て罪を解かれんと欲する人々は其力の及ぶかぎり懺悔告白せざるべからず。然し乍ら聖書には、固より神にも人にも罪を告白せんことを勸むとは雖も（聖雅各五の十六）、解罪の要件として教師に一定の告白をなせと云ふが如き確乎たる一般の命令を絶えて

與ふる無し。幾多の世代が間の經驗に由て教會は必要の場合に施すべき方法をば案出したり、然れども古代よりせる明瞭なる訓誨あらざるが故に、教會は之を天下一般のために齊く規定するの權なし。聖英教會はキリストが以て我等を釋き放ちたまひし自由を兩つの方向に於て其子どもの爲に保護す。即ち彼等もし神の前に獨り十分に罪を告白し、之に加ふるに又公禮拜における一般の告白を以てせば、私かに一教師に告白するよりも却つて聖行に進むに利なりと良心に信せば、何人も之を強ひて私告白をなさしむべき權なし。若し又之に反して私かに一教師にむかひて懺悔する事（私告白）を利なりと良心に感ぜば、何人も之を禁ずるの權なし。實に教義上の問題に至りては英國教會は一點の疑を遣らしめずと雖ども、實際の問題をば各箇人の判斷に任す。私かに一教師に告白するの事は益をなすよりも害をなすこと却つて多からんと思はるゝ場合おほし。然れども英國などに於ては、餘りに他の一方にのみ奔り過ぎたれば、私告白にして若し幾分か行なはれたらんに、許多の人には、特に男人には、大いなる利益なるべき歟。基督教徒の罪は獨り神と其人の魂との間に於ける一物には非ず、是れ我等はみな「互に肢なれば也」（以弗所書四の二十五）。彌強の獨立及び大丈夫然たる自恃の如きすらも、非常に莫大なる價をばらふに非れば買得られぬあり（但懺悔告白の風習かならずしも之を滅する者に非ずと雖ども）。

懺悔告白の用は指揮を含む者にあらざ、指揮は是れ全く別物なれば也。

### 第十九節

病んで死なんとする人々に油を抹する禮——抹油或は沃膏のサクラメント——は英國にては停止して用ひず、然れども「看視病」と稱する嚴肅なる式を以て之に易へたり。「看視病」



の起原を聖ヤコブの遺訓(雅各書第五章十四節)に歸するは精しからず。該使徒は既に行なはれたる良風を奨励したる者なること明かなるが如し。意ふに是れ必ず「手を病者につけなば即ち愈えん」といふ我が主の約束に基づける者ならんか(馬可十六章十八を見よ、又同書十六章十三を參看せよ)。抹油(沃膏)と按手は親密に相關係す、而して兩つながら俱に是れ祝福の強き且嚴やかなる形なりとす。一切の祝福には必らず幾分かサクラメントの存する者あるを見る。祝福なる者は是れ教會内に於て聖靈が是等の祝福を受くる人々に對ひて悉なく注ぐ所の者なり。斯る祝福の中に堅信禮を以て最大なる者とす。病者に油を抹ること又は病者に手を按くことは、固より堅信禮を練かへす者には非ざれども、堅信禮と同じき性質を分有す。是等が其目的として奇蹟を呈すべき者なりしとは思惟すべき道理を毫も有せず、若し然るべき者なりと言はば、諸の祈禱もまた然るべき者なりと謂はざるべからず、其本意は是れ身軀の健康を復するの事なりとす。之に附ける約束はいづれも無條件にて與へらるべき者にわらず、平愈は神の御目に最も便なりと見ゆる如くに或は與へられ或は與へられず。然れども必ずや小さき惠福の與へられざる處にては大いなる惠福の與へらるゝあり、而して聖靈は病軀を地上の生命に再び活かすことに引かへて反つて靈魂を勵まして死を迎へしめ、斯くして更に勝れる復活に赴かしめたまふ。抹油または按手の如き外部の行爲をして内部の恩恵を獲るに缺くべからざる者とならしむるは、是れ聖書の文字を強ひ解く者と謂はざるを得ず、此禮式の古代における由來の詳かならざる者あるに於ては、殊に以て然りとす。但し現行の看視病式をやるに當りて按手をもちふるは決して道に背く者とは謂ふべからず。

**第二十節** 施恩の要具中一切の基督教徒に残りなく當る者は以上に列擧したる所に止まる。其餘の二者中にありて按手禮には已に基督教會の使徒相傳たる所以の性質を講ずる時に論及したり。此には只該禮式が眞にサクラメントたる者なることを言ふを必要とす、是れ第に人が教職たる權威に上されたることを公然と認むる者たるのみならず、又た是れ其の職務に特別の賜物(charisma)をさづくる者なり。基督教會中にありて總轄の地位に任ぜられたる人につきては、聖パウロ之が賜物を稱して「能と愛と謙の靈なり」と曰へり(提摩太後書一章七)。聖パウロはまた同文章の中に教へて曰く、此賜物は受くる人に於て努めて之を養はざれば用をなさずと。然し乍ら「御ことば」とサクラメントは基督と教會とに屬する者にして、之を執行する人々の私有に非ざるが故に、正式に職に任ぜられたる人なる以上は之を施すに於けるの不忠信または不了簡は決して之を無効ならしむる者にわらず。固より其人は熱心を以て之が實地の功效を高め、或は不熱心を以て之を減らすを得ん、然れども決して本軀たる恩恵を減するの力なきことは猶これを創造するの力なきが如し。

**第二十一節** 結婚禮は以上の諸禮典とは二様に其趣を異にす。他の諸サクラメントは單に基督教の救世經綸に屬す、而して教會一般に關係す。結婚禮は然らず、其が教會に關するは只教會が其子どもの私しの福利と人間社會一般の安寧とに深く關心するだけの範圍に止まる者とす。結婚は太古の禮にして、自然界の一サクラメントなり。教會は之を祝福する而已、之を創造するに非ず。該禮典を執行する人々は即ち夫妻なり。夫妻たる者がパテナスマを受けて外より教會に



入るに當りてや別に新たに禮式を執行するを要せず、教會は彼等夫妻の關係を正當なる結婚と見做す。勿論一夫多妻の制度の下に住來れる者も一人より多くの妻を携へては基督に入るを得ず、是れ「二人のもの一躰となる也」とは教會にて認むる結婚の本義なればなり、されど其多妻の中に一人のこれる者は既に是れ真正の妻となれる也。然れども基督教の聖成——基督教が諸の生活を富しむる所の聖成——は結婚を骨髄にまで變更す。異教國に行なはるゝ一夫多妻には必ずしも罪とすべき者あるに非ず、之を基督教徒間に公認するは、是れ規定の姦淫を認可するの事ならん耳。異教の結婚は本來分離すべからざる者にあらず。基督教徒たる夫と妻は其相互に對するや飽までも夫妻にして決して他物たる能はず、法律に依て實行する天下の諸の離婚は唯神が合はせたまへる者を離さんとの虚托をなし得る而已。基督教の結婚は譬へば尙實地には離れざる二人の間における配合契約の類にあらず。彼等は「はや二人には非ず」(聖馬太十九章六節)。勿論其身は相融合するに非ず、然れども其間には身位の活ける合躰ありて存す、其合躰の親密なるや聖パウロは基督と教會の合躰を以てするに非ざれば譬ふるに物なしと思へり。結婚が其正しき進路を行ける處にては、此合躰は地に屬する物質上の合躰に超越するや遙かに遠し。其中に於ける自然的なる元素は神恩の立脚地とせられ、所乗物とせらる。聖靈の活動の領分内に入るに由てや結婚は無慾なる忠貞の恩(美德)、心が心に渾然として淨く灌注するの恩、相互に在りて生活し且相互の爲に生活するの恩を吾人に傳ふるの具となる。單獨なる生活の寂寥は緩められ、其缺點は補なはれ得て餘りあらんとす。

聖經に於て、及び一統教會に於て教ふる結婚は是の如くなれば、よしや教會に於て獨身生活の恩

(美德)を結婚の恩よりすらも高しと認むるとも、之を責るにマニキウス宗徒の禁慾主義を以てすべからず。責任を負ふを嫌ひ若くは嘲世的(犬儒的)に無頓着なるよりして結婚を避くるは利己の甚だしき者にして、基督教徒の深く恥べき所なれども、一層十分に神に事へ且人を益せんとし神を以て獨身の不自由を甘んじて取り忍びて受くるは亦是れ甚だ貴ぶべきの事なりとす。我が主は之を稱して僅少の人が天より「賦けらるゝ者」と曰ひ、而して受納ることを得る者は受納れて見よと宣まへり(馬太十九章十一、十二)。聖パウロは多分初より獨身なりしならんと思はるゝが、縦や然らずとも、少なくとも當時無妻なりしが、已に此賜物を「賦けられ」ありたれば、之を「更に善し」と稱して教會の人々に推薦す(哥林多前書七章二十八節)。



## 拯救の性質

恩恵ハ其目的ト方法トニ於テ一己一己的ナル者—選擇ハ預知ニ依ル事—預定及ビ人間ノ自由—恩恵ヲヨビ自由意志—神ノ召—悔改ヲヨビ信仰—感化—信仰ニ由テ義ト稱スル事—基督教徒ノ賜ハル保障—聖成—最後ノ堅忍

第一節 信仰は其が箇々の靈魂に當る時に於て始めて眞に一箇の福音とは成る也。我等もし今まで已に達したる點に止まるべくんば、我等は單に一種の學系、一種の哲學、一種の教會政法を描きたる者ならん耳。然れども神は是等の物を經て——教會とサクラメントを經て——箇々の靈魂に達せんことを目的としたまふ。神は單に人々を物體として待遇したまふに非ず。神は固より諸信徒を打て一丸となして基督において完全なる一致に合躰せしめんとは欲したまふと雖も、諸信徒はまた箇々別々にキリストの目に自家の價を有す、而して其價たるや極めて貴とし。使徒はキリストの贖罪行を論ずるにわたりてや、其全體のために成されたるを謂ふにも其部分のために成されたるを謂ふにも全く同むき語を用ふ、即ち一處には曰く、「キリストは教會を愛して其爲に己を捨てたまへり」と、他處には又曰く、「彼は我を愛して我が爲に己を捨てたまへり」と(以弗所書五の二十五、加拉太二の二十)。されど世界と人類と教會とに對する約束を見て初より大いに喜ばんには、幾層の想像を要するのみならず、又幾層の無私を要す。吾人をして尤も感佩せしむる者は神が吾人一己一己の必需と艱難とに深く關心したまふといふを明らかにするに在りとす。是すな

はち教會をして然か福音的ならしむる所以なり。教會にて人々を一人一人に求むる(救はんとて)は己れの爲にあらざ、彼等人々の爲にするなり。人々の靈魂を愛すること——即ち人々に告ぐるに神が彼等の事につきて感じたまふ所、および神が之を證せんとて爲したまへる所を以てせんと切に冀がふ事は則ち是れ基督教會の「標識」(note)なること夫の己に叙述したる四種の標識の孰れにも劣ること無し。如何なる恩恵が人々のために教會に善はへられたるかは、人々が之を自ら味はひて會得するまでは、殆んど慰藉にはならず、而して苦痛なることは却つて著るし。

されば神は唯に人々の需を満すべき物を基督にありて饒かに設備したまへる而已ならず、又人々を導きて其の設備を求め獲て之を善く用ひしむと云ふことは、福音教の一大「不思議」なりとす。神の恩恵は單に客觀的なる物象の形にて世に送られて取らんと欲する者の自ら來り取るに任せざるが如き者に非ず。是れ一には其臨まんとする人々を揀出す、而して又二には其持來す所の物を幫け受けしめんとて人々の衷心および性癖を感化することに從事す。實に我等は恩恵といふ名稱を其が靈魂上に及ぼす内部の働に殆んど限るを常とす。彼の美なる語は先づ單に寵遇を表す、是れ或は神子降誕に於て神が人類一般に對する新處遇法を正しく表出せんも知るべからず。然し乍ら其特有の行爲は人々にひとりひとり相關するに於て最も著大に見ゆ。如何に廣く涉れるにもせよ、神の恩は決して一同に無分別に下たる者にならず、固より一定の主義を按して動く者にして濫りに動かず——濫りに動かすならば神の恩たる能はずと雖も、必ずや其選べる一己一己の人々の境遇に應じて動く也。基督教徒の靈魂の歴史(經歷)は神の恩恵が之に對する處遇の歴史なりとす。恩恵の働く道は千態萬狀にして窮りなし、因て又靈魂の嚮導者は恩恵の密にして柔かきに易



ふるに粗き硬き削一を以てせざらんことを慎まざるべからず。靈魂は製造品の如くに造り出さるゝ者にあらず。然れども其歴史の大進路は皆同じ。聖パウロは有名なる大文字を以て之を總説せり、曰く——「それ神は預じめ知たまふ所の者を其子の狀に倣はせんと預じめ之を定む、此は其子を多くの兄弟の中に嫡子たらしめんが爲なり、又あらかじめ定めたる所の者は之を召き召きたる者は之を義とし、義としたる者は之に榮を賜へり」(羅馬書八章二十九、三十)。

**第二節** 右の要畧に依て考がふれば、恩惠の事業は其由來の如何に遠きかを察知せらるべし。是れ其人が始めて之を感じるやうに成れる時に端を發する者にあらず、否な其人が人生の舞臺に始めて現はれたる時に起る者にもあらず、基督教徒は先づ神に知られずして光陰の潮流上に泛び出で(世に生れいで)、然る後に始めて神の眷顧をひくが如き者にあらず。其潮流の未だ流れ始めざる前に、——神が彼の終に其人を生ずるに至りし諸勢力を未だ嘗て運轉したまはざる前に、其人は預知せられてありき。其人の言行が悉く預知せられてありしとは言はず(是も亦十分に眞ならんとは雖も)、其人自身が預知せられてありしと言ふなり。基督にありて神の精神に無始無終なる萬種の有ゆる可能創造中には、此人物あらはれてありき、——恰も此神聖なる目的を助成するを得る如き、此特別なる形の眞理を例表するを得る如き、此神愛の特別なる様態に應るを得る如き諸の賜物を兼たる人物早くも神の胸中に現前してありき。神は該人物を知しめし且之を嘉したまへり、而して之に眞實の存在を與へ、之を人生の實際鍛錬に服せしめんと決したまへり。神の施設の然らしむる結果として我等其人は終に生れん、又再び生れん、而して神がわれらに行なはせん

どて預じめ備へ給ひし善事を行なふに至らん(以弗所書二章十節を見よ)。

預知は其れ自身に於ては萬般の人事につきて悉く言ふを得べし、如何となれば一切の靈魂は神の創造に係る者にして、神は決して一時の刺衝に由て事をなしたまふ者とは思ふべからざれば也。但し預定となりて發する預知は萬人に齊しく當る者に非ず、是た少數の人につきて然るのみ。斯る預知は或る特別なる目的を嘉納するの預知なり、而して神をして此等の人々と他の人々を甄別せしむ。斯の如き人々は是れ聖パウロの語に謂ゆる「恩の選」(羅馬書十一章五)なりとす。按ずるに、神の恩惠は人々を簡揀擇する者なること明かなり。一切の靈魂は神の愛したまふ所なりとは雖も、「萬人が救を受け眞理を曉るに至るはまた神の望み給ふ所なり」(提摩太前書二章四節)とは雖も、神は萬人を悉皆一様に待遇したまふには非ず。自然の賜物——富、美、智等——につきて然るが如く、心靈上の事件につきても亦然りとす。世には大不平等ありて存す。選ばれたる人々は自餘の人々と其立脚地を異にす。神の預定に由て彼等は一般人類の共有ならざる特別の賜物を與へらる。彼等と偕に特權に與かる人々は數多きにもせよ少なきにもせよ、其選擇の眞實なることは毫も之がために増減する無し。或る國又は或る世に於ては、選まれたる人々其の人民の大多數を占めん(英國等における如く)。然りと雖ども、各箇の靈魂もまた無始より以來神の特に顧念して選びたまへる者なることは、宛がら聖パウロ時代のエペソまたは羅馬に於ける一握の人衆中の一なるが如し。

勿論其差別は廢律論者が想像する如き者にあらず、——即ち是れ決して選ばれたる人々は他人にありては罪と見做るべき所の件々をも無難に行なふを得ると云ふが如き者にあらず、如何となれ



ば神は何人にも惡をなすの免許をたまはざれば也(シラクの子の智慧の書 Ecclesiasticus 第十五章二十節)。否な聖生活をなすの途すらも彼等のために特に平坦にせられたるに非ず、却つて屢々遙かに險阻にせられたるあり。其差違は全く靈なる特權に係る者なり、而して其特權は現在の特權なり、未來の特權に非ず。新約書の一般用法に係れば、地上に於て教會に入る人々は皆これ選ばれたる者なり。此「選ばれたる者」といふ文字は、福音書中二三箇所を除きては(斯る場合には前後の關係によりて意義明白なり)、決して彼の最後に選拔せられて天國の快樂に與からしめらるゝ人々を謂ふ者にあらず。夫の福徳が彼等のものと成る前に忠誠なる努力を以て彼等は其「召されし事」と選ばれし事とを堅う「せざるべからず」(彼得後書一章十節)。彼等が「神の預め知りたまふ所に循ひて」選び召されたる事件をば聖ペテロ之を稱して「福音に順がふの事」とよび「イエスキリストの血を灑がるゝの事」と曰へり(彼得前書一章二)。是すなはち彼等は基督敎徒なりと曰ふ也。此物は既に彼等のものとなれり、若し正しく用ひなば、是れ永遠なる拯救の保證物たる也。神かくのごとく其造りたまへる人類の中に區別をたてたまふ事、——すなはち人々の己に證明されたる功績に基づけるにも非ず、人々の功績を先見したる明に基づけるにもあらず、全く神の絶待なる無上の聖旨に基づける如き區別を立てたまふ事——若し少しにても不公平と見ゆるならば、第一に先づ記憶せざるべからず我等は未だ此處置の結果を悉く見るに至らずと、且夫此處置たるや或は終に必らず大いなる特權を有する一團の集合體を経て人類を利益するの最上良法たらんも知るべからず、是れ選ばれたる人々の目的は自餘の人を其特權より除かんとするに非ず、其達し得るだけ多くの人に之を推擴めんとするに在れば也。神の選民は、舊約の下におけるが如く

又新約の下に於ても、單に彼等自身の利益のために選ばれたる者に非ず、亦萬人の利益のために選ばれたる者なり。聖ペテロの曰く、「爾曹が選ばれたる民たるは爾曹を召して幽暗より出して其異光に入れ給ひし者の徳を顯はさんが爲めなり」と(彼得前書二章九節)。世界を拯ふこと若し歴史的なる手段を以て成さるべかりしならば、恐らくは此の外に施し得べきの道なかりしならん。但し是は免まれ角まれ、左の事を考がへなば、選擇(神に選ばるといふ事)といふ敎説の無慈悲なるが如き觀はせめてや柔がん軟、曰く選擇の眞對は排斥または棄絶に非ず、只これ看過のみ、而して多分これ一時の看過のみ。人類は二つの階級に分たれし者にあらず、即ち僅少の人々は永樂に定められ、大半の人々は刑罰に定められたる者なるに非ず。其僅少者の特權は、今や眞實にして且確乎たる者にはあれども、其が彼等のものたるは試験のため而已、彼等に由て他人これを獲んとす。

第二節 選擇と預定との間に濶き分界線をひかんと從來試みたる者ありしが、然のみ觀るべき功なかりし。斯る嘗試は神の無始永遠なる目的(經綸)を人間の自由と調和せしめんと欲するの情より起れり。想ふに吾人が今日の智力を以てしては此等二者の如何に相容るゝやを明らかに説くことは難し。是れ有限物と無限物とを調和することの困難なる單に一例なるのみ。先づ今日にありては吾人は例へば光陰(時間)と永遠(無始無終)との如何に相會するかを知らず。通例もへらく永遠 eternality は光陰に先だてる一状態或は一連續にして、光陰の竭くる時再び始まる者なりと。併し乍ら是たゞ永遠を再び光陰に約し、神の生命を吾人の生命と同一視する者のみ、其異な



る所は只前者をして其源を幾層遠くより發せしむるに在るのみ。又神の全能(無所不能)といふ我等が觀念も甚だ粗なり。我等は動もすれば謂へらく、全能なる者は決して障たげらるゝを得ずと、即ち論じて曰く、神は萬事萬物を其手に握り、且己れの心を完全に知りければ、必らず各細節目にまでも己れの意を徹すべしと。然れども神は單に抽象的の全能に非ず、神は全能の聖なり、全能の愛なり、而して聖と愛のために神は甘んじて枉げて人に従がひたまふ、枉て従がふとは雖も、其最も障たげられたりと見ゆる時にすらも終に凱然として勝ちて出ゆかんといふことを確信したまふ。

茲に二種の眞理ありて互に相容れざる如く見え、而して其一是吾人の經驗以外にあり其一是吾人の經驗以内ならば、吾人は其近き者を損じて其遠き者を張大すべき權ある無し。吾人は自由あるを感ずれば、——今進んで論ぜんとする範圍内においては、——吾人は神の預定を宛がら吾人の自由を全く滅する者のごとくに解くべきにあらず。神の選民は單に機械たる者にあらず、預め設定せられたる件々を必然に且精細に止むを得ずして成就するが如き單に死機械たる者にあらず。彼等の自由は外見のみにあらず假作物にあらず。彼等は將棋の棋馬のごとく戯手の心と手のまにまに動く者に非ず。聖書が行爲の精神に重きを置く者は是れ吾人に斯る精神を慎しみ或は疎そかにする力(自由)あるを認むる者とす。誠命といひ、約束といひ、警戒といひ、皆神がみづから我等を自由なる有責任者と見なしたまへるを明らかにす。被預定者の言動もし全く無始より定めたる所の事を実行するに止まるならば、神が彼等の失墜を怒り彼等の悔悟を喜びたまふことは、吾人にむかひて全く意味なき者となりをはらん耳。

是故に神の預定たるや其吾人が終極の運命に關するだけ、絶待的なる者にあらず、對待的なる(contingent 偶然)者ならざるべからざるや蓋し明らかなり。上に論じたる如く、聖書にて預定を教ふるは實際の目的に供する者にして、理論に供する者にあらずれば、未來に關するよりは寧ろ吾人の現在に關する者とす。恩恵の生命が榮光の生命に進むと否やとは一に我等の勤惰に依て決す。我等の見得るかぎりについて言へば、神の預定は破らるゝを得べし。但し斯る思想は、恐肅の至りなりとは雖も、決して預定の教説をして一切の力量と慰藉を失はしむる者にあらず。否な決して然らず。神の預定もし絶對的なる者と斷じ得べくんば、我等は被預定者の群中にあるか然らざるかと常に感はざるを得ず。世間の基督教徒中には——特別にも其發端に於ては——敢て我は被預定者なりと自ら斷定する者少なからん、且つ然か斷定するは身に益あるよりは却つて害ある多からんとす。然れども我等もし聖ペテロ及び聖パウロの教ふる所にしたがひ、而して凡てペテスマを受けたる者は選ばれたる者、預定せられたる者なりと信するならば、最後の結果は未だ明らかならずと雖も、吾人は實に言ふべからざるの感と望を受く。最も弱き基督教徒もまた信するを得ん我は自家の僭妄により又は朋友の誤れる親切によりて、猥りに聖境内に突入せる者には非ざと。彼が今在るところは神が彼を置きたまへる所にして、又是れ神が無始よりして彼を置かんと定めたまへる所なり。彼れの薄弱なることは神恩の力の大なるを示す者にして、即ち是れ彼が選ばれたる所以の道理なりとす。神若し其の明察なる選擇を以て幸ひに彼を揀んで其御子の國に榮進せしめたまひたらば、容易に復これを棄て或は逐ひたまはじ。基督教徒は神が己れ(教徒自身)に對する永遠不易なる眷顧を其受けたるペテスマの中に表出せられて見るなり。基督教



徒みづからの身は、今や此世の鍛錬の浮沈苦樂を通りつゝあれども、實は神の生命の金剛不壞なる者に連なりてぞある。神その僕にむかひて種々に心を變へたまはんことは、——其僕が自ら先づ全く神に背きたるに非ざれば、——決して思想すべからず、決して有り得べしとは思はれず。神は其御心を彼に留めたまひたれば、容易に彼を手ばなし給はじ。或は嚴しき手段をもちひ或は緩き手段を用ひて、神は其人を引とめんと力を盡したまふべし。是に於てか其人は、單に己れの弱き意志のみを考がへたらば速かに失望落膽せん者なれども、茲に亦他の遙かに強大なる意志ありて我みづから劣らぬ關心を以て我が救はれんことを深く慮かりたまふと憶ふ事によりて、毫も僭妄なる者となるの恐なしに鼓舞せらるゝことを得るなり。

#### 第四節

無始より我等を預知し我等を選びたまへる「恩恵」はまた我等が遂に生れ出たる時にも我等のために活潑に運動周旋す。然らずんば我等のために不利はなはだしからんとす。初に我は論じて曰へり人類の意志は全然自由なる者には非ずと。否な造物主の本意にしたがひてすらも決して是れ無制限無條件なるの意味に於ては自由なる者にあらず。アダムはエデンにて意志の自由をもてり、然れども其自由は單に人類に屬する範圍内——而も其境界に應ずる範圍内——に限りぬ。然し乍ら其範圍内にありては眞に自由なる者なりき、——其意たるや即ち人類の正當なる意志の運用には内よりも外よりも毫も不自然なる、法外なる檢束なかりしと云ふに在るなり。如何となれば、外にありては、百事百物ごとごとく彼が一切の力を健全に幸福に抽出するの用に供せられたり、内にありては、彼が其周圍の事物と全く符應するを碍ぐべき混亂絶て存する無し。

然しながら人類はその力を妄用したる時には、己れの構造を破り、己れが周圍の百物に對する關係を損じたりぬ。是に於てか人類は己れの進歩を補佐すべく定められたる物象の權下に逆に服従する者となり、而して其元の立脚地を恢復すべき力の今や乏しきを看いだせり。彼が墮落せる性質を嗣ぐ人々は固より或る意味に於ては尙自由なり。彼等は言動する時に、決して己が意に反して言動せんことを無理に強らるゝ無きを知覺す、實に斯る無理の強制をば彼等は最後に至るまで常に之を斷然として排斥する也。力強き壓逼の或は彼等に蒙るありて彼等これを防ぐこと能はざるを感ぜん、然れども終には——縦や之に異なる言動をなさんと欲せしにもせよ——必らずや彼等は自意に言動す。即ち彼等は——或は遺憾ならんも——其壓逼に服する也。此意味に於て彼等は自由の言動者なりとす。然し乍ら是れ眞の自由を構成する者にあらず。墮落したる人々の自由は只病める者の自由のみ、健かなる者の自由にあらず。健全なる人心には忌はしかる物も彼等「墮落せる人々」の意には飽までも慕はしく見えて、之を拒む能はず。彼等が自意に之を選ぶるときには、是れ己れの性質に循がひて事をなす者とす、如何となれば逆性の件今や順性の件となりたれば也。壓逼する大誘惑——アダムがエデンにて其未だ腐敗せざる性質の健全なる天性に加ふるに夫の常に現前する神恩を以てして立どころに排ぞけ得たらん所の者——今や直ちに其子孫（此の潮勢を防ぎ止むる能はざる如く又防ぎ止むるを好まざる人々）を壓倒す。

聖アウガスチンが駁倒したる大功顯著なるペラジウスの説も、其初は殊勝なる志を以て端を發したり。該説は勇壯進取的なる常識的（情理的）道德の名を以て退守的道德に抗辨せんことを目的となしぬ、即ち謂へらく正統教會の道德は奮勵努力を勧めずして却つて人心をして退いて天來の聖



成に専ら倚頼せしむと。ペラマウスの説に依れば、恩恵なる者は、人身内においては良心、自由意志等  
 まにまに義となるを得ると断言せしには非ず、只恩恵を自然の稟賦等と混同するが如くに解き去  
 らんとせし而已。ペラマウスの説に依れば、恩恵なる者は、人身内においては良心、自由意志等  
 の稟賦に在り、人身外においては眞神の性質律法等の啓示に存すと云ふ。此派の道德學者輩は夫  
 のアダムの墮落より生ぜざる生れながらの(遺傳の)腐敗てふ者を認むるを拒み、人々に奮勉努力し  
 て自ら功を立てんことを勤めて曰く、神が已に人類の力の内に入れたまへる物を行なはんとて徒  
 らに多量の恩恵を降るべからずと。此の粗雑なる形に於てはペラマウス宗は駁倒すること難きに  
 ならず。然れども之が相續者たる所謂半ペラマウス宗の認見を矯すことは幾層困難なりき、而し  
 て此後者の宗説は今日にいたるまで基督教會の中に其跡をといむ。半ペラマウス宗徒の説に於て  
 は人性の腐敗を過小することは過小すれども、全く之を無視するには非ずして幾分か之を認む、  
 而して又恩恵につきても其眞正の定義を採納す。然れども該宗徒は固く主張して曰く、いつれに  
 もせよ人類には尙多くの美質残りをれば、自ら進んで神を中途に迎ふを得と。即ち謂へらく、人  
 々は神の補助なくしては獨力にて義者とならんことは能はざれども、尙奮て功を奏せんことを冀  
 がふべく、而して其力を盡すべし、然すれば神は恩恵を賜ひて其努力を賞したまはん。曰く人々  
 は恩恵を獲べき途に自ら出るを得、——善行の卑き程度を自力にて行ひ、漸次に功を積み以て遂  
 に賞功の大恩(我が大綱第十三條にて排斥したる句)に與かることを得んと。  
 之に反して一統教會にては、聖經にしたがひ、又深遠なる觀察にしたがひて、主張して曰く、善行  
 を爲さんとの意志が胸中に始めて萌すは即ち神の恩恵の然らしむる所なりと。固より一統教會

はカルビン宗に於けるが如く然か人性の腐敗を非常に大いなりとする者にならず。人類の内心に  
 は不和の存するありて、或は此或ひは彼と兎角に私慾に傾く癖ありとは雖ども、尙ほ人心には若  
 干の良元素ありて、正しくだに之を用ひなば必らず人々をして高貴の域に進ましむとは、是れ一  
 統教會に於て認むる所なり。然れども活かす靈の捫はること有るに非ざれば、其高貴なる元素は  
 正路に活動するに由なし。最も善くとも人類の意志は其周囲の百物を全く離れて獨立にしては取  
 捨を縱まにする能はず、又は其實際に見る所の事物が指示せざる如き幻影を戀ひ慕ふことも能  
 はず、是故に人類の意志も善を欲すべくんば、善を之に示さること無んばあるべからず。人  
 類と其世界との現狀に於ては、善をば十分の活潑と堅忍を以て示さずんばあるべからず、是れ彼  
 旁よりして靈魂に加はへらるゝ壓迫を少なくとも打緩めて之に運動の好餘地を與ふるが爲なり。  
 即ち恩恵は反對の壓迫を人々の意志に加へ、之をして誘惑に押流さるゝを免かれしめ更に又之  
 をして善事を希ふを得せしめずんばあるべからず。恩恵の賜は各々之を適當に用ふるや更に又新  
 しき賜物を招くの基となるべしと云ふだけは、半ペラマウス宗の説も正しとす。神は「恩恵に應へて  
 恩恵を與へたまふ」なり(約翰傳福音書一章十六、和譯、恩寵に恩寵を加へたまふ)。但し神が斯  
 く我等に與ふる所の物は即ち神自身の賜物なり。試みに其連環を推して最も古き處にまで溯ぼ  
 れ、必ずや其最も古き者も其最も新しき者と同じく神より出たる者なるを見ん。人類は恩恵の前  
 芽をだも自ら買ひ又は幸よすべき功を毫も有する無し。有すと思ふは是恩恵といふ根本思想に全  
 く反する者とす。債または功といふ思想ほど恩恵てふ觀念に悖る者はあらず。パウロ曰く「若し  
 恩に由らば功には由らざる也。否れば恩は恩たらず」と(羅馬書十一章六節)。恩恵の本色は即ち



ち其が純然たる神の慈悲より發して毫も義務もしくは必要といふの念をまじへざるに在りとす。斯の如く神の恩恵は我等をして正しき所の事を爲さんと欲するを得せしむるに要することの大なるは、其我等をして之を欲する時に之を爲すを得せしむるに要するに異ならず。吾人が善く事を成したる時にも敢て之を己れの功とせずして、眞誠の感謝を以て其榮を神に歸したてまつるは、眞實の謙退なり、虚偽の謙退にあらず、正當の歸榮なり、偽善の諂諛にあらず。吾人は謹んで其功と榮とを神に歸したてまつりて曰ふ、「主よ、我等の行なひしことは皆爾の成したまへるなり」(以賽亞書二十六の十二)、又曰ふ、「神はその善き旨を行なはんとて我等の裏にはたらしき、我等をして志をたて事を行なはしむ」と(腓立比書二章十三)。聖行をなさんとの願望を注入する者は謂ゆる「先驅の恩恵」なり、而して聖行の願望に眞結果を呈せしむる者は謂ゆる「協力の恩恵」なり。是の如く首より尾にいたるまで、凡そ正しき業をなすの事、及び凡そ善き人物の成る事は、悉く神の功なりとす。

然りと雖も、恩恵は決して其人の自決心を滅し去る者にあらず。恩恵もし人々を強ひて何事にまれば止むを得ずに爲さしむるならば、全く是れ恩恵の恩恵たる目的と相悖ると謂はざるを得ず。何となれば神の目的は單に人々をして正しき事をなさしめんとするに非ず、又人々をして聖潔なる人物とならしめんとするに在れば也、然るに聖潔なる人物といふ者につきて吾人が形づくりに得る思想は只必ず其人を以て自由に聖行を選ぶの力ある者となすに在り。強ひられて聖行をなすは只だこれ虚假のみ。固より恩恵は時としては單に道德上の平稱を回復するに止まる者にあらず、タルソのサウロの場合に於ける如く、又人をして「刺ある鞭を蹴ると難からしむ」(使徒行傳二十

六章十四)。大有力の恩恵は能く甚だ人を壓するあり、其慈悲なる決行においては屢殆んど強迫に類す。然ども恩恵には其到る克はざる經界の存するあり。其性質上恩恵は敢て人々をして抗すべからざらしむるが如きことをせず。結局は其人自身にて一々去就を決し、或は善道に或は惡道に進む者とす。

第五節 先驅恩恵 (preventing grace) の第一の運動は天歩攝理 (Providence) の運動と區別するを得べし。前者は預備の領分にありて、先づ能く人々をして恩恵の特色たる賜物を受くるに堪ふる者とならしむ。基督が「父もし引されば人よく我に來るなし」(約翰第六章四十四)と宣まへるは此事を指したる者と從來思はれたり、但し此にありては我等須からく小心に了知すべし基督は決して人々の努力(自力の奮勵)を無用視したまへるに非ず、惟人もし我に來らんと欲するを心に感ぜば、是やがて御父の神が其人を拯はんとて既に眷りみたまふを證すと聽衆に諭したまへるのみ。斯の如く御父は或は人々をして基督教徒たる父母より生れしめ、或は氣風教育及び訓練に由り、或は憂苦および損失若くは歡樂及び愛慕(是れ人々の心をして感じ易くならしむれば也)に由り、或は罪に陥ることをさへ許して(是れ人々の胸裏に繫縛の念を創造し解脱の願を喚起すれば也)、自然に人々を基督のかたへ導びきたまふ。而して靈魂上に其機の熟するや神は公然と之を召たまふ。無始よりの選擇は實際の召となりて光陰内(此世)に顯はれ來る。人魂の歴史上何れの時に其召命は發すべきかは惟神ひとり知たまふ。其人は(前に言ひし如く)之を招致することは得ざれども、其舉動如何によりては或は之を速め或は之を遅むることを得べし。且又召されたる後



にても其人は久しく之を知らずに居ることもあらん、之を疎そかにすることもあらん、或は之に敵して戦ふこともあらん。正常の場合において、基督教國にありては、神の召命は人々が未だ其意味を了る力あらざる幼稚の時に已に來る也。許多の人にとりては召命といふの念は最も幼なき時にちけるの記憶を追回するの事と混ず、而して年を重ねるに隨ひて靜かに歩を進む。召命を幼稚の時に蒙りたる人々の中には成長の後にはじめて始めて之を感じる者も多し、而して彼等は召命が遙か前に來りしことありとは毫しも知らず。又或る人々のごときは生涯これを知らず、中には臨終に始めて之を聽く者もあらん。召命の來ることの徒然ならざるが如き人々の中にありても、其これに應ずるの遲速は千差萬別ならん、但し恩惠の初果は其召命を未だ明らかに聽かざる前にも與へられんと雖も、人々は其召命に明らかに應ずることを始むるまでは、未だ恩惠の生活(わがた)を度りつゝある者とは稱すべからず。

第六節 靈魂の中に必需といふ念を創造し且靈魂をして供給の源を仰望せしむるは、是れ恩惠の第一功業なりとす。此等の二事は悔改と信仰の發端なり。

悔改は唯に行爲の變化たるのみならず。是れ感情と精神の變化に基づける行爲の變化なり。是れ今罪と感ぜらるゝ所の者を捨つるの事なり。非を爲すをやめ是をなし始むるのみにては未だ足らず、又罪ありといふ念を懷きつゝ、其既往の非を憂へ、其尙内心に惡念の去らざる者あるを悲しまざるべからず。且又其悔改をして善なる者たらしめんには、其憂悲の精神をして獨其罪人が自ら己れの苦樂を慮かるの惡念中のみ在らしむべからず、又彼が其同儕人類に禍害を蒙らせた

りとの思想中のみ在らしむべからず、須らく之をして我は神を愛へしめ神を怒らせたりとの知識中に在らしむべし。力の及ぶだけの賠償をなすの決心、及び神と(若し可なるあらば)人とに己が罪狀を悉く告白するの甘心、此二者(satisfaction & confession)を以て切愛無私の痛恨——謂ゆる悔恨 contrition ——の成果とせざるべからず。此等の者——悔恨(良心の責)、告白(懺悔)、賠償——は即ち悔改の初中後三部分なりとす。

是の如く、信仰は單に智力を以て或る真正の陳説に認諾を與ふるの事たるにあらず。例へばキリスト我等のために死したまへりとの事に同意を表するのみにては未だ十分ならず。拯救に至るの信仰は靈魂が一活靈知者を頼むの事にこそあれ。人魂は其已に知れるが如き事實に鼓舞せられて確信す未知の事實は既知の事實と步履をひとしうすと、而して其神の深く信頼するに足る者なることを感ず。且又其信頼は單に消極的に退いて守る者なる能はず、亦必ずや進んで其行爲に影響を及ぼさざるを得ず。悔悟が心中より發して言と行とに顯はるゝ如く、信仰もまた然り。凡そ人々をして「口に認らばして救はる」に至らしめ(羅馬書十の十)、又「慎しみて善功を務めんことを欲せ」しめ(提多書三の八)ざる者は信仰にあらず。信仰は進んで公然と神に憑頼するの事とこそは稱すべけれ。

信仰と悔改との間には必らずしも一定の先後あるに非ず。時としては信仰先づ顯はれ、時としては悔改先づ顯はる。此等二者は生涯相携へて並行す。悔改は信仰の進むにしたがひて恒に益々深められ、信仰は悔改の度の増すに隨がひて益々強めらる、孰れの名稱も一定の分量を表する者にあらず。悔改にも信仰にも淺深高下の程度は窮なし。靈魂が是より下にては拯はるゝ能はずとい



ふが如き最小數として分量上の界限を聖書の中には示したる者あること無し。要する所の者は只信仰と悔改は徹頭徹尾誠實なるべしとの事のみ。若し誠實なるだにせば、其今の分量は如何に少なくとも、將來の發達はことごとく此中に籠れり。若し芥種の如き信仰あらば汝等に能はざることを無かるべし」(馬太十七の二十)と基督が宣まひしは、強がち最も僅少なる信仰を以てして斯く奇跡を行なひ得べしと謂へるにあらざ、其信仰が漸々に増して遂に大奇跡を行ふを得るに至るべきを謂へるなり、是れ真正の信仰は必らず増大する者なれば也。是故に我等は拯救を得べき信仰は何れの時に於てなりとも特別の殊勝なる信仰——愛を以て富したる信仰——ならざるべからずと曰ふを得ず。何れの場合に於てにもせよ、該疑問に對するの答は其靈魂が今までに得たる機會何如といふに依て決する者とす。

### 第七節

悔改と信仰が其自覺自由にして活潑なるの點に達したる時には、其機を稱して感化conversionと曰ふ。感化(コンヴァルション)とは靈事に醒むるの事とは全く同一なるに非ず、如何となれば時としてはエダの場合に於ける如く、感化は無くしても眞に醒むることはあり、又然のみ醒むる事なくしても眞の感化は屢ある者なれば也。感化の本體は意志が眞に活動して自己と世界とより轉じて神に堅く向ふに在りとす。人は皆惡に傾むくの僻を以て生れ、其面を逆に背けてをるといふこと若し眞ならば、生涯の中いづれの時にか自意を以て其方向を變ずること無くんばあるべからず。然し乍ら感化は萬人において皆一様ならざるべからずと思ふが如き、而して放肆と罪惡とに生長して分別の齡に達せる人々の身に起る所の者を擧げて之が正常の標式とな

すが如きは、誤まれるの最も大いなる者なり。感化は人々の氣風と人々の境界とに循がひて、實に百人百様なる者とす、——或は幼稚の時に起らん、或は臨終に起らん、或人においては旭日が知らず識らずの中に水平線上へ昇るが如く起らん、或人においては七顛八倒の苦を経て俄かに起らん。但し最も俄然たる場合に於ても、隱に準備は行なはれつゝありき。神は其恩惠の國に萬殊の經驗を用ふるを要したまふ、されば我等は何種の感化をも他種の感化より貴き者とは見做すべからず。只通例最も快活に最も激厲に靈事——有罪、赦免、來らんとする審判、十字架の意義等の靈事——に醒めたる人心は、世界を福音化するに最も功效をほき具なりと我等は知る也、而して自餘の被感化者は建徳の業に最も有用なるを屢とす。

感化と更生(Regeneration)とは混同すべからざる者なること已に上に説けるが如し。是等二事の間には毫も必然の關係ある者にあらず。誠實にして且深達なる感化は舊約の天地にも起りぬ、否な彼よりは幾層不完全なる宗教界にも亦是れ起る者と我等は殆んど曰んとす。然れども更生は基督教に限れる特權なり。感化は聖パウロの身上に於ける如く更生の業に或ひは先だん、若くは聖フランシス其他幼時にペペスマを受けたる人々の身上に於ける如く更生の業に或ひは次がん。更生は形以上の變化にして人の性質を一變す、——感化は道徳上の變化にして、人の行狀を一變す。其一人は人に與ふるに新しき能力を以てし、又其能力を働かすべき領分を以てし、其二は何等の能力にもあれ凡て其人が具ふる所の者に供するに新しき方向を以てす。固より更生(吾人をして神の子たらしむる者)は感化(吾人をして善人たることを始めしむる者)よりも貴き恩澤なれども、更生は感化の先だつ所となり、或は伴なふ所となり、或は次々所となるに非ざれば、毫も



人に益なからんとす、否な益なきのみならず、却つて其人の罰を重くせんとす。之に反して感化は、機會の乏しきが爲め、或は無知および僻見のために、此世にては或は更生の冠冕を戴だかせられざらんと雖ども、未來に於ては真正の救にあづからんこと疑ひ無し、是故に此等二者の中、其本質の輕き者却つて靈魂の福利のためには肝要なる也。バプテスマの無き感化は人をして宛がばバプテスマを受けたる者のごとくに既領洗者と同一の地位に立たしむる者にあらず。感化なきのバプテスマは人をして宛がら感化せられたる者の如くに被感化者と同一の地位に立たしむる者にあらず。感化に許すに其最も千差萬別なる状況および程度を以てしつゝも、我等は敢て斷言せざるを得ず。感化は其最も廣き意味に於て是れ吾人の拯救に缺くべからざる者なりと。勿論キリストが此の如き辭を用ひたまひしは其辭が近今の宗旨上などに得たるが如き特別の意味に於てせしに非ず、但し基督が左の語を垂れたまひしは凡て人々が神に對して未だ正しき向背を呈せざる時に何時にても適用すべき原則を以てしたる也、曰く——「若し感化せられて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ」(馬太十八章三節)。

第八節 稱義(義とする事)は、聖書の中に用ひたる語の本義に依れば、是れ神が人々を罪なしと明言したまふの事とす。是れ赦罪よりは少なくて、同時にまた赦罪よりは多き者なり。罪を赦されたる時に感ずる愛慕の元素は此語(稱義 Justification)の中にあらず、然れども同時にまた是(稱義)は罪の廢棄および解脱を更に幾層明らかに描出す。此語は裁判上の語にして、是れ神が大審判官たる資格にて人々の靈魂につきて下したまふ所の意見を表す、是「罪に定む」condemn

といふことの反對なり。神は人を義と稱したまふ時には無罪と宣告したまふ者とす。羅馬教の神學者たちが稱義の理由について我等と所見を異にするならば、主として是れ彼等が相傳的に此語に與ふるに我等のとは異なる解釋を以てするに由る者とす、是れ彼等は實際此語を聖成 Sanctification と同一視すれば也。此事すでに此の如くなれば、彼等が其之を與ふる所以の理由につきて我等と其説を一にせんことは到底期すべからず。然し乍ら遂に兩方の和解を來たすに最も望あるの方法は、聖書の中における本語の明らかなる意味に固着して離れざるに在らん歟、然るに聖書の中に於ては此語は人が由て義なる者とせらるゝ步履(方法)を毫も説ける無く、惟人を義なる者と認むる行爲あるひは心狀を説けるある而已。然りと雖も、正義なる審判者は人を其義ならざる時に義と認むることは恐らく能はざらんとは、是亦公明正大に認識せざるべからず。是故に神もし人を義とする(聖書の意味にて)ならば、是れ其人は羅馬教會にて主張する意味にて義とせらるゝの行程上に先づ在りしに因る者ならざるべからず、——即ち是れ義とする働の先づ其人に注入せられたるに因る者とす。

論じて此に至れば、直ちに稱義の理由に接す。新約聖書中には、言ふ、我等は己れの信仰に由て、行に由て、言に由て、義とせらるゝ。此等の三事は人類の活動が思想言行の三種に約せらるる通例の區分に符應す。勿論右三者中の最も深き者は心の奥に隠れざる所の者なり、而して外部に顯はるゝ言と行は其が其人の心裏に運りつゝある所の者を眞に正しく表出する時に始めて道德上の價值ある者とす。此事は三者中最も淺き者、すなはち言に於て最も明らかに見ゆ。我等の主が衆に告て、「凡て人のいふ所の虚しき言は審判の日に罰せられざるを得ず、故に爾はその曰ふと



この言に由て義とせられ又其曰ふところの言に由て罪に定めらるゝ也」と宣まひしは、全く是れ其二三節前に示されたる理由に基かする者とす、云く「夫れ心に充るより口に言はるゝ者なれば也」と(聖馬太福音書第十二章三十四、三十六、三十七節)。此原則はまた行にも當る也。抑も行は内心の趣を驗すべき唯一の具なれども、其最も美なる時にても——少なくとも人間が審判者たるかぎりには——誤ること能はざる者にあらず。人々は唯に言を以て欺むくのみならず、又行を以ても欺むかん。其れ自身にては善美の行爲たらん者も、其慈善の行たると敬虔の行たると修身の行たるとを論ぜず、或は是れ傲慢もしくは偽善を覆ふの藪藪ならんも知るべからず。されば人もし聖マコノの教へたる如く其行に由て義とせらるゝならば、——若くは其行に由て罪に定めらるゝならば、——必ずや是れ其行の其れ自身に於る本来固有なる性質に純ばら由る者にあらず、又その之を爲すの精神に稽がふる所ある者とす。神の御目に人を義ならしむるが如き言や行を注入する精神は即ち信仰の精神なり。獨信仰に由て我等は義とせらるゝ、信仰に加ふるに或る他の別異なる又は反對なる品質——例へば羅馬書三章二十八節に言へる如き「律法の行」——を以てして、義とせらるゝには非ず。神の恩恵に由て眞心に宿れる信仰は忠實の行と言を生ぜずしては止む能はず、而して又神は我等が信仰に此活動の證あるや否やを見て我等を試みたまはん。之に反して、半ペラグラウス主義(上に論ぜし如き)にて爲す「律法の行」——即ち神と接がれて義とせられん爲に自力を以て爲す所の者——此等は唯に毫も信仰の徵證たらざるのみならず、却つて信仰の無きを示す者なり、而して之が爲に刑罰を招かんのみ、嘉尙を招くにあらず。是を以て信仰は正義の活動力にして、此力たるや、前にも言ひし如く、我等が神の前に義なる者

と算せらるゝ先に我等に注入せられんばあるべからず。是すなほち我等は自力にて事を正しうするを得るといふ謬見、若くは我等は己れの意思をして聖行の獨立自給なる源たらしむるを得るといふ謬見を棄つるの事なり。是れ我等をして夫の「神に立られて我等の義また聖また贖となり」とたまへる者にすがらしむ(哥林多前書一章二十)。吾人人類未だ嘗て墮落せざりしにもせよ、神と活ける交をなし、且悦んで神に頼むことは、我等の義とせらるゝに必要なりしならん。然るに今や吾人は墮落したる後なれば、此事は少なくとも均しく必要なりとす。但し我等の義とせらるゝは薄弱なる人の義とせらるゝ也、否な——唯に薄弱なるのみならず又實際に罪ある人の義とせらるゝ也。されば我等を義とするに要する信仰は單に神の品質に汎然依憑するの事のみにあらず、其中には亦己れの罪を認むる事、および其罪に對する神の審判に合同する事をも含む、而して基督が成したまへる贖罪行に其の力を盡して固着す。罪人は基督が十字架の上にて彼れの爲に成就したまひし所の事の性質を解き得ることは如何に少なくとも、基督我が爲めに死したまへりと信仰にて曉り、我が凡ての望は彼の一事實の中に横たはると信ず。罪人は即ち承知す我は如何に爲すとも我が己れの過を以て招きたる罪より我が靈魂を救ふ能はざりき、只基督と御父と聖靈(基督の業を活用する者)のみ獨り知れる方法を以てキリストは實に之をなしたまへりと。罪人は一も己れの爲に提供すべき者なし、——其罪を悲しむの心も、罪を告白するの事も、罪を贖はんとして爲したる所の事も、一として功とすべき無し、唯キリストが之を負ひて之が爲に其寶血を流がしたまへるの一事ありて提供すべき而已。キリストが罪を贖ひたまひしといふ念日々益々深く彼れの心に入るが故に、彼は自然に、毫も強ふることを須たずして、キリストとともに罪に死す、



是を以て罪は彼を制するの力を失なひて断滅に歸す。否な是のみに止まらず。聖パウロは拯救に達する信仰の要素として左の確信を呈出す、曰く神は主イエスを死より甦よみがへらしめたまへり(羅馬書十の九)。我等は過去の事實に絶るにあらず、死せる基督に取づくにあらず。我等が取づく所の者は一りの活る而して勝てる者なり、彼は唯に我等と我等の罪を十字架の上に思ひたまひしのみならず、又今も我等を思ひ、唯に我等の近くにいますのみならず、又我等の衷こころにいます也。斯の如き信仰は單に罪を驅ふの消極的なる功徳を有するのみならず、又基督の復活せる生命を獲得するといふ積極的なる功徳を有す。己れの功績に由て達したるには非れども、基督と眞に合體しつゝ、悦んで基督に順がはんと冀がふは、確かに是れ正義なる神が罪人の最大なる者をも義とすることを得たまふ一理由なりとす。且又神は信仰が完全の働をなすまで其人を義とすることを控ゆるを要せず。斯の如き信仰の極初發には有罪の念の全く消除したりとの認識ありて來り應ず、何となれば心中に働きつゝある彼の新精神は則ち將來の圓成を保證するの質なれば也。

以上論じ來れる所に依れば、稱義とパンテスマとの間には親密の關係ありて存するや明らかなるべし、時としては聖書中にて稱義を尙も後日に屬するの事と説けり、然る時には勿論是れ世末の大審判日を指して説ける者とす。時としては又之を稱して現在なる者と曰ふ、何となれば眞正の基督教徒の生活は常に屢々神の前にて檢閲に供せられ、而して神は常に同一の宣告を彼に下したまへば也、然しながら時としては又これ既往に於て嘗て一たび與へられし者と言はれたり。然る時には是れ信者が始めて基督に合躰したる時、すなはち「舊ふるが去る」時(哥林多後書五章十七節)に屬する者とす。聖パウロは生れながらの生活の汚らはしきことを叙べて後、更に之に加へて曰く、

「稱曹なまのうち前まへには此の如き者ありしかども、主イエスの名に頼り且我等の神の靈に由て滌はれ、また潔よきまり、又義となることを得たり」と(哥林多前書六章十一節)。此には彼はパンテスマの時を指せるや照々として明らかなり。稱義は大人のパンテスマに於けると同じく小兒のパンテスマに於ても亦をしむなく與へらるゝや疑がふべき理由ある無し。然し乍ら勿論小兒は分別の齡に達するに及んでや活動する信仰と自意の順從とに由て之を己れに全たうせざるべからず、然らずんば恐らくは其稱義を失なひ了らん。

第九節 福音預言者の曰く、「正義のいさをは平和、正義のむすぶ果は永遠の平穩と安泰なり」と(以賽亞三十二章十七節)。事の正常に於ては此事然りとす。然るにプロラスタント神學者たちは稱義の客觀的なる方面と主觀的なる方面とを同一視して屢々良心を感亂せり。時として彼等は「信仰に由るの稱義」とは宛がら靈魂が自ら己れの義とせられたることを感ずるを謂へる者のこととくに論ず。是れ大いなる誤なり、而して夫の屢々頑然と主張せらるゝ説、——何人も其義とせられたることを自ら知らずしては義とせらるゝ者なしとの見——に導びき至りぬ。既に指示せし如く稱義は神が人魂に對するの動作あるひは向背にして、必ずしも人魂は其向背の何たるを會得する者にあらず。幾百千の人々は神に容れらるゝやを大いに疑ひ且危ぶみて生を度かたると雖も、神の前には眞に義とせられてある也。斯る人魂はさりながら其特權の下に生活しつゝある者とす。聖パウロの曰く、「既に信仰によりて義とせられたれば、請ふ我等をしてイエス、キリストによりて神と和らがしめよ」(羅馬書五章一節)。人は憚る無く且謙りて神の御辭を信じつゝ、キリストの功業を



願みて心を安んずることを得、其罪をば悲しめども、尙身に纏はる者とはせず已に赦されて浄まれる者として悲しむを得るに於てや、上は幾層大いなる榮光を神に與へ、下は幾層容易に自ら聖行に進む者なり。其現在の状態に關して人は斯の如き安心立命を得ざるべからず。未來に關する安心立命は甚だ之と異なる者なり。

### 第十節

正義の種子を注入せられて神に義とせらるゝに適する者となるは即ち是れ聖成 (Sanctification) と稱する畢生の大歩履の端緒を開ける者とす。此に於ても亦 (夫の感化 Conversion) の場合に於ける如く) 嚴然たる定義に我等は束縛せらるゝを要せず、是れ此の語は新約聖書中に神學上に一定の價位を有する者にあらざれば也。新約書中には此語は時としては身或は罪をきよむるを謂ひ、時としては聖潔を認むるを謂ひ、併せて亦我が此に言はんとする意味をも含めり。我は此に之を聖人品の實際に形成するをを表する者の義に取らんとす、是すなはち漸々にキリストに似るの進歩的發達を謂ふ者とす。されば此觀念やがて是れ或る宗派人が由て以て之を獲んと求めたる間歇的努力とは背馳せる者とす、是れ彼等は之を宛がら更生の如き第二の賜物の如く見なし、其所謂聖靈のペンテコスタにして、一瞬に獲られ且保たるべき者の如く見做すを以てなり。勿論恩恵の生活にも特別の好機會は無きにあらず、斯る時機には、人々は——例へば退觀 (Retreat) 即ち幽居獨處して道を觀想するの時) の際における如く——自ら奮ひて神の靈に全く身心を委ねんとす。然れども聖人品は孤立せる間歇的なる運動を以てしては形成せらるゝ者にあらず (或は其形成に刺激をあたふるならんと雖も)、只間斷なき修行と平素の練習を以てして形成するを得べ

き耳。是故に聖成は第一には「施恩の要具」を正式に且致々として用ふるに基あす、施恩の要具は是れ基督教徒が由て以てキリストの生命の富と力とを己れに吸収する所以の道なれば也。次には斯の如く靈心に取りれたる所の諸徳を實際に試らみ、之を天の命定せる日々々の試煉と職分とに施さるべからず。誘惑は基督教徒が由て以て試煉せられ、同時にまた教育せらるゝ自然の道なり。誘惑と闘ふことは苦しき事なりとは雖も、我等の自ら招けるに非ずして來れる如き誘惑を経たらんことは「喜ぶべき事」と思へば使徒が我等に命じたる所なり (聖雅各書一章二節)、是れ誘惑は之を正しく用ふるに於ては其結果を來たす者なれば也。然し乍ら誘惑といふ名は餘りに狭くすべからず。唯に惡をなさんとするの誘惑あるのみならず、又善を棄ちかんとするの誘惑あるなり。基督教界の聖人品を發達せしむることは腐敗せる情慾を殺すに在ると均しく、又諸の健全なる志望を活動するに存す。我等が附托せられたる才能をば之を善用せざるべからず、而して我等は進んで神の教會のために働かざるべからず。

是に由て觀れば、聖成は基督教徒自身の故意の作業たる者なるや明らかなり。彼等は自から勤めて神恩に應ふることを計らざれば、逆も聖なる者と成さるゝ能はず。然は然ながら凡て真正の恩恵論にては之を以て徹首徹尾聖靈の業となす。人が聖成せらるゝは唯信仰に由るのみ、「行」によるにあらず、凡そ恩恵を離れて獨立に自ら己を完うせんとせば、唯これパリサイ主義またはストイク主義に終らん耳。是故に基督に倣ふの事は必ず又基督におけるの活信賴を以て之を權衡せざるべからず。

聖成の業は幾分かは必らず凡て救はれんとする者に悉く行なはるゝこと無くんばあるべから



ず。新約書中にありては聖徒といふ語は都てペテスマを受けたる人々に悉く屬す、是かれらは皆聖別せられたる者なれば也。然れども教會にては其天性自然に此稱號を只選中の選とも稱すべき人々にのみ冠するを然りとせり、即ち聖徒ととなへらるゝは恩惠の力を殊に著しく施こされ、且自らも最も善く其恩惠に應へたる者に限ることとなりぬ。教會の肢員中にありてすらも聖靈は「選びし器」なる者を獲て、自餘の人々に對するよりは彼等に對して殊に深く注意する所あるが如し、是れ彼等が或は一層大いなる外部の業に堪へ、或は一層細緻なる内部の鍛錬に堪ふるを見れば也。斯の如き人々は特に聖徒たる者なり。彼等の中には境遇の千差なるあり、教育の萬別なるあり、其發端にありては、神眼にあらざれば誰が聖徒となるべきかを知る能はず。神は或る人々をば——例へば聖パウロ、聖マグダラのマリヤ、聖アウガスチンの如く——一見最も頑梗なるが如き罪人の中より取たまふ、而して或る者は、處女馬利亞、聖ポリカルプ、聖ヘルナルドの如く、幼少の時より靄然たる和氣の中に聖潔にして育てらる。且又諸聖徒みな悉く教義上の誤解謬見を免かれたるに非ず、而して神の恩惠は分裂紛争にすらも打克ちて分離派中の人々（即ち一統教會と連なりをらざる人々）をも聖徒となしたまひしこと其例すくなくならず。奇蹟を行ひたりと證驗されたる人々をのみ聖徒と算ふるが如き、又重に額求訴號を目的として聖徒を作るが如きは、其標準粗にして未なり。地上に於ける教會は夫の天國に去りたる人々の中に最終の判決を下たすを得ず、然し乍ら昔日に在て基督のために著明の勳功を立てたる人々の名を記念するは教會の義務なりとす。

### 第十一節

「たび恩惠を蒙むれる人はいつまでも恩惠の中に在りとの説は唯實際的に眞實なるのみ、絶て錯る無き者とは算するを得ず。固より永生の種子の一たび靈魂中に萌生して能く成長するや、其靈魂自身は殆んど終に神に離るゝ能はざる者となるや疑なし。恩惠その靈魂を捉へて之を新しき奴隷の境界に服せしむ、——即ち是れ神に役仕するの事にして、實は是れ完全なる自由なりとす。靈魂は非常なる慈悲——單に聞たるのみならず又信じ、單に望みたるのみならず又實際に享けたる非常の慈悲——をばえて神に繋がりれば、其が堅牢なる鏈索を斷つを得ず。此等の慈悲は人々の自由を制限する夫の複疊なる範圍を構成する有力の一要素なる也。故に、其人は或は悖りて恐かならん、或は罪に沈み、甚だしきに至りては暫く禮拜をも廢せん、然れども鬼に角つひには目醒めて神に還り來る。此事は殆んど十が十まで然る者とす、故に其萬一に然らざる時には、吾人は其人果して眞に皆て神の愛を知りしや、縦し之を知りしと思へるも自ら欺むけるのみには非ざりしやと疑はざるを得ず。實に一たび眞に神の約束を會得したる人にして、終に永久これと縁を絶つに至らんには、惡の奇蹟とも謂ふべき者を要する也。

實際觀察の件として之を見れば、夫の終耐説（聖徒は最後まで失墜せずして必ず恩惠の中に存住すとの説）は此點までは正しとす、而して又聖書の中にも之を證明する文章に乏しからず。然し乍ら此説は實際觀察の領分を離れて必然といふの教説となる時において虛妄なる者となり有害なる者となる。眼前における神の赦宥を心靜かに確信し、又之に關する神の渝らざる旨を確信する者となり、自ら神より離れ遠ざかりて其永生を失なふも知れずとは眞面目に思ふことも得せざる良心、——此の良心（此同一良心）また證をなして曰ふ、是或ひは然か失墜せんも計られず、失墜せ



ざらんやう慎まざるばあるべからずと。此事は決して機械的に不可有なる者に非ず。否、サタ  
 ンの謀略——其長日の攻圍、其急激の進撃、其狡黠なる欺妄の如何に怖ろしきかを思ひ、又人々  
 が之れの前に如何に再三再四躓き倒るゝかを思へば、却つて其如何に忽ち復と回復しがたき仔虜  
 となるの恐おほきかを察知すべし。人魂は物事を無造作に考がふることを敢てせず。人魂は幸ひ  
 にして救はるゝとも、其「辛うじて救はれん」ことを知る（彼得前書四の十八）、而して終まで戦々  
 競々として立つ也。聖書に眼を轉じて謹んで関するに、己れの怖るゝ所が己れの樂む所と均しく  
 忠實に描き出されてあるを見る。若し一處に「彼等いつまでも亡びず、亦これを我が手より奪ふ  
 ものなし」と明記せられたるならば（聖約翰傳福音書十章二十八）、他處にはまた特記して曰く、  
 「一たび光明をえ、天の賜物をうけ……嘗はひて後墮落する者は……復これを悔改に立返ら  
 すること能はざる也」と（希百來書六章四—六節）。

# 第十一章

## 終極の事物

試煉ハ死ヲ以テ終ル——中間境界——身體ノ復活——基督ノ第二ノ降臨ナリ其ノ徴——世末ノ大審判ノ性質——天國ノ福  
 祉——選メシタル者ト一般人類トノ未來ニオケル關係——沈淪スル者ノ狀態——善ハ終ニ勝ツ

第一節 地上生活の此時期は是れ我等が試煉の時なり。我等の現在の知識を以て斷ずれば、  
 試煉の時は此世を措きて他に無し。道德上の傾瀉（善人悪人等となる事）は現世にて十分に顯は  
 る、而して我等は此傾瀉が他處にて全く變ずべしと説くべき道理あるを見ず。聖アウガスチンは  
 明言して曰く、悔改と信仰の萌芽だも無くして世を去りたる人のために教會にて禱るは全く徒爲  
 に屬すと。悔ずして死にたる悪人は未來に於て悔改の機あるべしとの思想は、唯に罪を遠離せし  
 むるの具たる恐怖心を弱むるのみならず、之と反對する方面に於ても亦損失を含む者なるが如  
 し。頑梗なる悪人若し未來に於て善人と變じ得べくば、堅固なる善人もまた悪人と變じ得べし。  
 此事は基督敎徒の心と良心——既に痛く苦みたりし心と良心——にとりては實に耐へがたき者と  
 す。此世に於ける善悪行に基づける審判（賞罰）は須らく永遠にして終極なるべし、又試煉も此世  
 限りにて須く止むべしとは、信仰の要求する所なり、而して聖書は信仰に與ふるに之を要求すべ  
 き權を以てす。

但し此の世は決して單に試煉の場たるに止まらず、亦これ教育および薰陶の場なり、而して此の



點の世相は決して死とともに終る者にあらず。死と大審判との間において靈魂上に恩惠の尙ほ着々と歩を進むるある由を聖パウロは明らかに觀じたりと説くとも、決して彼が辭を牽強枉釋すとは謂ふべからず。聖パウロ乃ち曰く、「爾曹の心の中に善き工を始めし者これを主イエス、キリストの日までに全うすべしと我は深く信ず」(腓立比書一章六)。故に靈魂は死後尙ほ中間境界(Intermediate State)において新たに感化を蒙むるを得るといふことは之を躊躇せざるを得ざれども、尙我等は望み得べし此世にて感化の甚だ不完全なりし人々は其中間境界に在て己が堪ふるだけの完全の域に成熟せしめらるべしと。案ずるに未だ開發を遂げざる状態と、故らに神に悖りて「施恩の靈を侮る者」(希百來書十の二十九)の状態との間には天地の懸隔ありて存す。此の不幸なる後者につきては、死後に之を救ふの機あるを吾人は未だ聞かず、又既往の過を醫するの道あるを未だ學ばず。但し我等は確信して可なり假令薄弱なるも畢竟善道に就きたる人々は、未來に於て神の愛のために淨められ強められて遂に救はれんと。凡そ善としいへば、其未開の萌芽をすらも、其枯枝落葉をすらも神は棄てたまはじ。

或る場合に於ては、人が其蒙むる恩惠を輕んじて之を失なはんとするの恐あるや、油断なき神は——懲戒も疾病も救ふに足らぬ時には——俄かに死を以て之を罰したまふ、是れ我等をして世間の人と共に罰を蒙むることを無からしめんが爲なり(哥林多前書十一章三十二節)、恐らくは斯る場合も定めて多からん。想ふに此種の靈魂に我等の主は其死と復活の間を以て現はれて福音を宣べたまひしならん歟(彼得前書三章十九、二十)。其人々にして若し果して終に拯はるべかりし者ならば、其忍耐を再三再四蔑如せられたる神は遂に彼等を憤然として地球の表面より掃ひ去るよ

り外なからんとす。或は死の畏怖および苦惱の中にて幾分か目の醒むることもあらん、或は慈悲を呼ぶの事あらん、或は悔悟の長息を發する事あらん、其長息たるや死して生れたる嬰兒と暫くにも活て生れたる嬰兒との別をなす如き者ならん。而て夫の一片の醒寤(恩惠に應ずる心)は或は其人々をして其移されたる「牢」に於て教育と鍛鍊を受くるに堪ふる者とならしめん。臨終の悔改は決して必ずべからぬ者にはあれども、いつも有り得べき者とす、而して斯る悔悟は拯救の最小なる者をし加招き來たさずと雖も、兎に角其靈魂の終に永く泯滅するを免かれしめん。

是故に教會は臨終の際に於ける道徳上および靈性上の價値に古來常に重きを置きたるや極めて大いにして、時としては殆んど迷信に類するの觀ありき、即ち其將に死なんとする人をして目と心を十字架に注がしめんことを務め、假令其人は自ら無知覺なるも宗教上の諸禮式を以て之を圍み、天使の來降を神に求め、教師と親戚朋友との代禱を盛んにし、其甚だしきに至りては辭世鐘を打鳴らして生面の他人にすらも同情の祈禱を乞ふ。是れ將に死せんとする時はサタン其の最後の大攻撃を加ふるあり、靈魂もまた屢々怖ろしく寥しきを感じるある者なるに因て、臨終は其の特別なる誘惑と危険あるが爲に然るのみには非ず、——又死の將に到らんとする際は、特別にも未だ神恩の徴をあらはしたる事のあらざる人々に取りては、上にも言へる如く復と得がたき最後の望の係る者なるが爲に然るのみには非ず。死は人魂の方向を示す最後の磁針なり。神は我等を鞠くに我等が如何に死したるやを以てせず、我等が如何に生きたるや「生活したるや」を以てす、然れども人の生涯においてや何れの危機に臨みても其人は今まで己れが如何なる行をなし來れるかを顯す者なるが如く、死に臨みても亦人は一層深き意味に於て然かす。我等が生活の模様は我等



が死の模様中に縮寫し出されて見ゆ、もつとも是れは人々の審判をもとむるが爲にするにあらず、神の審判を求むるが爲めにする者とす。

第二節

恩恵の中にありて死したる人々は其死と復活との中間にありて何をなしつゝあるか、即ち其中間の状態は何如ぞやといふにつきては、吾人に啓示せられたる所きはめて少なし。本問題に關する知識は今我等には到底得がたき多く、又得るも益なき多し。然し乍ら我等の步履を指導するには十分なる光明の與へられたるあり、又我等に其死したる友を想ふに當りて慰藉を得せしむるには十分なる光明の與へられたるありとす。彼等の境界あるひは住居を時としては「樂園」と曰ひて(路加三十三章四十三)、人類の起端における無爲無辜の境界に吾人を溯のぼらしむ、——時としては之を「アノハム」の懷」と曰ひて(路加十六章二十二)、我等に神との契約の保續、および信仰に於ける我等の大父祖の守護を感ぜしむ、——時としては——重に舊約書中よりの引用文に於て——單に之を陰府(Hades, Hell)と稱す、是れ希百來語のシオル(Sheol)に當る者にして、消極を以て軀とし、善惡とも凡て世を去れる人々の境界を包含す、但し其用ひらるゝや必ず匱乏および不完全といふの意味ありて、僅かに一步を轉ずれば刑罰及び苦痛といふ暗淡たる思想に入らんとす(黙示録二十の十二、路加十六の二十三)。只一たび聖書中にて一種の靈魂は「祭壇の下」にやどると言はれたり、祭壇とは多分寶座といふに同じき者ならん(黙示録六章九)。此の筆法は是れ彼等が特に大蓋に近きを示すと同時にまた其殉教の死が犠牲の性質を帯る者なるを示すに似たり、而して又是れ其靈魂が一種の牢獄内にありて其を脱せんことを冀がひざるを暗示す

るが如し。

基督教徒の死の第一たる特質は其が能く安息を來すに在りとす。「彼等は勞苦を止めて息まん」(黙示録十四章十三)。其一方面に於ては、此の安息は善人にも惡人にも均しく屬する者にして、單に是れ其形骸を脱したるの結果なりとす。

(註)或ル人々ハ論ジテ曰ク、肉體ハ暫ク謝シ去リ、靈魂ハ未ダ來ラズト雖モ、靈魂ハ當分假リノ機體ヲ着セラレテ、其赤裸タルノ感ヲ免カルト、然レドモ彼等ガ論及スル聖パウロノ語ハ其意淺ニアラズシテ却ツテ之ガ反對ナルヲ見ル、彼ハ此世ノ「墓屋」生活ヲ憂シト思ヘリ、而シテ若シ成ルベクバ「主ト侍ニ居ラン」タメニ此「身ヲ離レ」ンコトヲ願ヘリ、但シ此ニ尙第三ノ擇アベキ者アリテ存セリ、彼ハ之ヲ前二者ヨリモ擇バントセリ、即チ是レ聖モ脱ケノ煩ヲ要セザラン事、即チ「墓屋」ト「天ヨリ賜フ家」トノ間ニ介マル距離ノ全ク無ラン事ナリキ、聖パウロハ己レガ死スル前ニ基督ガ再ビ還リタマハシコトヲ冀ヒ、而シテ己レガ肉ノ衣ヲ脱ケコトヲ須タズシテ直チニ靈ノ衣ヲ着セラレンコトヲ冀ガヘリ、是レ「死スベキ者ガ生命ニ飲マレン爲ナリ」キ(哥林多後書五章一—五節)。

肉體は道徳を行なふの機械なり。肉體の一たび取り去らるゝや、其人は善きにつきても惡きにつきても、己に彼の「夜」——基督が謂ゆる「誰も事をなす能はざる」の時——に至れる也(聖約翰傳福音書九章四節)。各箇の人には地上にて働くべき「十二時」の晝間已にありたり(同書十一章九)、今は新しき朝の來るまで休みて諸の實際業行を廢せざるべからず。營々離齣たる塵世の事務は終を茲に告ぐ。肉體はまた感覺を受くるの媒なり。諸感覺もまた後に遺らるゝ而已。死者は肉身上の苦樂、利害得失飛舞激發の纏紛たるを脱して安息す。最はや新しき誘惑の來り襲ふある能はず。死者も新しき行動に進發するを得ざるならば、亦何物も入り來りて新しき困難をこれに蒙らしむる無し。吾人をして表號と詩歌とを以てするに非れば。バラダイスの生活を描く能はざら



むる者は、死者の此の絶對的閑寂なりとす。純平たる靈有は吾人が想像し得ざる者なり。之につきて吾人が言ひ得る所は唯事々物々悉く此世とは全く表裏すとの事のみ。

但し死者は斯く外界とは交通する能はざるが故に、昏倒または氣絶の狀に居らざるべからずと思ふが如きは、全く聖書と相悖ると謂はざるを得じ。聖書の中に「死ねるを」眠れる」或は「寝たる」と書けるは「馬太二十七の五十二、及二十八の十三等」、決して斯る思想をのべたる者にあらず。此語(原語)は安息(Repose)を謂へども、空寂(Vacancy)を謂へる者にあらず。キリスト此世を去りて陰府に赴むむけるときにも「其靈は生されたり」と云ふ(彼得前書三章十八)、他の人々もまた斯の如し。靈は内部の全知覺界(内界の全領分)を自在に發達せしめんために外界の活動と感覺とを離れて休める爾。其が其れ自身の中に閉こめられたるは、萬事を抛ちて専ら深長の事實を潜かに觀想せんが爲めなりとす。此世においては、吾人は現象なる者を去りて實相に思を注ぐに困難を感じぬ、然れども死者にとりては其業容易なるなり。否な是れ實に彼等の唯一なる業なりとす。我等のごとく出で、現世の事物を樂むに由なきが故に、彼等は永遠無窮なる事物をのみ觀測す。聖パウロが論及せる「潤さ」及び「長さ」——彼等が以前にも由て以て徘徊したる所、今後にも由て以て再び一層自在に徘徊せんとする所の者——は今は彼等が達する能はざる者となれり、彼等の領分は彼の「深さ」——聖アサナシウスが解説して死者の國と稱せし所の者——を探検するに在りて横たはれり(以弗所書三章十八節)。

按ずるに靈は直ちに即時に萬有の本體實質と當面相對するを得て毫しも感情を發動する事なしとは決して思ふ能はず。幔幕も媒介もサクラメントも最はや間に介まる無く、事物の實相は赤裸

なる知覺(意識)の前に其まゝにて呈出せらるゝ時には、——真理にして最はや遁避するを得ず、假裝するを得ず、誤解するを得ざる者となりたる時には、然る時には茲に醒寤來たる、此時に至りてや聖徒すらも歡喜にまじふるに恐怖を以てせざるを得ず。人々は此世にて福音の光に住たること深ければ深きほど、其死せるに及びて啓示せらるゝ所の真理等に對して驚くこと少なかるべし、而して其嘗て信じたる所の事の眞實なるを發見するの歡喜は其今まで曉らざりし物事を了知するの苦痛に打克つに餘りあらんとす。併し乍ら此顯現は必ずや其中に大聖潔者をすらも戰慄せしむるが如き物を藏す。聖パウロはバラダイスの味を預め嘗たり(哥林多後書十二の四)。彼はまた彼の怖ろしき深淵に論及して曰く是れ靈魂をして——若し基督における神の愛ありて懷き且扶くるに非れば——踰めきて仆れしむるに足る懼るべき者なりと(羅馬書八章三十九節)。彼は肉體を蟬蛻する時は必ずキリストに直ちに接すべしとは確信したれども、尙長縮する所ありて心に感ずらくは斯の如く地上の生活を捨て、超然たる蟬蛻を取るには大勇(剛毅)を要すと(哥林多後書五章八節)。

死者の知覺に最も活潑に入り來る事實中には彼等自身の存在する妙理に關する者も在りて存す。彼等は此に至りて始めて己れの何たるを會得し、又己れが如何にして然る者となりしかを會得す。神が己れを憫れみたまひし巔末、及び己れが辛うじて沈淪を免かれたる始末今や歴然として彼れの眼前に聳ゆ。己れの罪が如何に大いなる者なりしかを今彼は夫の之(己れが罪ども)を負たまひし者の大御前にて強き光に照されて明かに見る。されば送葬の聖詩に云く、「汝われらの不義を御前に置き、我等の隠れたる罪を聖顔の光のなかに置きたまへり」(詩九十四篇の九節)。彼の「御顔」



は以前のすべての思想に百千倍する愛を以て被救罪人の上に輝き出づとの事は、決して彼より其非行に對する悔恨を悉く取のぞくには非ず、却つて刺痛をこそ之に加ふるなれ。死は基督教徒を驅て深き悔悟の狀に詣らしむ。人は地上に在るあひだは其悔悟は其拯救を氣づかふの念を混ざるに因て罪の本來固有に怖ろしき者なるを感ずるの心を薄くす、然れども將來に關する掛念の悉く終を告ぐるや、靈魂は其聖救贖者が負ひたまひし罪につきて專念に聖救贖者の感情何如を考がふることを得べし。即ち靈魂は其時に於ては彼の以西結書(十六の六十三)中の預言的なる約束を領會することを能くせん、曰く「我なんぢの凡て行なひし所の事を赦す時には汝おぼえて羞ぢ、その恥辱のために再び口を開くこと無かるべし」。地上に於ては、悔悟せる人々は其熱心なる行動を以て幾分か其切なる思を和らぐることを得れども、一たび此世を去るや早や斯る手段を有せず。斯く肉躰の無き事によりて如何に大いなる差異を生ずるかば、聖ペルナルド善く之を指點したり(彼が論及せしは沈淪せる人々に重に關する者なりしとは雖ども)。斯の如くなるを以て其人は己が非行を償ふことは何も得せず、只其非行の憎むべき者なることをのみ味ひをらざるを得ず。(penitentiam haberi, non agi 悔悟を有すれども行ふに由なし)。夫の想像せられたる煉獄の猛火が引おこさん苦惱も争でか此の能く靈魂を劈き且補ふ悔悟の劍に及ぶべけんや。

羅馬教會にて教ふる煉獄の説は此等の眞理を譬喩もて言あらはせる者なり、然れども亦聖書に全く所見なき若干の觀念を提起せる者と謂はざるを得ず。勿論死と大審判との間に於て人々が經べき鍛鍊の千差萬別なるとは、其鍛鍊せらるべき人々の千差萬別なるに相應す。然れども聖書の中に暗示する如き煉獄は其中に毫も應報懲罰の意を含める者にあらずして、畢竟バラダイスと異

なる者にあらず。靈魂はもはや重ねてキリストの面を避け又はキリストの手を振り離して逐客となるに非ず。故に「智慧之書」に曰く「義人の魂は神の手にあり、重ねて苦しむこと無し」(三章一節)。彼處にありて辛き所は凡て是れ靈魂が恩惠の助に由て自意に且自然に自ら蒙らしむる者に係る。善良なる基督教徒にして我は此世にて已に十分の悔悟をなしをばりぬと思ふ者は寡なし。概して彼等は罪を赦されたりとの念を更に一層深くせんことを希がひ、神前に最後の審判を受けんとて出る前に、尙省察回想の時間を有せんことを欲し、尙身を淨め罪を洗ふの暇を得んことを欲す。我等の主が其將に世を辭せんとする信徒に左のごとく宣はるは斯る機會を與ふる者です、「わが民よゆけ、汝の室にいり汝のうしろの戸をどちて恐慚のすきゆくまで暫時かくるべし」(以賽亞書二十六章二十節)。

バラダイスの生活は一方に於ては記憶に生き一方に於ては期望に活くる者なれば、殆んど現在を有する者とは謂ふべからず。黙示録にては其一方面を描いて「其功これに隨がはん」と曰ひ、又他の方面を描いては曰く「かれら大聲に呼はり曰けるは主よ何時まで」ぞやと。連続相次々業行の有り得べからざる處、自然界の季節の感ぜられざる處にては、勿論時刻上の分別は知らるゝ無し。例へば釋罪券の言語に於ける如く、本點につきて月日や歳を説くは、——若し聊かにても意味ありとせば、——純然たる形容語ならん耳。凡そ死者の靈魂が尺度とする所の者は必ず主觀的にして内界に限る者なるべし。彼等はすでに地上を去りたれば、地上に一千年過ぎたりとも、僅かに二三分過ぎたりとも、多分無頓着無差別ならん。是故に彼等の状態を進歩および教育の状態といふとも、光陰を以て量る地上の進歩と同日にして之を論ずるにあらず。上達せる聖徒は通常



の信徒よりも一層速かに（世間の意味にて）中間の境界を經過すとも、又は世の未だ終らざる前に天國の樂に入るとも、吾人は信ずべき道理あるを見ざる也。

死者が他の人々及び物と外部の交通をまつたく離れて孤處する事は其實かれらをして寂寥たらしむる者にあらず。其孤處たるや却つて彼等を導いて遙かに幾層深く相互に交通せしめ、又「彼等をして」我等とも同じく然か親しく交通せしむる者とす。現世においては我等は「聖靈の親交」といふ語の意味を只僅かに朦朧と推量するのみ。彼等（死者）は直接の經驗によりて之を知る。此にては我等は彼此相互の意味を符號と言語と顔色に由て推察す而して屢々之を誤解す。彼處にありては事物の眞義を基督にありて見つゝ、其領會するところ明瞭なる也。此世界の外部の出來事は彼等に影響せずと雖も、之が出來事の靈なる意味は彼等に影響する深し。此事は彼等が基督との關係中に含まれて見ゆ、此關係の親密なることは聖書中聊かにても本問題を論ずる文句にては必ず之を説けり。信者は死する時に「イエスに由りて寢る」と云ふ（帖撒路尼迦前書四の十四）是れ彼が寢るべき處をそなへて其處へ彼を導きたまふ者はイエスなるに因る。信者は「主にありて死す」と云ふ（黙示録十四の十三）、是れ死は彼が今まで生活したる神聖なる合躰の外へ彼を移すことをせざるに因る。信者は將に世を辭せんとするや叫んで曰ふ「イエスよ我が靈魂をうけたまへ」と（使徒行傳七章五十九）、是れ今までキリストに服せしこと如何に大いなりしにもせよ、靈魂は今や全く基督の掌裏に飛入りて、最はや獨立の生活を有せざるに因る。但し然か言へばとて基督の中に没し了るにあらず。靈魂は去りて「基督と共に在らん」とす（腓立比書一章二十三）、而して尙依然その箇躰を保ちて失なはず、キリストと同じ處に在るの特權を自ら樂しむことを

得。基督は信者の靈魂が。樂園にて己れ「基督自身」と「偕にあらん」ことを約したまへり（路加二十三の四十三）、而して其偕に在るといふは單に同じき地に在るをいふに非ず、伴侶として隨從しつゝ、基督の苦樂を分享するを謂ふ、且又信者の靈魂は其處にて己れが基督とともに宿ることを不安定なる者とも思はず、又は認められずに在る者とも思はず、彼は「主とともに居り」（哥林多後書五章八）、主と相交はり、己れが眞の故國たる第宅に住す、是れ此等の第宅は始よりキリストの所屬なれば也。御父の家の「第宅」に駐まることの終るや、神は彼を「イエスと偕に携へ」（帖撒路尼迦前書四の十四）、夫の一層完全なる状態にいたらしめたまはん、而して彼處にありて形躰と靈魂とは俱にキリストと永遠に交はるの満足を得んとす。

基督教徒たる死者のために我等がさしげ得る祈禱は英國教會に於て其信徒の口に授くる所の者はと善く此の見解と符ふ者あらず、是れ神の國の早く來りて彼等（死者）も我等も俱に均しく躰に於ても魂に於ても兩つながら圓成の域に達せんことを求むる者なれば也。併し乍ら何等の祈禱にもあれ、死者のために上まつらんと欲する者は、——他處に論定しおける一般の祈禱法に准がひて上つりだにするならば、——自由之を上つりて可なり。基督教徒をして其喪なへる親戚朋友のために祈禱をさしげしめざるが如きは無情の至りなりと謂ふべし。神は父母にてましますば、我等が其すべて心に感ずる所を陳べんことを欲したまふ。若し神の前に陳ぶるを憚かるが如き事を心中に希ふあらば、之を棄てし少しも善はふべからず。然れども凡て正當に願ひ得べき件々は皆謹んで神に申して可なり。神が其欲せざる事を明らかにしたまへる事ども——例へば死者を其朽る躰に喚ぶとんとするが如き、又は迷信めける禁道を行きて死者と交通せんとするが如き事——



をば願ふべからず。且又死者の事たるや未だ審かにせざる所おほければ、判然たる特別の願をば何にまれ彼等の爲になす可かず、少くとも斯る願をば大いに控目に白すを善しとす。然ども聖パウロの如く死者をして「夫の日に至りて主の矜恤を得しめたまへ」と禱るは宜し（提摩太後書一の十八）、又聖詩人の如く「死者と彼が過去の憂苦とを心に記たまへ」と願ふは宜し（詩第三百二十二篇一節）。安息、平和、振作、断えざるの光、神の眷顧、聖徒と共にするの分、歡樂みてる復活、慈悲ふかき審判、——此等の者は是れ古への信者が死者のために禱れる所なり。且又是の如き祈禱をたてまつることは無益なるに非ず、又無用なるに非ず。勿論時としては斯る祈禱に過長の時間と過分の氣力とを費やしたるあり、又第十五世紀に於ては、死者が煉獄の苦を脱せんことを祈るは、彌撒禮（マス）の主要なる目的となりしと見ゆ。死者は其方向の決したる者なれば、夫の尙誘惑に陥り易き、又は其救はれたることの未だ定かならざる人と同じ様に生者の祈禱を要する者にあらず、然れども死者の進歩に我等の祈禱は裨益する所なきに非ず。地上なる基督教會の禮拜中に死者の事を省きて言はざるならば、是れ彼等と我等（死者と生者）との關係は全く絶えたる者なるを黙々の裏に示す者と謂はざるを得ず。何物か是よりも虚妄なるあらんや。

第三節 基督教會にては哲學者輩が想像したる如き靈魂不滅説をば特に之を有する無し。教會にて説く所は人類の未來不滅説なり。教會にては靈魂がバラダイスにて連綿として存在し且知覺を有し居ることを教ふれども、其バラダイスに在る間は死したる者と見做さるべからず。是故に我等の萬福なる主は言たまはく、「我は生る者なり、前に死にしことあり、視よ我は世々かき

りなく生く」と（黙示録一章十八節）。但し死は斷滅にあらざるが如く、亦生に還へることも例へば肉體なき存在が人々に於ける如き不満足なる或る物を回復するの事にては非ず。基督教にて説くところの生命は更に幾層活潑なる實有あり。人類の生命は其の完成せんため顯現せんためには機軸を要す。是故に凡そ人魂の不滅を説く所の教にては必ず先づ肉體の復活を認む。復活を無しと主張せるサドカイ宗徒と論ずるにあたりて我等の主は彼等に二重の一大誤謬あることを説破したまへり。先づ彼等は「神の能力」を知らずして謬まれり、即ち彼等は肉體を具へたる生命にして此世の生命に超越する者ありといふことを辨まへざるに由て神が死者を生に復することを得たまふを信ぜずして謬まれり、次に又彼等は「聖書を知らず」して謬まれり。イエスが聖書を以て證したまへる論法は一目に瞭然たる者にあらず。然れども其なせる斷定を見るに最も吾人の教誨となる者ありて存す。曰く族長たちが死して年久しき後に神は尙も我は彼等の神なりと宣まふと。人或は思はん神は彼等の生前に彼等の神なりし故に然か我は彼等の神なりと宣まへるなりと。然れども一層深く考がふるに、神と族長たちとの間に形づくられたる連鎖は消滅すべき一時の關係には非ず。神の形に造られて、神と交はることを得たま現に交はるに至りし受造物は、全く消滅して忘却せらるゝに至ることを得ず。故にアンラハムもイサクもヤコブも皆なほ生きてをり、一切の死人も亦みな然りとす、是れ神の前には皆生ける者なれば也。但し此事は更にまた一層深き思想をその中に含蓄す。是等の族長もし身は已に死したれども、尙——單に神の反顧内における一記憶として非らず箇躰たる眞存在物として——生くるならば、是必らず其將來來らんとする復活のために然る者ならざるべからず。アンラハムの靈は靈ばかりにてはアンラハムならざるこ



と、猶アブラハムの躰が躰ばかりにてはアブラハムならざるが如し。故に神もしアブラハムの神ならば、神もし死者の神にあらざして生者の神ならば、神は必ず生命に還るべき道をアブラハムのために備へたまひたらん、而して其生命たるや必ず此世の生命に劣らずして富々且充てる者なるべく、随つて又必らず恰當なる身躰を纏ふ者なるべし。

復活の躰の性質はキリストの躰を復活の後に描寫せる所を見て知るべく、又聖パウロが同描寫に本づきて演繹したる所を見て知るべし。キリストは自ら死者の中より復生して「生命と不朽とを明らかに」したまへり(提摩太後書一章十節)。然し乍ら基督の身に見たる所を我等に當つるに於ては肅然として謹しまざるべからざる者二件あるを決して忘るべからず。第一、基督の躰は肉躰をぞれる神子の躰なりき、彼は其未だ死せざる前に於てすらも餘人の爲し得ざるごとくに自ら其御躰を働らかするを得たまへり、死後に於ても亦然かすることを得たまひしならん。且又キリストの躰は其地上にこゝまれる四十日があひだには未だ終極の受榮躰としては顯はれず、只其が死より生に還れるの初程に於てありし而已。只この二重の謹制をだに心に忘れざれば、必ず吾人の未來につきて是より夥多の教誨を得るあらん。基督の躰は目を以て眞の身躰と見られ、手を以て眞の身躰と感ぜられたり。——キリストは自ら「肉と血」とは言たまはず「肉と骨」と言たまへり(路加二十四の三十九)。其躰は尙この物質界と親密の關係をもちたまひたれば、弟子たちはキリストの「甦がへりし後どもに飲食」したり(使徒行傳十の四十一)。是れキリストが以て産れ以て生き以て死にたまひし其躰なり、決して異なる者は非ず。之を證するためキリストは其手と足と肋を見せたまひしが、そこには尙キリストが受けたまひし磔死の跡歴然としてありき(路

加二十四の三十九、約翰二十の二十)。否なキリストは己れが復活の躰と自然の躰の同一なる事を以て己れが曠昔のキリストなることを證せんとさへもしたまひて曰く、是は即ち我なりと、宛がら異なる躰を以て現はれては同じきキリストなる能はざりし者のごとし。但しキリストの躰に起れる變化は其著明なること其繼續の徴に毫も劣る所あるにあらず。其躰たるや彼に親炙せる人々すらも、顔色に由ても音聲に由ても、即座にいつも認むる(見知る)ことは能はざりき。之を十分に領會するには幾分か靈眼を凝らさざんばあるべからざりき。一度は「變りたる貌にて現はれ」たりと云ふ(馬可十六章十二節)。弟子たちイエスの現はれたまはんことを期しをり、且待あはすべき處をさへも指示せられをれる時にすらも、其眼前に現はれたまへるに及びてや、如何にすべきを知らずして尙「疑がへる者もありき」(馬太二十八章十七)。若し尙空氣を呼吸することを得、其呈せられたる食物を食ふことを得、地を踐んで歩むことを得たりとて、基督の復活したる躰は此等の物に繋がれてはあざりき。戸の閉てありたる室中にも彼は忽然として現はれたり(聖約翰二十章二十六)。是の如く彼はまた其欲する時には、均しく忽然として「目に見えず爲れり」(聖路加二十四章三十一)。彼の躰は隨意にまた天に(空中に)上るを得たり(使徒行傳一章九)。

以上は是れキリストが其復活せる躰の我等が此自然の躰に對する關係につきて垂れたまへる二三の指致なりとす。聖パウロは譬喩と概括とを以て吾人の知識「本點に關する」を更に推擴す。即ちパウロは現在の肉躰と是より開發する靈躰とを裸かの種粒たねと是れより發生する植物とに比す、謂へらく、種子は逆も望なく腐りをはりたるが如し、然れども神は其種子中に藏する生命に再び形躰を與へたまふ、而して其之を與へたまふ方法たるや決して氣儘なる者にあらず。一定不



變の法則ありて其時きたる種と其生じたる植物(草または木)とを相連らぬ、而して學術は或は其然る所以を説明し得ざらんも、小麦は必ず小麦を生じ、大麥は必ず大麥を生ず。是の如く人が未來に於て着ん躰は即ち「ちのちの己れの形躰」なるべし(哥林多前書十五の三十八)——其己れの形躰たるや決して成分の同一なるが爲め又は形狀の同様なるが爲めに然るに非ず、是れ彼の諸能力と諸關係との集合團塊——今其人の躰と稱し、其人が從來用ひたるごとくに用ひらるゝ者——の中より發生し得る唯一の物なるに因て然りとす。但し復活したる人々の衣るべき機躰は現在の肉躰と異なることは例へば離々たる麥が其まかれたる種子と異なるよりも尙遙かに大いなるべし、——唯に「榮」に於て「層美しく」「力」に於て「層強き」のみにあらず、「朽る者」にて播かれ朽ざる者に甦がへらざる。其萎れ、枯れ、死せん恐は絶て無し。其人は終に眞の不死に達せる也。其比較を一言に約むれば、畢竟これ「血氣の躰」にて播かれ、靈の躰に甦がへらざる、」なり(哥林多前書十五の四十四)。是すなはち其大差別なり。地に在りては人は肉にあり、パラダイスにありては靈にありしが、今は此等の二者完く合躰す、——即ち靈魂は純靈の國にて學ぶべき事どもを悉く學びたれば、今や再び躰に歸り來る、而して其躰たるや決して靈魂を制肘し或は攔阻する無く、却つて靈魂の命令を毫も困難なしに全然奉行す。基督の來まさんときに尙生ける人々は死を経ること無くして同様の變化を蒙らん。

萬人ことごとく其躰を以て甦るべしと雖も、是の如き復活はたゞ忠信なる者(信者)にのみ許さる。是れ我等の主の肉を己れの肉となせる人々に限れる特恩なりとす(約翰六章五十四)。是れ聖徒が獲んとて切に冀ひ且追求むる復活——死者の甦がへること(腓立比書三章十一節)——なり。

之に反して、悪人もまた其單に靈なる姿よりは歸ると雖も、依然として死せる者のみ。

(註)信者ト悪人トハ遙カニ時ヲ異ニシテ別ニ甦ガヘルヲ世間普通ノ俗説ハ默示録ノ形容語ヲ誤解セルニ基キス、默示録第二十章五節ニ謂ユル「第一ノ復生」ハ聖徒ガ其死後ニ教會ニ及ボス所ノ新ラシキ力ヲ得ルヲ指フ者ト見ユ、此事ハ本書第二百一十二頁ニ於テ論シタルアリ、後世ノ人々ガ諸聖徒ノ言行ヲ學ビ教誨ヲ究ムルハ即チ其聖徒ヲシテ今基督ト共ニ世ヲ治メシムル所以ナリトス、是ト異ニシテ又一層普通ナル解釋ハ第一ノ復生トハ信者ガ其はぶてすニ由テ新ラシキ生命ニ取ルルヲ指フトスルニ在リ(彼得前書一章三節ヲ參照セヨ)、其意味ハ兎マレ角マレ、默示録ノ性質ハ其旨語ヲ字面トホリニ取ルルヲ許サズ、聖ばうろガ帖撒路尼迦前書四章十六節ニ言ヘル所——「きりすこニ在テ死ニシ者先キニ甦ヘルベシ」トノ語——ハ、原書ニ就テ見レバ、之ヲ後ニ甦ルベキ他ノ死者ト比ベタルニ非ズシテ、却テ之ヲ次ニ化セラルベキ生者——「活キテ甦ル我等」——ト對比シタル者ナルコト一目ニ瞭然タルベシ、聖ばうろハ當時てさるにけ人が信ゼシ所ノ見解——「活キテ甦ル我等ハ夫ノ已ニ甦レル人々ヨリ先ダタシ」トノ見解——ヲ倒サマニシツアル也、

悪人が受けん躰は彼等の道徳上および靈心上の状態に相應す、故に毫も彼等をして自由もしくは生命を増さしむることは無くして却つて、彼等が内部の頹敗の大いなるを證する而已。聖書中にありて一難句たる者にむかひて若し最も文法に叶ふと思はると一翻譯を下だすならば、蓋し左の思想を抜き出し來るべし、曰く、自然の腐敗たる極めて甚だしくして十分に「生を得るには甦がへる」能はざれども、さりとて又「罪を得るに甦がへる」ほどには我慢に悪逆なる者にあらざるが如き人々は(約翰五章二十九節)——他の人々とは離れて、併し神には離れずして——尙無形躰の存在を續くることを許されん(彼得前書四章六節)。想ふに「片手、片足、片目にて永生に入らん」人々につきて主の言たまへる所の者の裏面には或は幾分か同様の性質の者ありて横たはらんか(聖馬可九章四十三——四十七)。其人の形貌上に其人となりの善悪かならず幾分か描き出されて見



第四節 一般の復活は大末日に起る者にして、我等の主イエス基督の臨格に伴なふ。否な是ほとんど基督の臨格なりとしも謂つべし、如何となれば他處に已に説きたる如くキリストの第二の降世はキリストが再び吾人と同じき境界に還りたまふを謂ふにあらず、吾人がキリストの境界に高めらるゝを謂ふなれば也。キリストは再び吾人の凡眼凡耳等に覺得せらるべき者と己れを爲すにあらず、「忽ち瞬息間に」生者と死者とに均しく與ふるに其が由て以て基督の現前を覺得すべき復活の能力を以てしたまふ、——此現前たるやキリストの昇天以來常に我等の中にありたれども只信仰の目を以て見ることを得し而已。

斯る降臨が世界の末にあらんといふことは聖書中に最も明らかに啓示せられたる一事件たるなり。近世に至りて人々は教會行事中における一層通常なる「異常ならざる」事件および出來事をもそれぞれ基督の來格なりと以前よりも一層判然と考へて大いに自から裨益する事となれり。キリストは諸のサクラメントに於て、及び其聖語に於て來りたまふ、人々の臨終において其靈魂に來りたまふ、凡そ大危機または大段落——例へばエルサレムの陥没の如き、コンスタンチン帝の改宗の如き大決斷大審判の時期——に於て教會に來り給ふ。然れども此等はみな只預試階梯の來格たるのみ。是等は長悲劇中に於て一段より一段へ、一幕より一幕へ轉ずるの步履のみ、然れども諸の小降世をことごとく最後の一大圓圓に歸せしむる大暴露を我等は尙ほ待つゝある也。夫の大降格の起るべき期は吾人の全く知らざる所なり。是れ聖ヨハネが用ひたる表號數字に由て

も算出すべき者にあらず、又最も敬虔なる靈眼を以てしても此期の將に來らんとする徴を誤る無しに讀むことは能はず。世俗中好んで此期日時刻を案出せんと試むる者あるに反動として、我等もし其來ることは尙甚だ遠しと信するならば、我等が然か信するは即ち其期が遠きに非ずして却つて近きを示すの徴とす、如何となれば其期につきて一の確實なる者は即ち其が凡ての計算を空しくせんとの事なれば也、「意はざる時に人の子は來らん」とす(馬太二十四の四十四)。キリストは其第一の降格におけると同じく、「期の滿る」にあらざれば決して來りたまはじ。若し世界は未だ終りに至るほどに熱せざるならば、其熟するに要する歲月は如何に長きか如何に短かきかは何人も之を算定するを得じ、「主においては一日も千年の如し」(彼得後書三の八)。主もし其運歩を迅めしめんと欲せば、出來事は絶大の速力を以て行かん。衆成分はことごとく杯中に在り、之を融かして沈澱せしむるには只一滴の藥を加ふるを要する耳。我等が主の其再降を説くにつきて必ず警しめたまへる所は、恒に目を醒して之を待て、決して其遠きを信じて安眠する勿れと曰ふにありし。

基督が橄欖山にて授け、後に聖ヨハネがパトモスの島にて敷術舖張したる此等の警戒の意味をば餘りに細かに之を論定するは危険なきに非ず。然し乍ら再降世の準備は自然界および歴史界の二大方向に横たはる者のごとし。既に死せる者の復活および尙生ける者の變化は依然たる此儘の世界にては起らじ。人類と世界との關係きはめて親密なれば、此まゝにては逆も其事あるを得じ。基督は「日月星に異象あるべし」と宣まひ(路加二十一の二十五)、聖パウロは「火」と「大なる響」ありて(彼得後書三章、七、十、十二節)現天地を燬つくし且新天地を生ぜん」と云へり。此最後の



大轉變は何如なる形にて起るにもせよ、默示も學術も俱に我等を驅つて信せしめんとす此世界は嘗て始ありたれば、亦終なくんばあるべからずと。但し其終はまた是れ新たなる一層榮光ある天地の將に始まらんとする者とす。萬物は自家の過によるに非ずして人類の失墜と苦難とに連累したれば、又イエスキリストに由て生ずる利益を必ず分享す。「我等の身軀の救はる」や、「受造物みづから敗壞の奴たることを脱れて神の子たちの榮なる自由に入らん」(羅馬書八章二十より二十三節を見よ)。受造物の今歎く所の勞苦は必らず徒然なる勞苦たらじ。其結局として必ずや夫の基督が説きて無説明におきたまへる如き世界の更新を來さんとす(馬太十九の二十八)。

自然界は一方にては人々の罪に由り、他方にては人々の勤勉と學術に由り、並にまた自家の步履に由りて、己れと我等との救贖主の臨格を招き來たしつゝあり、斯の如く人類の歴史もまた然り。萬國民中に福音の傳播する事に由り(馬太二十四の十四)、又イスラエル人が再び神の御手に回收せらるゝ事に由て(羅馬書十一の十五)、キリストの再臨格は途を備へらる。己に死より甦へれる諸聖徒の中にキリストが地上に於て眞に王たりたまふと云ふが如き千福年 Millennium につきては一統教會にては決して無用なる揣摩臆測を下さんことを肯んぜず、然し乍ら世が最後の大審判に達する前に教會は其今までに見たるよりは更に廣大なる勝利を與へられんことを期して待つべき道理あるなり。東洋の諸大國民ならびに群島およびアフリカ、アメリカ等の未開人種もまた來り加はりつゝ、基督教會をして愈々その一統普偏なるの實を明らかにせしむるを要す。且又教會の一致の破れたる者をも挽回せざんばあるべからず。是に於てかサタン(惡魔)は其畢世の力を奮ひ、及ぶだけの衆を集めて最後の決戦を挑まん、而して善と惡とは相分かれて互に世を占領せんと

争とはん。かくて、夫の不可思議なる叛逆者、——恐く我はキリストなりと妄稱するアンテクライスト Antichrist 全力をつくして其暴逆をほし、いまにせん時に、主イエスあらはれ、「其來るとき發はす所の榮光を以て彼を廢せん」(帖撒路尼加後書二章八節)。

### 第五節

世末の大審判の悚然たる光景は聖書の中にて我等のために描き出されたり。我等は只表號たるの形にて之を思想し得るのみ。但し此等の光景は字面どほりに解くべき者にあらざるといふを認め、且其表出する主要なる觀念の二三を講解せんことを試むるは、少補なきにあらじ。

審判の第一要素は争中の件を斷ずるに在り、是れ紛錯せる不定の疑問を明かにするに在り。争件を吟味し、證人を審問し、訴訟の全軀を精閲し、而して曲直の裁判を下だす。然し乍ら、大原則は同じと雖ども、末日の大審判に移すに人間の法庭の全光景を以てするに及ばず。末日に於ては毫も證據を提供せしむるの事なく、毫も辨論または答辨の事なかるべし。キリストの現はれたるまふ光によりて人間の歴史は徹頭徹尾その最も隱微複雑なる者にいたるまで悉く一目に瞭然たるに至るべし。此事實または彼の事實に注意を喚び。此處または彼處に情實を指點しなどして、是非を論辨討議するに及ばず。キリストは告て曰たまはく我が來るは電光の如くなるべしと。電光の暗夜に閃發するや順次に四邊の地景を照し來る者にあらず、西より東まで北より南まで一時に其全軀を明らかにす。大審判の日においても亦かくの如くなるべし(路加十七の二十四)。言行の裏面に横はれる心術は言行其物とあなじく明白なるべし。卑賤なる私人が世界と教會との發達に力を致したる所は、大政治家、大將軍、または大教師の赫灼たる勳績と其真正の關係をたもちて



一々に彰はれ来らんとす。悔て赦されたる罪もまた審判に持たせらるゝやとは往々人々が戦々兢々として問ふ所なり。之に對してはキリストの語と聖パウロの語とを以て答ふるの外ある無し、基督は「掩はれて露はれざる者はなく、隠れて知られざる者はなし」(路加十二章二)、聖パウロ曰く「主の来らんとするまで時いまだ至らざる間は審判する勿れ、主は幽暗にある隠れたる情を照し心の計謀を顯はさん」(哥林多前書四章五)。善にもあれ惡にもあれ一切のごとく必ず露はれん。然れども悔改めたる人々は却つて其然るを喜ばん。此の暴露は毫も彼等に害を及ぼさず、又毫も彼等に狐疑または恐懼を生ぜしめじ。其暴露する罪はもはや彼等の罪にあらず、彼等に關するだけは神すでに其罪を忘れたまへり。彼の時にいたれば、彼等の悔悟は完く終を告げん、彼等が以前の羞辱の暴露すると同時にまた某が招き來たしたる基督の愛の榮光顯彰し、又其を利用したる基督の恩惠の榮光顯彰すべし。告白し了り遠離し了りたる罪惡こそ夫の大誣告者を閉口せしむるに最も有力なる證據なれ、是は彼れ「神の選びたる者を認たふ」べき口實を得ざれば也(羅馬書八章三十三節)。

斯る審判は然し乍ら單に眞理を明示して被告を心服せしむるに止まらず、是れ事を其發見せられたる處に遺しおく者にあらず、更に進んで大いに爲す所あるなり。此宣告の一たび與へらるゝや、最はや今の如き善惡混合の生活は復た還り來る無し。此の「永遠なる審判」(希百來書六の二、和譯かぎりなき刑罰)は審に既往或は過去につきて理論上の満足をおたふるのみに非ず、亦是れ全く新しき日の曙たる也、此の新しき日に於ては善と惡とは最はや相衝突せず、全く永久に分離す。此判決に對しては上告するを得ず、——是たゞに上告すべき高等の法庭なきに由るのみに非ず、又

其眞理の極めて明々白々にして之を争ふを得ざるに由る者とす。罪に定めらるゝ者は自ら己れを罪に定むる也、義とせらるゝ者は自ら其義とせらるゝ所以の道理を見ん。夫れ該大審判者は唯に萬事を神の全知力もて知り且之を神の正義の權衡にて輕重したまふのみに非ず、——彼をして慈悲ふかく信義あつき祭司長たるを得せしめたる(希百來書二章十七)完全なる、又代表的なる、嘗て一たび誘試を蒙りたる人性は、亦彼をして信義あつき慈悲ふかき審判者たるを得せしむ。固より御父神の審判とイエス基督の審判との間には毫も寛猛の差ある能はず。然れども人類の休戚に關する裁判をば悉く之をキリストに人類の有責任者たる首長として委ねらる。父は誰をも鞠かず、審判は凡て子に委ねたり、……人の子たるに因て「なり」(聖約翰福音書五章二十二、二十七節)。

第六節 神の人聖ヨハネすらも未來に於て神の子どもの如何なる狀に化すべきかを知る能はずと明言したれば(約翰第一書三章二節)、救はれたる人々の未來における狀形は如何なるべきかを斷言するは、唯に無益なるよりは却つて惡き者と謂はざるべからず。其狀形の榮光赫々たることは、すべての想像力に超越し、此世において聖徒に臨む神の慈恵に生涯浴する人々の心力を以てしても到底想像すべからず。凡そ罪惡の責と力に壓せらるゝ事は如何なる者なるかを味ひ知れる人々は、拯救といふ語の中に含まれて見ゆる該狀形の一端をなりとも觀じて「言がたく且榮光ある歡樂」を胸中に満たさば足りなん(彼得前書一の九)。拯救とは其榮光を對比上より得きたるの語なり。是れ我等をして其嘗て經たる危險を憶念せしむ、——即ち我等は救主の助なかりせば



必ず<sup>ほろひ</sup>滅亡たるならんといふことを憶念せしむ。恩恵に棲息する生活は全く是れ拯救を段々に實享し行くの生活にして、(聖ペテロの語もて言へば)、我等は其歷程上常に拯救を「受」(和譯得)つゝある者とす。但し靈魂が十分に救はれたりと思ひ得べきは唯最後の審判を凌ぎ永遠の宣告を與られたる後に於てすべき爾。かくて夫の白衣を着手に棕櫚の葉をもてる人々は、其生活の罪が淨められたるを顧りみ、其勞の盡とく無難に遂げたるを顧りみて、其今もてる所の物の完全なるを認め、又其物を誰に得たるかを知悉せん、即ち呼はりて曰ん、救は寶座に坐せる我儕の神と羔より出づと(黙示録七章十)。拯救を求むるの中には毫も恥づべき事ある無し。宛がら醜陋なる私利を追ひ求めつゝある者のごとくに之を以て基督教徒を非難する人々は、キリストの教誨が吾人に注入する健全有益の恐懼の何物たるかを未だ味ひ知らざる門外漢のみ。自己保全(自衛)の天性は直ちに生命の源に根柢す、而して世間の利害に關して其發すると同様に又出世間の利害に關しても發せざるを得ず。我等の主も其使徒たちも頻りに之に訴へたるありき。其が恥べき者となるは只人々が到底之に達すまじき方法を以て靈魂の救はれんことを求むる時——すなはち世間の義務を廢し獨り自ら淑して孤棲しつゝ己が靈魂の救はれんことを計る時——に於てするのみ。但し拯救は是の如く極めて肝要緊切なる大事件なりとは雖ども、只これキリストが其民のために爲したまひし所の消極的なる方面を表する而已。未來の榮光は消極的なる者に係る。拯救は我等を墮落の百禍中より挽回する者なり。榮光は神が墮落とは關係なしに人々に與へんとてキリストに在て人類を創造したまひし終極の境界なり。

神の子どもが天上に有する榮光は如何なるかといふことをば敢て毫も講明せんとは試むる無く

も、是は必ず四重の完全を含むならんとは蓋し杜撰の譏なくして言ふを得べき歟。即ち天上の榮光に達したる者は彼等自身に於て完全なるべく、神と完全なる關係において在るべく、其棲息する世界と完全なる關係に於てあるべく、彼等の兄弟と完全なる關係において在るべし。彼等自身に於て完全なるは、眞正の自由を得るにあり、因て彼等は其己れに當然なる所の事どもを十分に實行するを得べし。彼等の構造其物も最はや彼等に負はしむるに窮屈なる制限を以てせじ。彼等も其由て以て事をなし又事をなさるべき或る媒介(medium)なくしては幸なる能はず、又其欲する所に應ずるに足らざるが如き媒介を以てしては同じく幸ひなる能はず。されど靈なる身軀は彼等が要むる所の物を悉とく彼等に獲せしめん。今の如く肉と靈との間に衝突は重ねて起らじ。最早惰習あらじ、疲倦あらじ、脆弱あらじ、苦痛あらじ、疾病あらじ、其他何にまれ敗壞と連なれる者は一もあらじ。又惡念邪慾を防ぐの警醒にも乏しき所あらじ。身軀は全然と意志の制取を奉じ、意志自身はまた完全に良心の指導を奉じ、良心はまた愛の直接なる光に照さるれば、誘惑のすべての力は終りに歸せん。各人は一言一行かならず全體の一致を以て云爲す、而て其内部の一致たるや神の一致なるが如く然り。今揣摩推量せられ得る何物をも打越えたる諸能力も其時には毫も努力を須つ無くして一中心權柄の自在に運用する所となる、——即ち其中心權柄たるや其れ自身確實健全なる者にして、何物も惑はず能はざる自信あつき聖潔の健康を以て、自在に諸能力を運用する者とす。

贖はれたる靈魂の其れ自身の内に於て斯の如く完全に健かなるは則ち是れ神に對する完全なる關係の由て存する要態にして、同時にまた是れ該關係より生ずる結果なりとす。人もし潔からず



ば主を見ることを得ず」(希百來書十二章十四)、然れども主を見ること無くしては潔くなることを得ず。其現はれたまはん時には我等必ず神に背んことを知る、そは我等かれの眞状を見るべければ也」(約翰第一書三章二節)。基督にありて顯はるゝ神の榮光は之を見るを許されたる人々を——其が之を窺ひ得るの淺深に准がひて——能く變化せしめん。此榮光は常に彼等の目の前にありて、彼等片時も之を見失ふこと無きが故に、彼等が之を享得するの力は日に月に増しゆかんのみ、而して彼等は尙ますます天において「榮に榮いや増さりて其同じ形像に化らん」とす(哥林多後書三章十八)。百事皆一擧にして完たうせらるゝには非ず。信仰と望とは既に目見に吞まれたれば、信仰と望の日は早や過ぎんと言ふは只これ或る點まで眞なる者のみ(哥林多後書五の七、羅馬書八の二十四)。それ信仰と望は、愛と同じく、是れ「常に在る者」にして、聖徒が其知られし如く知らん時にすらも尙のこらん(哥林多前書十三章十二、十三)。如何となれば善の無盡藏なる源よりして無限の徳化は必ず常に抽出し得らるべき者たるべければ也。幾たびか世去り世來りても、救はれたる人々より見れば、宛がら神の榮光を只今感じ始めたる者のごとく、又只今之を感じることを得はじめたる者のごとく思はる。聖徒の永生は、地上に於けるが如く、天上に於ても神を瞻るに存す、而して吾人は彼の永生が力量に於て廣がり且増すことを止めんとするが如き經界の有ることをば絶て知らず。

自身において完全にして、又神と完全なる關係をたもちをれば、彼等は完全なる周圍物中に生活せん「世界と完全なる關係をたもたん」。夫の「義が其中に宿る新らしき天も新らしき地」(彼得後書三章十三節)は彼等に與ふるに享樂、驚歎および感謝を惹起すべき果しなきの領分を以てせん。

固より天は一箇の處には非ず、されど是は救はれたる人々が連なるべき千萬無量の事物を表す。此世にて神が五官に與へたまふ快樂は、彼の世にては遙かに榮化せられ靈化せられたる姿にて顯はれん。基督教にて想像する天は決して肉情的なる者には非ずと雖ども、我等は之を單純無智なる小兒然たる人々の毫も悦ばざるが如き然か甚だしく靈なる、然か甚だしく觀念一片なる國を思想することを要せず。彼處にては其變化したる身軀に應ずべき變化したる物象あらん、而して之に對する關係は完全なる關係ならん、——即ち奴隸たるの關係にあらざ主たるの關係ならん、——迷ひて彼處や此處に攫むの關係にあらざ、自由安樂の關係ならん。新約書中の某句を誤つて釋くに非ざる以上は、我等謂はざるを得ず彼の榮化したる世界に對する我等の關係は單に道徳上の自由たるに止まらず、亦是れ直接に支配するの事たるべし。我等は萬物に對しては今天使が有する地位を彼の時に占むべき者とす。其時には我等は今天使に及ばざる件々に於て——即ち靈徳、專念、悟入、秩序、聖潔、敬虔等に於て——「天使に伴しく」なりつゝ(路加二十の三十六)、創造の當初委任せられたる職掌(創世記一の二十八)を完全に盡くすを得べし。否な、今日にありて専ら美術的なる解説、および想像的なる工夫に用ひらるゝ諸能力かの時には或は實地に創造するの力ともならん、而して新たなる領分ども或は神の子どもの手もて其御父の榮にまで造り出されんも知るべからず。

救はれたる人々相互の間における關係は其完全なること決して彼等が更新の萬物に對するの關係に譲らず。キリストに於て萬人が完全に一致せんことは我等が企て望みつゝある榮光の一大部分たる也。但し箇々の靈魂が天上にて享くべき特別の歡樂の如何なるかにつきては、殆んど聖書の